

---

# **死神亞種**

羽月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

死神亞種

### 【Zコード】

N2184R

### 【作者名】

羽月

### 【あらすじ】

下校中、黒猫と出会った私。目の前にもふもふが……！これは是非にもふもふを堪能したい。ただそれだけだつたのに……。トラブルに巻き込まれかけた黒猫を助け、私は多分死んだのだろう。あれから早5年、私は今、死神育成学校——通称『死学』<sup>しにがく</sup>の2年生である。マイペース過ぎる主人公が繰り広げる「メティーア小説です。今の所シリアスの欠片もありません。

〇〇〇 プロローグ（前書き）

初投稿です。どうぞ宜しくお願い致します。

## 〇〇〇 プロローグ

現日本において、黒猫といえば不吉を呼ぶものという印象がある。しかし、実は江戸時代あたりでは魔除けや厄除けなど、幸せを呼ぶものとして親しまれていたようだ。外国でも幸せの象徴となつてゐる地域もある。

私の見た黒猫は前者か後者か…………どちらだったのかは分からぬ。

夏の夕日を浴びながらの下校中、私の目の前に黒猫が現れた。9月中頃の夕方はまだ暑い。午後の体育でバスケという夏には地獄の種目を行い、上着が絞れる程の大量な汗をかいだといふのに、また次から次へと汗が滲み出でくる。不快度が最高潮だ。帰りにコンビニへ寄つてアイスでも、と思っていたのだがそんな思考は瞬時に何処かへと吹き飛んだ。

キラキラと宝石を嵌め込んだかの様な透き通つた綺麗な蒼い瞳、  
触り心地が良さそうな艶々の黒い毛、スラリと伸びた足――― 目  
の前の黒猫はかなりの美人さんだ。

…………アリエル。……うん、しつくりくる。アリエルつて  
雰囲気を醸し出している様な感じの黒猫さん。どんなだよと突っ込  
まれそうだが私には他にピッタリな言葉が見つからない。アリエル  
はアリエルだ。私の中でこの日の前に佇んでいた綺麗な黒猫をアリ  
エルと命名する事に決定した。

私は動物が好きだ。見かけたらもふもふしたい、出来る事なら全  
力で。しかも今回は滅多に見かけない程の上玉。是非とももふもふ

……せめて一撫でだけでも触りたい。

私はアリエルの隙を伺っていた。道端で手をわきわきしながら姿勢を低くし、いつでも飛び付く事が出来るよう体制を取った私と、  
私を引いた様子で見ながら体勢を低くし、物凄く警戒心丸出しな様子でじりじりと後ずさる黒猫。<sup>アリエル</sup>怪しい事この上ないがそれが何だと  
いうのだ。もふもふ天国を味わえるのなら人目など気にしない。今  
通りがかつたオバサンが異様なものを見る目でこちらを凝視してい  
たが知らない。私、今それ所じゃない。

かれこれ5分ほどこの静かな攻防戦を繰り広げているのだが、どうしたものか。相手に全く隙が出来ない。…………アリエル、やり

あるな。

しかしそろそろこの体勢もキツくなってきた。何せ5分と言えど  
ぶつ通しで中腰状態を維持しているのだ。…………もうこれは軽く筋ト  
レである。部活をしていない上に体育の授業も適当に動いている為、  
ここ2年ほど運動という運動をしていない。そんな身体が鈍りに鈍  
り切つた女子高生には物凄く辛い。

足が限界だと思ったその時、アリエルが動いた。――しまつ  
た、見事に隙をつかれてしまった。

一步出遅れて後を追うが追いつけるだろうか？ああ、私のもふも  
ふ……っ！

もふもふ求めて全速力で突っ走る私。全てはもふもふの為、錆び  
付いた身体を叱咤し稼働させる。

もふもふしたい、もふもふしたい、もふもふしたい……っ！

頭をもふもふ天国が占拠した。私は目の前のもふもふ求めてまつ  
しぐら。

人間って凄い。ってか私って凄い。私、やれば出来る子だった。  
3メートル、2メートル、1メートルどんどんアリエルとの距  
離を詰めていく。ふぬう……、あともう少し……っ！

アリエルが私との距離を測る為かチラリと振り返り、その綺麗な眼を見開いて仰天する。……それはそうだろう。普通の人間の所業ではない。

その光景を見た彼女は軽くパニックになつたのか、今まで直進していたコースを急に直角に曲がつて道路に飛び出してしまつた。彼女を目で追えば、そこへスピードを出したトラックが突つ込んで行くのが見える。

ブレー キは——間に合ひそうにない。

「危<sup>あぶ</sup>……ツ——！」

間に合え、とこれでもかといつぐらい足に力を入れて踏み切り、私もアリエルに続いて跳んだ。

足元を流れる白いガードレール、トラックのけたたましいブレーキ音、誰かの悲鳴。

自分以外の全ての時間がスローモーションのように過ぎていく。今なら過ぎ行く足元に転がっている石を数える事だつて出来るだろう。

——だが私の意識は全て目の前の黒猫へと注がれた。

もふもふは正義！アリエルは正義！私が護らなければ……ツ——！

懸命に伸ばした両手でガツチリとアリエルをキャッチし、自身が空中に浮いたそのままの状態で最後の力を振り絞り、ぽーんと彼女を放り投げた。

助け方が少し乱暴になつてしまつたが、猫だから着地はお手の物だろう。

予想通りアリエルが向こう側へ華麗に着地したのを見届け、私の

視界は暗転した。

〇〇〇 プロローグ（後書き）

誤字・脱字などあれば報告して下さる有難いです

（ 、 、 、 、 ）

001

歴史のテストは赤丸一つ（前書き）

ごめん宜しくお願ひ致します。

「では明日はペアを発表します。今日は「こままで」

授業終了のチャイムと共に教師が終講の号令をかける。号令をかけたのは先程までのHRを仕切っていた担任のイズミ先生という女教師だ。少しウェーブのかかった長い翡翠色の髪を一つに括ったその物静かな美人さんは正にクールビューティーという一つ名を付けたくなってしまう。やはりというか、多大な男子生徒の人気を誇っている彼女。しかし、怒ると物凄く怖いので誰も表立つてアタックを仕掛けようとはしない。影でファンクラブなるものが出来ているらしいと聞いた事があるが、イズミ先生にもしもバレたら……いや、私無関係だし、考えるのも怖いので止めておこう。

「ヒイラギ、後で職員室に来なさい」「了解です」

教室を出ようとした際、イズミ先生が立ち止まって私に告げる。お呼び出しを喰らったのはこれが初めてではない……寧ろ常習犯だ。私は慣れた様子で返事をした。

今回のお説教の原因は先ほど返却されたこの歴史のテストの答案用紙。右上に書かれた大きな赤丸…………つまり〇点を取った事だろう。私は落ち込む事もなくその紙切れをボーッと眺めた。

「またやつたの?ヒイラギ」「サカキ」

後ろから答案用紙を覗き込み、呆れた様子で話しかけてきたのはサカキだ。彼女とはそこそこ仲良くさせてもらっている。腰まで流れれる綺麗な紺色のストレートを揺らしながら席に座っている私の前へ回つて来た。私はそれを見届けた後、へりりと笑つていつもの言葉を口にする。

「うん、やつちやつた」

「やつちやつた、じやないわよ」

眉間に深い皺を寄せながら腰に手をあてて見下ろしてくる美人な

彼女。……うん、凄い迫力だ。

彼女は今だへらへらと笑いを浮かべている私から答案用紙を奪つて一瞥し、更に深く眉間に皺を寄せた。……どこまで深く皺を寄せることが出来るのだろうか? ちょっと気になつたが、それを言うと絶対殴られるのでお口チャックで黙つておく。態々わざわざ痛い思いなんてしたくはない。

「笑つてる場合じゃないわよ。〇点で……しかもコレ何?」

「ん? ……ああ、暇だつたんだよ」

彼女が指をさした先には簡素な家が描かれていた。他にもそれよりはもう少し大きな家や星、ロケットなどが解答用紙の至る所に描かれている。所謂、一筆書きというやつである。

それが何でもないかの様な態度の私へ、彼女はジロリと睨むような視線をくれた。一見キツく見えるこの視線にも慣れたものだ……まあ慣れてしまう程までにこの視線をもらう様な事を今まで私がしてきただが。

サカキ、すまん、と心中で謝りながら私は平然とそれを受け止める。しかし何度もそれをくれた所で私は自身を改めるつもりはない。さつさと諦めると良いと思う。

「テスト中に暇つてのアレだけビ、落書きつて……解答欄は真つ白じゃない」

「まあ毎回の事だよね」

あははと笑う私にもう怒る氣も失せたのか、サカキは深い溜め息を吐き出して解答用紙を返してきた。私はそれを受け取り、鞄の中にはがそー♪セと仕舞う。

「ヒイラギ、このままじゃ留年するわよ?」

顔を上げると心配そうにしているサカキが視界に入った。彼女は何だかんだ言いつつもこいつやつていつも心配をしてくれるのだ。心配なら心配と最初から言えれば良いのに必ず怒る所から始まる不器用なサカキさんである。

今日も今日とて心配そうに忠告してくれる彼女の様子に自然と笑みが零れた。

「大丈夫だつて。心配してくれてありがと」

「大丈夫なわけないでしょ。どつからその自信が来るのよ。赤、しかも〇点取つてるのよ?こんな解答欄が白紙状態で追試大丈夫なの?」

「大丈夫大丈夫。今までコレで2年まで上がれてるし」

「いや、確かにそつなんだけど……」

「じゃ、そろそろイズミ先生が待ちくたびれてるだろ?から怒られる前に行くね」

「あ、ちょっと…」

まだ言い足りないといった様子のサカキを残し、教室を後にする。彼女は凄く心配性というか何というか……。毎回心配してくれるので

は有難いが、いつもそれは杞憂に終わっている。いい加減信じて欲しいものだと思うが、多分何を言つても無駄であろう。

私は早々に諦め、今日の晩御飯は何かなど考えながらのんびりと階段を下りていった。

教室を出て約2分。私は職員室前まで辿り着いた。

同じ事情で此処へ来るのは何度もだろうか。面倒臭いなと溜息を吐き出しながら2回ノックし、ガラガラと少し重たい扉を開ける。

「失礼します。2年C組のヒイラギです」

「……座りなさい」

イズミ先生に促され彼女の机の傍にセッティングされた、もう私用と言つても過言でない椅子によいしょと腰掛ける。尻に馴染んだそれがギシリと音を立てた。馴染む程までに何度も座るとかどうなんだろうと一瞬考えたが、まあ愛着も湧いたし良いとしよう。……いや、良くはないか。面倒臭いので出来れば何度も通いたくはない。イズミ先生は私が大人しく座った様子を確認すると、手元で作業していた書類を机の端にバサリと置いてこちらへと向き直った。予想通り、彼女の眉間に皺が寄っている。

「何故呼び出されたかは……もづきつまでもないわね？」  
「はい。コレですよね？」

私はそう答えて鞄の中から例の紙切れを取り出し、イズミ先生に提示した。

先程無造作に鞄へ突っ込んだせいか、所々ぐしゃりと皺になつてゐる。まあ破れてはいないので見る分には問題ないだろう。

イズミ先生はそれを一瞥し、皺について特に何かを言う事はしなかつたが少し眉間の皺が深くなつた。……ちょっと気になつたらしい。すみません。

私があははーと笑つて誤魔化していると、彼女は視線を紙切れから私に移し、もう幾度と聞いた台詞を吐き出した。

「……そう、それ。文字は名前の部分しか書かれていないわ。何故何も書かないの?記号選択の問題もあつたでしょ?」

「分からなかつたからです。覚えてませんから」

同じくしてこちらも幾度と吐いた台詞をしつゝ言つ私に片手で顔を覆いながら深い溜め息を吐くイズミ先生。哀愁が漂つていてなにやら大人の雰囲気……って、見惚れる場合ではない。いかんいかん。

「貴方に何を言つても無駄なのかしら?」

「そうですね」

説教聞きながらも早く帰してくれないかな、とか思つてるし。淡々と続けるこの遣り取りは最早職員室での恒例行事と化している。無駄なのか、と尋ねつつも無駄な事であるとイズミ先生も分かっている様だ。彼女はまた深い溜め息を吐き出した。

「この死学始まって以来だわ、貴方みたいな人は」  
「はあ」

またもや私の適当な返事にイズミ先生は呆れきつた様子で「もういいわ」と仰つた。これが説教終了の合図だ。

私はそのお言葉に甘えてちやつちやと帰させて頂く。失礼しましたと形ばかりの礼を取り、私は第一の我が家へと足を運んだ。

—— そう、私が今いる此処は日本ではない。そして地球で  
らない異世界なのである。

アリエル  
黒猫を助けて事故にあつたあの日から早5年。私はこの異世界『  
イグラント』で死神育成学校、通称『死学』の2年生をしているの  
だ。

001

歴史のテストは赤丸一つ（後書き）

誤字・脱字などあれば報告して下さると有難いです

（、・・、）

本日もどうぞ宜しくお願ひ致します。

私の第一の家は森の中にひっそりと佇んでいる。そしてそこは死学からそんなに離れていない。寧ろ近い。詳しく言つと死学の裏手の森に入つて徒步5分程で到着してしまう。

第一の家——つまり日本の家にいたときは学校まで徒步と電車の乗り継ぎを経て、移動時間は合計1時間近くかかっていた。電車内で寝てしまつて、「はて?此処は何処?」なんて惨劇もちらほら。勿論遅刻だ。開き直り、屋台のヤキソバを求めて近くの海に行つたことが懐かしい。そんなこんなで私からすれば近距離というだけでとても良く良物件に思える。今まで移動に費やしてきた時間を他人にあてられるのだ。睡眠とか睡眠とか睡眠とか……とにかく睡眠を遅刻ギリギリの時間まで貪り尽くしたい。一度寝二度寝と時間の許す限り繰り返し、至福のあのまどろみの時間、寝落ちする瞬間を味わうのだ。……嗚呼、近いって素晴らしい。ブラボーう。

そんな目と鼻の先にある我が第一の家だが、その存在を知るもののは殆どいない。原因はこの家の主、タチバナさんだ。

「お帰りー  
「ただいまっス

死学を出発して早々帰ってきた私を家の前でのほほんと迎えてくれた年齢不詳なお姉さん。サラサラショートの金髪にエメラルドグリーンの瞳、陶器のような滑らかで白い肌、そして完璧なボディーラインというラスボスも裸足で逃げ出すと思われる最強防具を惜しげもなくフル装備。彼女がニツコリと微笑めば一体何人の男共が貢物を捧げるのだろうか。下僕志願者も続々出てきそう……怖い怖い。

目の前の人物はそんなことを一つ一つ考えてしまつぽどのものす」い美人、正に生きる芸術。それがタチバナさんだ。

「ヒイラギー、紅茶飲みたいなー」

「了解っス」

「ありがとー」

「いやいや、タチバナさんもお疲れっス」

「いえいえー。あ、ミルクティーが良いなー」

「うつス」

シャキシャキと体育会系の返事を返す私。タチバナさん相手だと条件反射でこうなつてしまふのだ。

まあそんなことより今は任務を遂行しなければ。生きる芸術タチバナさんの御所望、ミルクティーを入れるために、私は目の前に佇んでいる2階建てのカントリー風な我が家へと足を踏み入れた。

間延びした喋り方にこの姿、そして輝かんばかりの笑顔。思わず護つてあげ…………いやいや、馬鹿を言っちゃいけない。

この人はこんなナリをしているが見た目だけで判断すると酷い目に遭う。現に先ほど私を迎えてくれたタチバナさんの手には誰が見ても彼女には相応しくないとと思うだろう大きな斧が装着されていた。それを片手で軽々と振り下ろし、木をぶつた切つている。スコンスコンと小気味良い音を奏でながら鼻歌まで歌っている様はまるで夕飯の為に包丁でキャベツでも刻んでいるかのようだ。だが、か細い腕から放たれるこの一撃一撃はそこらのマッヂョー」ときじゃ足元にも及ばない。違和感を抱かずにはいられないこの光景…………私は慣れるのに1年ほどかかった。

彼女はどうやら新割りをしてくれていたようだ。私がやると半日仕事なそれを彼女に任せるとあつという間に終了するのでとても助かる。

話は戻つて、何故この家の存在が知られていないことの原因がタ

チバナさんのかといふと、彼女がこの家周辺に結界を張っているからである。この世界には魔力というものが存在するのだが、それが並大抵の力の持ち主ではこの結界に気付くことすら出来ずにつり過ぎていく。結界に触った瞬間、森のどこか違う場所にワープしてしまうのだ。森の中はどこも同じような景色なので知らないうちに強制ワープさせられ「此処は何処なんだ」と迷子になる人が絶えない。故にここは「迷いの森」と安直な名前で呼ばれている。

傍迷惑極まりないが仕方ないとも思う。こんな恐ろしい美人が一人暮らしをしているのだ。襲つた奴らの方が心配である。絶対に無事では済まない。何故森の中なんか本人から詳しくは聞いてはいけないが、多分アタックする奴やら襲う奴が押しかけてきてタチバナさんの返り討ちに遭うということが繰り返されてきたからだろうと私は推測している。そりやあ鬱陶しくもなるもんだ。私だって同じ日に遭えば森に籠ることを躊躇いなく選択する。

「ふー、いい汗かいだー」  
「そんな涼しそうな顔して……汗なんて一つも搔いてないじゃないつスか」

色々考へている内にタチバナさんが仕事を終わらせ家へ入ってきた。先ほど家の前で山済みにされた薪を見たのだが……汗一つ搔いてもいのいのは流石といったところか。「ふいー」と汗を拭う振りだけをしている。毎回思うが彼女は化け物だろうか…………思つても勿論口に出すことはない。断じてない。理由は言わずもがな。心中だけに留めておく。

タチバナさんが椅子に腰掛けたので今入れたばかりのミルクティーと昨日作つておいた紅茶のクッキーを棚から出して彼女の目の前に置く。紅茶紅茶しているがまいいだう。

「ありがとー」

「いえいえ」

優雅にミルクティーを口へと運びながらもそもそもそとクッキーを齧るタチバナさん。美味しい美味しいと合間に言いながら食べる様は、仕草は上品だが何だか小動物を見ている気分にさせる。

私は5年前にこの人に拾われた。

5年前の真夜中、私はこの世界では異質な制服姿を入れるはずがない結界内のタチバナさん宅に突然訪問したのである。そのときタチバナさんは目を丸くし少し驚きを見せただけで怪しかつたに違いない私を快くこの家に入ってくれた。

異世界から来たからだろうか。よく解らないが私はこの結界にすんなり入ることが出来る。初めは通じなかつた言葉もタチバナさんが何か呟いた後通じるよくなつた。恐らく魔法だろう。ファンタジー小説やらにお決まりな事だが、それがとてもなく有難かつた。……異世界で言葉が通じないと考えただけで恐ろしすぎる。実際、最初タチバナさんから発される言葉が理解できなかつたときは軽く絶望した。

それから事情を話し、結果、この家に置いてもらえる事になつた。右も左も解らない、言葉すら通じない状態だったのを助けてもらつたのだ。感謝してもしきれない。タチバナさんは私にとつて恩人であり、第二の母のような存在である。

因みに1年前から死学へ通うようになつたのは自主的に行こうと思つたのではなく、「明日から死学に行つてらー」とタチバナさんが私に言つたからだ。既に手続きを済ませた後で急に言わされたのでビックリした。拒否権は勿論ない。宣告された時点ではそれは決定事項なのである。

まあ学校ではそれなりに楽しくやつてるので今では感謝してい

る……が、急に言わないでほしい。私にだつて少しばかりは心の準備といつものがある。

しかしそれを「」の人に言つたところが意味はない。……諦めが肝心である。

「今日学校どうだつたー？」

「呼び出されてまた言われたつスよ。あー、明日はペアが発表されるらしいっス」

「あーペアねー。気に食わなかつたらやりたいようこせれば良いよー。ヒイラギの場合言わなくともそういうするだろハナビー。うふふー」

「そうつスね」

会話をしながら私はタチバナさんにカバンから出した例の紙切れを渡す。タチバナさんはそれを受け取り、幾許か眺め、指をさす。

「これなにー?よく解なんないけど何か凄いー」

「あー、それは一筆書きとつてですね、ペンを一度も紙から離さずに絵を描くんスよ」

「へー、落書きなのに頭使うんだねー。この不思議物体は何ー?」

「口ケツトつス」

「なるほどー、よく解んないー」

「宇宙に行ける乗り物つス」

「おー、すげー」

興味津々できいてくるタチバナさんに一筆書きを教えたり、くだらない話をしたりして今日一日を終了した。

因みに赤丸をとつたことに対する叱りはなく会話をすり出していくことはなかつた。



誤字・脱字などあれば報告して貰うと有難いです  
（ 、 、 、 ）

本日もどうぞ宜しくお願ひ致します。

朝、許される限りの惰眠をむさぼり、まだパジャマ姿のタチバナさんに「遅刻しても良いけどすっ転ばないでねー」という注意を受けつつ我が家を後にしてた。

私は一定の速さで足を運んでいく。森を抜け、昇降口を跨ぎ、私はチャイムと共に教室へ足を踏み入れた。遅刻ギリギリである。タチバナさんの注意を守る為、勿論歩いた。家から学校までの距離と時間の計算は我ながら完璧だ。

私は満足して窓際最後列の自分の席へと着席した。つむ、ベストポジション。

「おはよ。今日もギリギリね」

「おはよ。計算通りなのだよ」

「……そんなことに頭使わないで歴史覚えるとかしたら良いのに」

隣の席からサカキが話しかけてくる。…………ってかまだ歴史のテストの赤丸気にしてたのか。本人より気にするつてどうよ？

「髪もボサボサだし……いい加減直してから来なさいよ。折角綺麗な髪してるんだから」

ぶつくさ言いながらサカキは櫛を片手に持ち、私の明るい茶髪に触れてせつせと寝癖を直してくれる。いつも寝癖をそのままに登校していく私に見かねた彼女が直してくれるので。これはもはや日課となっている。

スッと通る櫛の感触の心地良さに思わず頬の筋肉が緩む。サカキ

を振り返りへりりと笑いながら「ありがとー」と礼を述べると彼女は「次は自分で直しなさい」と言つてそっぽを向いてしまつた。相変わらず手は優しく髪を梳いてくれているし頬が少し赤い。今日も良いツインテレ具合だ。

私がにやにや笑つているとサカキは誤魔化す様に話題を変えて話しかけてきた。

「早速朝からペア発表らしいわよ。今、黒学くろがくの生徒を講堂に詰め込んでる最中らしいわ。さつきイズミ先生が連絡してそのまま行つちやつた。大変そうね」

「ふーん」

「ふーんてあんた……他人事じゃないのよ? ペア決まっちゃうのよ? 3年間ずっと一緒になんだからね?」

わかつてんの? と私に言い寄るサカキ。近い近い、顔が近い。そんな美人顔で迫られると惚れてしまうではないか。勿体無いことに相変わらず彼女の眉間に皺が刻まれているが……いや、私のせいなのだけれども。

サカキがさつき言つた黒学とは『悪魔育成学校』の事である。悪魔育成学校、通称『黒学』。その名の通り悪魔を育成する学校の事である。

私達が通つている死学は7年制だ。1年のときに教科書を使った勉学、そして2年になるとそれの他に黒学の生徒とペアを組んでの実習が組み込まれてくる。ペアは2年から4年の3年間、そして5年から7年の3年間で計2回組む。今決めるペアは5年になると組み直される。つまりどんなに気に食わない奴でも1回ペアを組まってしまうと3年間ずっと行動を共にしなければならない。ちなみにペアはくじ引きで決まるので運に任せるとしかない。

何故黒学と共に実習を行つかというと、死神は悪魔が弱らせた人間の魂を狩るのが主流だからだ。世の中の死神は殆ど悪魔とペアを

組んでいる。実習はその予行練習といったところだ。勿論悪魔が関与していなくとも弱つていてる魂があれば狩るのだが、明らかに悪魔が弱らせた魂の方が多い。

逆に弱つた魂を癒すのが天使だ。彼らは『天使育成学校』、通称『白学』に通つているのだが、何せ性質が正反対な為、黒学のようになりやつて実習することはない。

「全員講堂に向かいなさい」

ガラガラと教室の扉が開き、顔を出したイズミ先生声を掛ける。どうやら準備が整つたようだ。

丁度寝癖も直つたらしくサカキが「出来たわよ」と私の頭をぽんと叩く。寝癖だらけだった私の髪はサカキの手によつて気にならない程度に見れるまでのセミロングを取り戻していた。所々重力に逆らつているツワモノもいるがこれは中々直つてくれないので仕方がない。

「ヒイラギ、行こ」

「うーーー」

ぞろぞろと移動するクラスメイトに加わり、私達も移動を開始する。移動中ざわざわと話す生徒から期待や不安、緊張など、様々な感情を読み取ることが出来る。

おーおー忙しいことで。

「ねえ、悪魔つてどんな奴ら？ 黒い翼バサバサ広げてげへげへ笑つてんの？ リンゴが好きなの？」

私の質問にサカキが噴出した。

「何それ！？どうからそんな話聞いたの！？ってかリンクって何！？リンクゴー！？リンクってあのリンクゴー！？」

リンクゴンゴと連呼するサカキ。もつすぐ私の中でリンクがゲシユタルト崩壊を起こしそうだ。そんなにリンクが気になるか。

この世界の物は何故か基本地球と同じである。私がリンクと認識しているものはこちらの世界でもあくまでリンクだった。たまに色が違うものがあるが、あまり困ることは無い。一から覚えなくて済むのは大変助かる。

しかしこの反応を見る限り、どうやら私の考えているものとは違つたらしい。私の中の悪魔像は、黒いノートを持ち歩いているリンク好きで小糸な彼なのだが。……って、あれ？死神だっけ？

まあどちらにしろそれを言つたところでどうせ通じやしないので

「いや、まあ色々」と誤魔化す。

実は、私は悪魔というものを見たことがない。今までの5年間、結界が張られた範囲と学校の間しか移動したことがないのだ。学校内でも先輩悪魔と接触するどころか遠目に見ることすらなかつた。

「悪魔なんて外出ればそこらへん飛んでるのに出合つたことがないなんて……ある意味凄いわね…………まあいいわ」

今まで私が何処で何をしていたのか気になつたのだろう。一瞬疑問を口にしそうな彼女だったが、今更私の非常識っぷりに突つ込んで仕方ないとthoughtのか、それを問いただすことはなかつた。私の扱い方が少しづつ解つてきたようだ。順応能力はそこそこ高い彼女である。

ふう、と溜息を一つ吐き出し、サカキは無知な私に懇切丁寧に説明してくれた。いつもすまんね。お礼はお皿のおやつに持つてきた紅茶クッキーを3つほど分けてあげよう。タチバナさんのために焼いたやつの残り物だが、そんなこと言わなければわからない。わか

るのは私とタチバナさんだけである。

おつと、また思考を変な方に飛ばしてしまった。ちゃんと説明聞かなきや怒られるので彼女の言葉に耳を傾ける。最初の方は聞いてなかつたので途中からだが……まあ問題ないだろ。大丈夫大丈夫、ごまかしは得意だ。

「…………で、彼らは皆外見は綺麗よ。美男美女ばかり。きっと人間を騙す為にそういう遺伝子を持つているのね。揃つて髪は黒、瞳は赤と決まっているわ。色は自由に変えられるらしいけどそれが元の色。肌の色は黒が多いけど白い肌を持つている悪魔もいる……まあ少ないけどね。黒い翼はあるけど消せるの。邪魔だから使うとき以外は消しているみたい」

「ほうほう」

さも今まで聞いてましたよといつた風に相槌を打つ。どつかの小説でそんな設定を読んだことがあるよつな、ないよつな。そんなことを考えながら彼女の説明を聞く。

「ただし、性格が最悪なの。乱暴者や捻くれてるのが多いわ。彼らとそれなりにやつしていくにはかなりの精神強化も必要よ」

「わあ、めんどうさせ」

「ええ、扱いは難しいと思うわ。私達はこの実習で手綱<sup>わざ</sup>捌<sup>く</sup>きを磨かなきゃいけないの。私も気が重いつたら……ああ、でも美形……」

「…………」

…………どうやらサカキにとつて美形という点は性格云々をも見事に弾き飛ばしてしまうほど最重要事項らしい。美形が正義ですか。

美形ならなんでも良いですか。そうですか。

過去に見かけた悪魔でも思い出しているのだね。彼女はうつと

りとした表情を浮かべている。説明を聞いていたる最中、サカキは実習大丈夫だろうかと一瞬考えたが、この分だと彼女は強<sup>したた</sup>かにやつていいきそ<sup>う</sup>だ。心配するだけ無駄、杞憂に終わりそうなので放つておこう。

「いやいや」と話しているうちに二つの間にか講堂前に到着していた。2年生全員が集結しているので凄い人数、まるでちょっとしたライブ待ち状態である。人ごみの上からちらりと見える扉は閉まっているのでまだ入室はできないらしい。いつまで待たせるのだろうかと思いつつ扉を眺めていたら、イズミ先生のよく通る声が響いた。

「扉を開くので順に入つて着席してください。席は開いているところなら何處でも良いです。……決して惑わされないよ」

そういうて先生は講堂の大きくて頑丈そうな両開きの扉を押し開いた。

誤字・脱字などあれば報告して貰うと有難いです  
（ 、 、 、 ）

004 手綱の行方（前書き）

本日もどうぞ宜しくお願ひ致します。

バタンと大きな音を立てて講堂の扉が開かれた。

今までざわざわとくつちやべっていた生徒達が黙り、途端に静かになる。私は最後列辺りにいるのでまだ中の様子を窺うことは出来ない。

続々と死学の生徒たちが講堂内へと入っていく。そこでふとあることに気がついた。

先頭群、つまり中の様子を窺うことが出来る集団の顔がほんのり赤い気がする。頬を赤く染め、フラフラと入っていく死学の生徒達——それはまるで恋をしているかのような……っておいおい、マジかよ。手綱はどうした。華麗に捌くんじゃないのかよ。お前らが捌かれてどうするよ。

誘導する先生達もその様子を目の当たりにして心なしか顔が引きつっているように見える。「やつぱりか」「またかよ」みたいな心の声が聞こえてきそうである。つい先程注意したばかりだというのも拘<sup>かかわ</sup>らずこの有様。確かにこれは厳しい指導が必要になりそうだ……お疲れ様です。

少しずつ順番待ちの数が減つていき、やっと中の様子が窺える所までやつてきた私は、どれどれと黒学の生徒を拝見……しようと思つたのだが、急にガツシリと手を掴まれたのでそちらに視線をやる。掴まれた手を徐々に逃っていくと、そこには頬を染めて目をキラキラさせた恋する乙女なサカキさんがいた。うわあ、やつぱりお前もか。

ぎゅうぎゅううと……いや、ぎゅぎゅうと握り締めてくる手を苦戦しつつも引き剥がす。アナタ握力どんだけあるんですか。手を見ると赤くなつていた。痛い。……やっぱりクッキーは一人で食べる」と

にしよう。

今サカキに文句を言つても無駄だ。絶対私の言葉なんて右から左へスルツと通り抜けてしまう。

抗議を諦めて今度こそ講堂内へと視線を向け

「…………何じやこりや」

あまりな光景に思わず声に出してしまつた。顔も思いつきり引きつったかもしれない。

そう、この場面を一言で表すならカオス。此処はいつからホストクラブになつたのだろうか……あ、ホステスも発見。

この部屋の空氣は何か濃い。何がつて、あれだ、おそらくフエロ

モンとやらが。発生源は勿論黒学の生徒達である。

お前らは蝶々か何かか。悪魔が鱗翅類りんしゅるいだつたとは初耳だ……フエ

ロモンなんて鱗粉みたいにやたら滅多に振りまくものではない。

まだ一步も足を踏み入れていないので私はフエロモン酔いなるものを初めて体験した。勿論気分が悪くなる方、悪酔いである。彼らの濃すぎるフエロモンが私の自律神經失調を引き起こしたようだ。気分は最低最悪。そして若干吐きそうだ。

吐いたらテメヒラのせいだぞ……もしもゲロリンする羽田になってしまつたら投下地点は奴らの頭の上にと心に決める。

思わず悪酔いしてしまうこの空間。正直このまま回れ右をして出て行きたい。身体は正直なものだ。そう思った瞬間私の身体は素早く回れ右を――

「ヒイラギ、こいつち空いてるわ」

私が走り出すよりも一瞬速く、サカキの手が私の腕をガツシリガツチリとホールドしてきた。今度は更に強い力で締め上げてきやがるので振りほどくことが出来ない。

一つ断つておくが、決して私は非力なわけじゃない、寧ろどちらかといえばかなり強い方だ。リンゴだって握り潰せるし。そんな私でも歯が立たないなんてサカキがおかしいだけである。そしてもうとおかしいのはタチバナさんである……彼女までいつてしまうと、もはやバケモノ級であるが。

目で訴えてもサカキが私の腕を放す様子はない。私の逃亡は阻止されてしまった……なんてこと。

無駄に馬鹿力を発揮したサカキにズルズルと引きずられ、私はついに講堂へと足を踏み入れてしまった。

「うぐつ……！」

ちょっと待て。

何だ？ 何だかべらぼうに臭いぞ此処。

強烈な香水を鼻に塗りたくられたような感覚だ。鼻がツ鼻がへし折れる……ってか何で他の奴ら恍惚とした表情してんの？ 鼻イカれてるの？ そうなの？

「早く早くつ」

容赦なく私を引っ張つて行くサカキ。テンションがいつもの5割り増し高い気がする。

一方私の気分は優れない。奥に進むにつれて頭も痛くなってきた。何コレ。

思わず片手で鼻と口を覆つた。……少しさはマシになつた気がしないでもない。着席するとサカキの手が離れたので今度は両手で覆う。……うん、これなら何とかギリギリいけそうだ。

隣に座つたサカキを見ると彼女の向こう側に腰掛けている黒学の生徒と楽しくお喋りを開始していた。早くも丸め込まれているように見えるのだが……サカキよ、手綱を何処へ投げ捨てた？ そそくさ

と拾つて帰つてきなさい。

私の投げかける生暖かい視線にサカキが気づく様子はない。

それから暫く、口と鼻を両手で押さえつつ横目に恋する乙女まつしぐらなサカキを写す他、特に何をするわけでもなくぼーっとしていた。大分吐き気も治まってきたので周りを見回してみる。先程は吐き気やらなんやらでそれどころではなかつたのでゆっくりと観察することができなかつたが、なるほど、美形揃いだ。サカキの説明通り、黒髪に赤目の美形集団が講堂の半数を占めている。慣れない色彩を見ているからかちょっと…………いや、かなり不気味だ。サカキによると悪魔は乱暴者や性格がひん曲がっている奴が多いらしいが、今のところそれはわからない。ホストとホステスだ、くらいしかわからない。

今、講堂内にいる教師は2人だけだ。死学と黒学それぞれ一人ずつ講堂の隅っこに立つていて、親睦を深めるようにだか何だか言って残りの教師は出て行つたのだ。なので現在フリーータイム。そこかしこで大人数が喋りまくつてしているので騒々しい。そしてその光景は親睦を深めているというより、ホストもしくはホステスが客に相手しているようである。……何度も言うが、此処は学校の講堂内である。決して夜のお店ではない。

私はホストと馴れ合つ氣は更々ない。  
面倒臭いし寝てしまおうと、私は机に突つ伏した。

004 手綱の行方（後書き）

誤字・脱字などあれば報告して貰うと有難いです  
（ 、 、 、 ）

005 錦糸遊戯で煙草を體験（前書き）

少しばかりの流血表現があります。本当に少しばかりですが。

本日もどうぞ宜しくお願ひ致します。

「おはよ！」

机に突っ伏してから早々寝るのを諦め、しげしげと講堂内を見回していた私。こんな五月蠅いところで寝られるわけがなかつたのだ。そんな私に冒頭の挨拶が隣から飛んできた。見回していた目線をそちらに向けると黒学の男子生徒が二コ一コと胡散臭、……いやいや、一見人当たりのよさそうな笑顔を私に向けていた。悪魔なのでもれなくこいつも美形である。出来るだけ関わりたくないが、何かされたわけではない。ただの挨拶だ……無視するわけにはいかない。

「おはよ」

両手を鼻と口に当ててしているのでぐもつてしまつたが伝わつただろつ。挨拶は済ませたとばかりに、また講堂内ウォッチングへと専念する。

私が今いる講堂は円状のホールで、中心に向くようドーナツ状に席が設けられている。そして後ろの席になるにつれて高度は高くなつてゐる……サークル会場みたいなものだ。ぽつかりと空いた中心には少し大きな机と椅子が3脚、こちらと対面するように三角形を描いて設置してある。主に講師が喋るスペースだ。私が座つている場所は後ろの方の席なので全体が中々よく見渡せる。

「ひやつて見回していると男女の数が均等に取れている死学と違ひ、黒学は女子が圧倒的に少ないことに気が付いた。それでも男臭

さを微塵も感じさせないどころか、寧ろ華やかになっているのは流石といったところか。

……しかし何処を見ても夜の店のよつた光景が視界に入るので落ち着かない。

黒学男子に骨抜きな死学女子や、数少ない黒学女子に鼻の下を伸ばしきつた死学男子。そこまでは解るのだが、黒学男子に頬を染めている死学男子がいるとはこれいかに。いくらあつちの女子生徒の数が足らないからってそれはアウトだろ。……いや、セーフか？

いやいや、ギリギリアウトだ。

何故なら男子が男子に頬を染めて恥じらい、身体をもじもじさせているのをリアルに見るのは決して気分が良いものではないからだ。こんな公の場でやられるのは勘弁である。是非人目に付かない所でこつそりやってくれ。それならアウトとは言わない。ギリギリ……

セフトだ。

だだつ広い講堂内にその光景が隙間なく詰められていると想像してほしい。実にシユールである。ここは何処の店ですかね。何やら幻聴まで聞こえてきそうになる。はーい、こっちピンク入りまーす。はいはーい、こっちはタワーお願いしまーす。

……ところで私帰つて良いですか？

「大丈夫？」

また隣から声が飛んでくる。そちらを見ると先程挨拶してきた奴と目が合つた。どうやら私に話しかけているようだ。

大丈夫かとは体調の事を訊いているのだろうか？……まさか頭ではなかろうな？先程まで阿呆な事を考えていたのがバレたとか？口に出して……はないはずだ。うん、大丈夫。奴らのスキルに読心術とかがなければ……。そういうえばサカキの説明ちゃんと聞いてなかつた。

.....。

.....今更ながらにその部分が物凄く気になつてきた。読心術スキルがあるよ、みたいな話だつたらどうしよう。あのときひやんと聞いていなかつた自分が悔やまる。

「えつと、余計な節介かもしれないけど.....良かつたらこれ使って？」

思考の渦に飲み込まれて黙り込んでいた私に話し掛ける黒学生徒。

.....ん? 使って?

知らぬうちに下を向いていた顔を上げると田の前に綺麗に畳まれたハンカチが差し出されていた。ハンカチを持ち歩いている男子生徒とは珍しい.....じゃなくて。何ぞこれ?

頭にクエスチョンマークを浮かべて隣人を見やる。すると彼は少し困ったような表情をし、小声で

「.....鼻血出てるんでしょ？」

と、のたもうた。

ハナヂ?.....鼻血?

.....。

「此処に入ってきたときから鼻押さえてるでしょ?....ホント? めんね。気にせず使って?」

黙つてハンカチを見ている私に彼は小声で更に追撃を仕掛ける。  
私の目は据わつているのだが全く気付く様子はない。

つまりはあれか?私はお前らの魅力に当たられて思わず鼻血ぶーたれ娘になっちゃつたと? 原因は見田麗しい僕ちゃん達のフェロモンなんだけど、こればっかりはどうしようもないんだ、ごめー

んねえー、とか。

恐らく過去に実際こんな事態があつたのだろうけど……すげえな。自分達のフェロモンのせいだと信じて疑っていない。例え美形だとしても自信過剰もここまでくるとドン引きだ。

「いや、鼻血なんて出てないのでいりませんよ?」

「ああごめんね、無神経だつたよね。……でもそのままだと嫌でしょ?」

……うん、話が全くもつて通じない。言葉自体は解るのに不思議なものだ。悪魔ってこんな奴らばかりなのだろうか?……こんな奴らがパートナーとか……鬱だ。

弁解するのもアホらしいので無視して席を立つことにした。サカキは相変わらずなので放つておくことに。彼女は奥の手、怪力というものがある。もし何かあっても大丈夫だろう。

よつこらしょと席を立つ。そのとき、何か嫌な視線を感じた。

そちらに目を向けると、近くにいた別の黒学の生徒達がこちらを見ていた。

チラチラと見ては隣に座っているもう一人の黒学生徒とくすぐす笑っている。嫌な感じだ。よく見るとハンカチ野郎とも視線を交わしているようだった。

……ああ、そういうこと。何という陰湿なやり方だ。

つまり私は祭り上げられていたのだ。私は本当に鼻血なんぞ出しているのだが出していると仮定すればどうだらう。

知られたくない事実を美形男子に知られ、ハンカチまで渡され心配される。美形男子のハンカチを鼻血で汚すことは躊躇われ必死に断るが相手は引いてくれない。強引に押し付けられるが使うことは出来ず、どうしたら良いのかわからなくなる。

垂れているものが涙なら何も問題ない。恋に発展しそうな典型的な展開である。

だが、今回の場合はどうだろう？

涙ではなく、鼻血。そう、鼻血の場合なのである。

普通の女の子なら恥ずかしい事この上ないだろうし、わたわたくしてまくるだろう。その様を多人数で笑いながら観察するのだ。もしかしたら優しくした後に突き落とす気でいるのかもしれない。

……悪質にも程があるだろ。

私がこちらをチラチラ見ている彼らに気が付いた事を知つてか、ハンカチ野郎は心配顔を止め、今度はにやにやと嫌な笑みを浮かべている。

うん、よくわかった。これが悪魔か。

私は今まで鼻と口を押さえていた両手を離した。目の前のハンカチ野郎の目が点になる。まあ出でないと信じてやまなかつた鼻血が出てないんだもんな。びっくりするよな。

私は彼につっこつと微笑む。

「（）心配どうも？」

言つが早いが私はハンカチ野郎の顔面に回し蹴りをお見舞いした。斜め上から下に振り下ろし、若干踵落としの様になつたので奴は吹っ飛ぶことはなく、強かに床に叩き付けられる。吹っ飛んで他の人に迷惑がかからないようにするための私なりの配慮である。少々大きな音を立ててしまつたが……こればかりは仕方がない。

椅子から落ちて床に倒れこみ、苦しそうに唸つていてるところへ言葉を吐き捨ててやる。

「テメエで使えよ、鼻血垂れ」

彼の鼻からは夥しい量の血が流れていった。  
おびただ



誤字・脱字などあれば報告して下さると有難いです  
（ 、 、 、 ）

本日もどうぞ宜しくお願ひ致します。

目の前に長い螺旋階段が延々と続く。そこを私は壁に手をつきながら一人でよたよたとゆっくり歩いて降りていた。2年生は全員講堂に詰め込まれていてるので辺りはしんと静まっている。

今いる場所は2年生の塔、『第一塔』の階段だ。死学の校舎は変わっていて、7つの塔で出来ている。1つの塔で1学年だ。塔の名前は単純に学年の数字を「第」と「塔」の間に<sup>は</sup>嵌め込めば良いだけなのでわかりやすく、覚えやすい。全体の構成は第一塔から第六塔が第七塔をぐるりと囲んでいる状態である。それぞれ階毎にクラス分けされており、1つの塔にAから<sup>ル</sup>の10クラスと体育館、講堂、職員室、2年の塔の場合は保健室がある。なんと14階建ての縦長な校舎なのだ。一階部分に職員室、その上に2年の場合は保健室、そしてそこから<sup>レ</sup>、<sup>エ</sup>、<sup>ヒ</sup>、<sup>ジ</sup>、<sup>ギ</sup>、<sup>フ</sup>と順にクラスが積み上げられ、その上に体育館が挟まる。そこからまた<sup>エ</sup>、<sup>ド</sup>、<sup>シ</sup>、<sup>ビ</sup>、<sup>ア</sup>と順にクラスが積み上げられ、最後に講堂がドシンと乗つかつている。職員室と体育館、そして講堂は各塔に複数存在しているわけではなく第一塔から第七塔のその階の部分だけが結合してワンフロアになっている。他の階には隣の塔と第七塔に繋がる渡り廊下が設置されている。

私はこの校舎を初めて見たときウェーディングケーキを思い出した。職員室と体育館、講堂がケーキ部分で他はそれを支える柱である。つべんに人形を飾れば完璧だ。

この建物は建築構造力学的にどうかと思うが此処は日本ではない

イグラントである。魔法やらなんやら使つてゐるのだらう。本当に何でもありだ。

それはさておき、私は現在講堂から保健室に向かつて歩いている。今にも吐きそうになるのを堪え、懸命に足を前に運んでいるのだ。原因は悪酔い。黒学の生徒が撒き散らかすあの傍迷惑な代物、フロモンである。

ムカつく奴に踵を喰らわせたあの時、鼻血なんぞ出てねえよアピールで手を離してしまった。フロモンが物凄く濃い場所で。蹴り倒して氣分がスッキリしたのは良いが、吐き気に頭痛と体調の方は最悪になってしまったのだ。

結構派手にやつてしまつたのだが全く騒ぎにはなつていない。あまり気付かれていなかつたのだ。気付いていたのは私を祭り上げていた奴らと近場にいた他の黒学の生徒。前者は少し驚きを見せた後にやにやと笑い、後者はチラリと一瞥しただけでまたお喋りに戻つていつた。死学の生徒は誰一人氣が付かなかつたようだ。皆お喋りに夢中だつたのだろうか……そこまで夢中になるとか、そのうち貢ぎ始めないだらうな？……つていうかサカキ、お前真横にいて何故氣が付かない。

講師一人は勿論氣が付いていたようである。黒学側の監視を勤めていた講師は眉間に皺を寄せてはいたが別に私に何かを言つということはなく、死学側の監視役を勤めていたイズミ先生からも特に何かを言われることはなかつた。イズミ先生に関しては怒るどころか微かにほくそ笑んでいるのを私は見逃さなかつた。……恐らく準備中に何かあつたのだろう。

そんなこんなで私は咎められることもなく、体調が悪いから保健室へ行くとだけ告げ、今に至る。

……ん？ 鼻血垂れ野郎？

知らない。今、私は自分の事で精一杯だ。他人を氣遣う余裕などない。

まあ余裕があつたとしても奴に氣遣うつもりは更々ないが。

吐き気と頭痛を紛らわすようにあれこれ考えながら足を運ぶこと約10分。……やつと、やつとだ。保健室の表札が見えた。下り階段とはいえこの体調で14階の講堂から2階の保健室まで徒歩で移動するのはキツイ。無事に辿り着いたことから来る安堵ともう立っているのも限界だとう焦りが入り混じる。さっさとベッドに横になろう。

ガラガラと扉を開け、消毒液や薬品の匂いが充満する保健室に足を踏み入れる。足取りが覚束ないので壁や棚にぶつかるわ椅子を倒すわでちよつとした惨事になってしまったが気にして余裕はない。……ヤバイ、眩暈までしてきた。視界に影が差し、世界がゆらゆらと揺れている。気持ちが悪い。

一番近くにあるベッドのカーテンに手を掛けようようと引く。そこには恋焦がれてやまないベッドが私を待っていてくれた。……ああ、ベッド。会いたかった。やつと横になれる。

私は最後の力を振り絞り、ふらつく身体をベッドへと転がして目を閉じた。まだ頭痛や吐き気は相変わらずであるが、休んでいるうちに治まるだろう。一つ長い息を吐き出して身体の力を抜く。

……うむ、やはりベッドは良いものだ。疲労した身体を優しく受け止めてくれる洗剤とお日様の良い匂いがする白いシーツが被さった低反発仕様の敷布団。風邪をひかぬように身体を優しく包んでくれる洗剤とお日（中略）白いカバーが被せられたふわふわで軽い掛け布団。……いっぽはフェザー90%の羽毛布団様とみた。そして、頭を優しく支えてくれる（前略）カバーを被せられたこれまた低反発仕様な枕。……保健室のベッドにしては氣前が良すぎ…………まあ気にするまい。そんなことは今どうでもいいのだ。それら全てが私を癒してくれる。

ああ、幸せ。体の調子は最悪だけれども。

健康良児である私に保険室は無縁である。今回初めて訪れたのが、こんな素敵ベッドがあるなら仮病なり休み時間なり使ってちょくちょく来てしまおうか。

幸せ気分で寝返りをうつと何かにぶつかった……抱き枕まであるとはことん気が利く保健室である……が、硬い。他の寝具は最高級だというのに、けしからん。どうせなら抱き枕までこだわるべきだ。しかしこの抱き枕、温かいとは湯たんぽも兼ねているらしい。私はそのけしからん抱き枕がすこぶる気になり、閉じていた目を開いた。

赤い二つの目と私のそれがかち合ひ。

「…………人型の抱き枕とか…………ないわー…………」

ないわーと言いつつも、そعدだと良いなと期待を込めて言つてみた。

すると抱き枕の目が細まる。

わあ、すげえ、動くんだけれどこの抱き枕。悪口言つと怪訝な表情になるんだぜ。リアル設計過ぎて悪趣味としか言いようがないが。流石異世界、まだまだ未知なものが盛り沢山である。

……。

……うん、ごめん、明らかに人だ。

しかもこいつ

「…………悪魔だし」

ついつい溜息が漏れた。

そう、私が現在進行形で抱きついている彼は赤目と黒髪。サカキが説明してくれた悪魔の色彩をバツチリ<sup>たずさ</sup>携えていた。

しかもこの人、超が付くほど恐ろしい美形っぷりである。講堂

にいた黒学の生徒たちも勿論美形なのだが、それをも超越する美形だった。ずっと見ても見飽きることはないといふか……否、もう美形は結構。腹一杯です。『じつあん』です。

そういうえばこの人に対する何か違和感を感じていたのだが、その理由がわかつた。恐ろしいくらいに顔が整っている……ではなく、あの濃すぎるフェロモンを全く感じないのだ。彼の周りを纏う空気は澄んでいる。先程と変わらず吐き気と頭痛はあるのだが、いつもやつて普通に息をしていても急に悪化する事はない。こんな密着しているのに……密着……密着？

不思議に思ったところで、自分の腕がまだ彼に巻き付いていることに気が付いた。何て事だ。これでは痴女ではないか。

「…………すみません、『じめんなさい』、お邪魔しました」

私は彼にそう告げて腕を離し、そもそもそとベッドを降りて他のベッドへ移ろうとした。

だが、床に足をついて立ち上がった瞬間

「つえ……っ」

酷い眩暈に襲われた。

容赦なく世界がぐるぐると回転する。

「ぶつ」

身体前面に鈍痛が走る。冷たいと感じるこれは床だらうか？……どうやら私はぶつ倒れたようだ。

頭痛が酷いし吐き気もするし打つた部分は痛いし……散々である。身体を少しでも動かすのが億劫だ。

「…………、うー、くわい、鱗翅類め……」

彼等とは性格的に全く合わないし身体的にも異常をきたす。

……ペアとか本格的に無理ではないか。

これは裏腹だらけじゃないなと想到了こうで、私は意識を手放した。

006 高級寝具 + (後書き)

誤字・脱字などあれば報告して貰うと有難いです  
、  
、  
、  
、

本日もごめんな宜しくお願ひ致します（・・・・）

柔らかなまどろみの中、徐々に意識が覚醒していくのを感じる。  
ふわふわふわふわ……この布団は最高だ。寝心地良すぎて涎垂れ  
そう……いや、もう手遅れだな。口元が冷たいし。

ああもう少し寝てみたい、夢の中へ帰りたい。

しかし、妙な夢を見た気がする。あのやたらリアルな人型抱  
き枕。本當にあるのだろうか？あつたら値段はいくらくらいするの  
だろうか？妙に凝つっていたし高そうだ……いや、買わないが。誰が  
あんな悪趣味なもの買うものか。私にはタチバナさんが直々に作っ  
てくれたブタの抱き枕がある。あれは最高の抱き枕だ。……見た目  
がちょっとアレではあるが。ブタの抱き枕、あの子がいれば私はす  
ぐに夢の世界へと旅立てるのに――

吐きそつだ。

あれこれと考えていろいろうちに完全に意識が覚醒してしまった。結  
構寝た感覚はあるが体調は回復していない模様。頭痛も吐き気も健  
在である。

因みに田は閉じたままだ。これを開ければ現実世界が訪れる。……  
何だらか、ものすごく田を開けたくない。開けちゃいけない気が  
する。

だがしかし、そういうわけにはいかない……現在時刻の確認がし  
たいのだ。

もしも夜だったらシャレにならない。タチバナさんの反応を想像す  
るだけで恐ろし過ぎる。

私は諦めてゆるゆると瞼を上げて――即、下ろした。  
何だらけ、今見たくないものを見た気がする。やっぱり寝ようか  
な。

「……起きたか」

……何か聞こえた気がする。

低くてよく通る声。売れつ子声優になれそくなくくらい良い声だ。  
今まで見たことなかつたが、イグラントにもテレビが存在してい  
るのだろうか。

……。

……いかん、現実を見なければ……。

私は意を決してもう一度ゆっくりと瞼を開ける。

2つの赤い瞳と私のそれがかち会つた。デジャヴだ。

あれだけ冒頭で夢だと言い聞かせたのに……どうやら夢オチは許  
されなかつたようである。

「……おはよび『さ』います」  
「もう昼だがな」  
「……こんじちは」  
「……」

何とも言えない視線が突き刺さるがそんな視線もなんのその。ス  
ルースキルならレベルMAXだ。痛くも痒くもない。

……まあのんことより、もう昼なのか。少し寝過ぎたかもしれ  
ない。サカキはあれから大丈夫だつたのだろうか?……いや、怪力  
に心配は無用であった。

そして何故この人が此処にいるのだろうか?ベッドサイドの椅子  
に腰掛けでこちらを見下ろしていく端正な顔を見上げる。……うん、  
恐ろしい美形つぶりだ。ではなくて。

確かこの人私が保健室に入ってきたとき寝てなかつたか?……そこに私が失敬してしまつたわけだが。意識が朦朧としていたとはいへ大変なことを仕出かしてしまつた。それからベッドを移動しようとして……移動……あ。

今更ながらに床にぶつ倒れたことを思い出した。それからの記憶がふつり途絶えている。恐らくそのまま寝てしまつたのだろう。だが、本来床に転がつてはいるはずの私の身体は何故か今ベッドに預けられている。

ということは、だ。

「あの、もしかして運んでくれました?」

問い合わせると短く「ああ」といつ肯定の返事が返つてきた。意外だ。意外過ぎて呆然とする。

悪魔といつても性格やら色々と種類があるのだろうか?現にこの目の前の悪魔は親切だ。

私の中にある悪魔の先入観を少し変えなければいけないようである。

「邪魔だつたからな」

……そうでもないようだ。

しかし、理由はどうであれ態々私をベッドまで運んでくれたのは事実であるし、確かに私も見ず知らずの他人があんなところでぶつ倒れられても困る。迷惑極まりない。そして我ならそのまま放つておく可能性も無きにしもあるず……つて私の方がよっぽど悪魔じみているではないか。なんてこと。

思わず突き付けられた事実に何とも言えない複雑な気持ちにさせられ、目を逸らしてしまつ。

「……御迷惑をおかけしました」

謝罪をするとまた「ああ」と短い台詞が返ってきた。先程からそれしか聞いていない。……ああ、邪魔だったとは言われたか。

それにしても彼は講堂にいた悪魔とは少し違うようだ。何より口数が少ない。ペラペラと離しかけてきた鼻血垂れとは大違いである。もう一度彼を見上げるとまた目が合った。

何となく先に田を逸らしたほうが負けな気がして逸らすことができなー。

何か話さなきゃいけないかなとか考えていたら予想外にも向こうから話しかけてきた。

「……お前は何故此処にいる」

言葉数は少ないが、無口といつほどのないらしい。あちらから話を振つてくるとは思わなかつた。

しかし、何故と訊かれても

「体調悪いからですが」

此処、保健室だし。

他に理由などない。まあ今後は体調不良でなくとも来ると思つが。この布団の寝心地は最高である。持ち帰りたいくらいだ。

……その手があつた。はつ、いかんいかん。ついつい誘惑に負けそうになつた。恐るべき素敵寝具。

「……いや、そういう意味では…………まあいい」

私が己の欲望と格闘していると彼は溜息混じりで呟ついた。私の返事は欲しかつた答えではないらしく。

いやいや、他にどう応えろと？

疑問符を浮かべながら考えるが一向に別の答えを導き出せない。  
意味がわからない。

この人は私の中で不思議君にカテゴリ分けされた。

007

夢オチに清き一票を（後書き）

誤字・脱字などあれば報告して貰うと有難いです  
（ 、 、 、 ）

本日もありがとうございました。お願い致します。

「恐ろしく顔色が悪いな。…………風邪か何かか」

「へ？」

答えを導き出せずに頭を傾げる私。そこへ突然話し掛けられたものだから間抜けな声が出てしまった。

私は視線を彼に戻す。

一ちらをジッと見ているがその表情に心配の色は見られない。本当によく解らない悪魔である。

「……あー風邪じゃないですよ。講堂で今日ペア発表があつたんですけど……そこの空気に酔つて気持ち悪くなつたといつか……多分悪魔が撒き散らしていたフェロモン酔いです。私には強烈過ぎるみたいですね」

あれ何とかならないかなとぼやきながら彼を見ると少し驚いた顔をしていた……気がする。

気がするというのは表情の変化がほんの僅かだつたからだ。

私は彼の顔をじっと見た。

さつきから会話をしてはいるけど……そもそも何者なのだろう？制服を着ているから目の前のこの人は黒学の生徒ではあるようだが、ブレザーを脱いでいるので同級か先輩かを判別することはできない。ブレザーに学年ごとに色分けされているラインがあるので。それに年齢を判断するのに見た目なんて全くあてにならない。

見た目が年齢の判断基準にならないのは彼らが恐ろしく長寿だからだ。イグラントでは人間を除外した種族——死神や悪魔、天使な

どは地球人の10倍は生きるというから恐ろしい。……今は私も死神なのでその恐ろしい奴らの仲間入りを果たしているわけだが。実際、私の外見は5年前からちっとも変わっていない。年齢的には21歳なのに見た目は16歳のままなのである。かといって成長スピードが単純に10倍遅いだけなのかといわれれば少し違う。彼らの外見は地球人と同じように16歳くらいまで成長するのだ。しかし、そこからの成長、老いが物凄く遅いのである。外見が同じ年齢くらいなのに実は100歳以上年上でしたといったような事はざらにある。

よつて、目の前の人物が何年生なのか、そもそも何歳なのか見当も付かない。私は迷惑を掛けたという負い目から彼に対して敬語で喋っているのだが、負い目があろうとなからうと敬語で話すのは妥当だらう。

私は彼を凝視したままずつと気になっていた事を口にする。

「そういうえは魔あなたが近くにいても全然気持ち悪くなつてないのが不可思議です」

これだけ気持ち悪くなつているのに何故彼だけが大丈夫だというのか。そこに何か解決の糸口があるのだろうか。

解らないままだと実習が大変なことになつてしまふのだ。ゲロリンしながら実習なんてものは御免ひけい通りたい。凄く気になる。緊張しながら待つていると彼から思わぬ答えが返ってきた。

「俺が今それを撒き散らしていなかからだな」

なんと。

「……押さえられるんですか？」

「寧ろ、出そうと思わなければ出ることはない」

何とこいつことだ。アレは出し入れ可能だというのか。そしてそれを敢えてあいつらは撒き散らかしていたといつのか。  
なんて傍迷惑な。

この荒ぶる殺意をビビリしてくれよ。

「……ひー、ひぐっ」

わあー、吐きやつ。

驚愕の事実に思わずガバッと思い切り身体を起してしまったのだ。それによりまた眩暈を起こして後ろに倒れる。今度は素晴らしい弾力を誇る敷布団が私を優しく受け止めてくれたので打撃ダメージはない。ありがとう、素敵敷布団。  
だが眩暈によるダメージを免れることはできない。

「…………氣持ち悪…………ひ」

私を中心に世界が回る。勿論視覚的な意味で。  
目を瞑つてもぐるんぐると回り続ける。

気持ち悪さは最高潮である。

堪えるために目を閉じてうーうー唸つていたら額に何かが触れた。目を開けると彼の手が当たられている様が見える。……熱はないと思うのだが。

相変わらず彼の顔に心配する色は見られない。何がしたいのだろうか。

「…………樂にしてやる

え？ 殺される？

それはいただけないと慣れようとした寸前、吐き気が治まるのを

感じたので慌てて止めた。本当に言葉通り楽にしてくれたよつだ。  
頭痛も治っている。

繰り出しあつとした蹴りを途中で止めたので右足が少しベッドから  
浮いている……気付かれぬようそつと元に戻した。

……疑つてすみません。いや、でも悪魔に真顔でそんな言葉を吐  
かれたら誰だつてそういう意味で受け取るのではなかろうか。

「…………あらがとうござります」

そして疑つてすみません。

勿論言葉として出してはいなが心を込めて相手に伝える。

「…………毒氣を抜いただけだ」

毒氣とはフロロモンの事だらうか。

確かに悪魔が撒くものだし、回収も容易に出来るのかもしない。

私がもう一度礼を言つと短く「ああ」と返事が返ってきた。……

視線が右足に行つているのは氣のせいではないだらう。ビツやらバ  
レバレだつたようだ。

私が思わずはははと引き攣つた笑いをすると彼は微かに笑つた。  
笑つたといつても口角が少し上がつた程度なのが。

何だか貴重なものを見た気がしてマジマジと見てしまつ。だが、  
それはすぐに無表情に戻つてしまつたのでほんの一瞬しか見ること  
はできなかつた。

私が得した気分になつていると、彼は壁に掛けてある時計を確認  
して「そろそろ行く」とだけ告げ、立ち上がりて出口に向かつた。  
そして何か思い出したかのように立ち止まる。  
どうしたのだろうかと見ていたら彼は頭だけ振り返つて口を開いた。

「.....口元を拭いておけ」

口元？

.....。

忘れてた。

私は親切にも指摘された今だ口元に残っている涎を手の甲で拭いながら、ガラガラと扉を開けて保健室を出ていく彼をベッドの上から見送った。

誤字・脱字などあれば報告して貰うと有難いです ( )

本日もごんづか宜しくお願ひ致します。

「何処行つてたのよ」

教室に戻つて聞かされた第一声がそれだつた。……そして何か睨まれてるし。

今、私は自分の席に着きながら仁王立ちしているサカキに見下ろされている。

保健室で彼を見送つてから自分も教室へ戻ると昼休みが終わりかけているところだつた。

先程まで吐き気に悩まされていた私だが、有り難いことに彼が呆気なく取り去つてくれた。よつて、吐き気がもたらす問題は解決されたのだが、今度はまた別の問題が浮上してしまつたのである。ハラヘリ。

そう、私は今、物凄く腹が減つている。

今日の朝は、ギリギリまで惰眠を貪つていた。それはもう朝食を抜かなければ間に合わないほどに。……つまり私は昨日の晚から何も口にしていない。

そして朝から七面倒くさい奴の相手もした。私は心身共に疲弊しきつっている。疲れ、すなわち則ち本日のエネルギー消費量は朝っぱらからうなぎ登りで、私は現在エネルギー欠乏状態。身体からは直ちにエネルギー補充をしようとブーイングが飛び交つている。胃に食物を詰め込めと腹がぐるぐる喚き叫んでいる。

早く、早くこの三大欲求の一つを満たさなければとロッカーに仕

舞つてあつた鞄から弁当箱を引つつかみ、着席した。時計を見遣ると残り時間は僅か5分。迅速に事を運ばなければ昼休みが終わってしまう。ハラヘリのまま授業なんて受けてたまるものか。

そう意気込んで弁当の包みを外したところでサカキに取つ捕まつたのだ。

そして冒頭にあつた言葉が投げ掛けられた。

何故私が怒られているのだろうか。寧ろこっちが文句を言いたいくらいなのに。理解に苦しむ状況である。

田の前には蓋がまだ開けられていない状態のタチバナさんによるお手製弁当、その先には眉間にシワを刻み込んだ仁王立ちのサカキ、そしてその彼女を着席したまま見上げる私。まるでお預けを喰らつたわんこのような構図だ。

この状況を迅速に打開すべく、私は彼女に対する文句を全て飲み込み、彼女の問い掛けに答える事にする。最優先するべき事項は、さつさと食い物を投下しようと悲痛な叫びを上げている空っぽの胃を満たすことなのだ。兎にも角にも腹が減つた。事態は一刻を争つている。

「保健室だよ」

答えたよとばかりに私は弁当蓋の解除に取り掛かる。早く輝かんばかりの銀シャリと面会を果たしたい。

「嘘つー！」

そう声を上げながら彼女が手を掴んできた。  
何するか。この邪魔な手を迅速に離しなさい。私には時間がない

んだ。

しかし嘘とはどういう事だらうか？

私は彼女の言葉の意味が理解できず、首を傾げて見上げた。

「ペア発表が終わった後、マイズミ先生に聞いて保健室に行つたの

来てくれたのか。いつの間に。

多分私が寝ていたときなのだろう。サカキが来てくれたという記憶はない。

しかし、来たなら何故に嘘だと言われるのだろうか？寝てこるとこうを見つけただろう。

彼女の言葉に益々首を傾げながら次の言葉を待つ。

「でも、あんたいなかつたじゃなー」

……へ？

今、さぞかし私の顔は間抜けになつてているだらう。

彼女は今、私はいなかつたと言わなかつただらうか？

訳が分からず呆然とする私を他所にサカキの言葉は続く。

「体調が物凄く悪そうだつたつて聞いたから心配して急いで行つたのにいないつてどういう事よ！休み時間になる度にずっと探してたんだからね！？やつと見つけたと思つたらピンポンにしてるしつつ！私の心配を返しなさいよ！」

言葉を切らすやう一気に浴びせられる。よく見ると彼女の瞳はうつすらと潤んでいた。どうやらかなり心配してくれていたらしい。

……なんだこのシンデレのお手本みたいな娘は。にやけるではないか。

いやにやにする私に恨みがましい視線を投げ掛けるサカキ。「めん

「めんどくさいつもにやけ顔は抑えられない。」

……痛つ、殴られた。何だこの可愛い生き物は。

「それで何処行つてたのよ?」

彼女の言葉にやうだつたと思つ出す。にやにやしてゐる場合ではない。

確かに私はずっと保健室で寝ていた。それは事実なのに何故彼女は発見することができなかつたのだろうか?

「うーん、おかしいなあ」

「何?本当にいたの?」

「いたよ」

「……まさかベッドの下とかで寝てたとか言つたじやないでしょ? ね?」

「こやこやこや」

確かに床にぶつ倒れたが不思議君がベッドに運んでくれたし……

……あ。

そうだ、あの人があ、不思議君がいたのだ。

「……サカキ、保健室にとんでもなく美形な悪魔いなかつた?」

美形に田がないサカキさんである。もしも万が一私を見逃すようなことがあれども、あれほど美形を彼女が見逃すはずがない。

「とんでもなく美形な悪魔? 中まで入つてベッド全部調べたけど保健室には誰もいなかつたわよ? ……といづか悪魔は皆美形じゃない」

彼らの姿を思い出したのかウットリとどこか違つ世界へ意識を飛

ばしているサカキは放つておくとして。  
いなかつたとはどういう事だろうか？

彼は確かにいたというのに……。

……え？まさか幽霊とかそういうオチじゃないですよね？

「……」

このよく解らない事態に混乱する私。  
そこへ昼休み終了のチャイムが鳴り響き、講師が教室へ入ってきました。

……何かとても重要な事を忘れている気がする。

「……ハツ！」

——弁当——つ——！

誤字・脱字などあれば報告して貰うと有難いです  
（ 、 、 、 ）

010 上むを得ない食事事情（前書き）

本日もどうぞ宜しくお願ひ致します。

午後の授業が始まり、講師が教壇で熱弁を振るつてゐる。科目は数学、ひょろりと背丈が長く、少し長めな灰色の髪を携え、やはりというかお約束というか眼鏡を掛けた色白男性教師、イヌイ先生だ。彼の見た目はもやしの様で、なよなよしてそุดなどといふイメージを持たれがちだが実際の中身は真逆だ。困つてゐる生徒を見つけると助けずにはいられない、情熱溢れるちょい悪な熱血教師なのである。

特別顔がかつこいいわけではないが不細工でもない。そんな彼は密かに生徒の人気を集めている。

「……で、ヒイラギはずつと保健室にいたのね？」  
 「ん、ほほんほへへはへほ……むぐむぐ……んおお、このグラ  
 タン美味ス……っ！」  
 「……何言つてるのかさつぱりよ」  
 「『殆ど寝てたけど』……むぐむぐ……んー、ひははへー」  
 「……」

イヌイ先生の熱弁をBGMに私とサカキは講堂から教室に帰つてくるまでの一連の経緯のことで話をしていた。サカキはヒソヒソと小声で話し掛けて来るが、私は普通に喋る。更に言つと、教科書の代わりにお弁当広げてルンルンとお食事タイムを満喫中である。因みに私が先程最後に喋つた言葉は「んー、幸せー」だ。腹減り後の食事は五臓六腑に染み渡る。

食べながら喋る私へ、隣の席から「ちゃんと口の中の物がなくなつてから話しなさいよ」というサカキの注意が飛んで来る。

この台詞だけを聞くと正論だ。サカキが正しいうつに思える。……

……だがしかし、よく考えてみて欲しい。私は今、食事の真っ最中である。食事中に話し掛けでこなれば良いのだ。食べ終わるまで待ち切れなくて話し掛けできているのはサカキの方なのである。ましてや食べるのが今になってしまった原因はサカキが邪魔して昼休み中に食べられなかつたからであつて断じて私のせいではない。

私はこの美味スなグラタンを口に運ぶのに忙しい。取り込み中なのだ。話はこのタチバナさん特製弁当を平らげてからにして欲しい。

私の目の前には神々しく佇む弁当の中身は洋風な料理で制作された愛らしい動物達がずらりと並んでいる。所謂キヤラ弁である。以前、キヤラ弁の話をしたらタチバナさんがハマつてしまつてここ最近私の弁当はファンシーなものとなつていて。

私はウズラの卵で創作された愛らしいヒヨコさんを摘む。わざわざ黄身と白身が反転させてあるのでちゃんと黄色いヒヨコさん……

タチバナさん、朝からどんだけ手の込んだ事を……。

タチバナさんのこだわりを感じつつそれを口の中へ運び、咀嚼した。何やら食べるのが勿体な……つまひ。

思わず表情筋も緩む。

私は、今幸せの真つ只中だ。

「…………」

机の前に立て掛けである本がよろよろと倒れそうになり、慌てて片手で支える。

私の食事タイムを邪魔させないよう壁の役目を果たしてくれているのは『死神大全』。入学時にもれなく生徒全員に配られる本だ。死神の心得など死神視点で書かれた倫理的な内容が長々と600ページほどに渡つて綴つてあるらしい。

私は今日初めて開いた。ロツカーの奥底に放置したままだつた彼は、とにかく高張るので邪魔だしいい加減捨てようかと思っていた。

しかし、本日彼を見つけた私によつてこの壁という役職に大抜擢。現在進行形で懸命に与えられた任務を遂行してくれている。

分厚く程々にデカイ彼は壁に持つてこいだと思ったのだが、実際使ってみるとそうでもないらしい。自身が重すぎて少々安定性に欠けている。ズルズルと少しづつずり落ちていくのだ。期待ハズレである。……やはり即刻解雇処分を言い渡すべきであろうか。

「……ヒイラギ、今更だけどその本つて何か意味あるの？」

「うーん、支えるの面倒になつてきたり食べ辛い。あんま意味ないかも」

「……いや、そうじやなくて、そもそもそれ 자체が逆に悪田立ちしてるつて言つてんのよ。イヌイ先生さつきから青筋立てあんたをガン見してゐるわよ?」

「ん? あー、知つてる」

「知つてるじゃないわよ」

数学の授業に全く関係のないそれを片手で支える私にサカキが問い合わせる。

私は別にこんなもので弁当を食べているといつこと自体を隠し通せるとは思っていない。この壁は弁当を隠すものではなく、イヌイ先生の視線を遮るためにものなのである。見られながらは食べ辛く、美味しい弁当も心なしか味が落ちてしまう。せつかく美味しいのだから美味く食べたい。

……そう思つて立て掛けたのだが、現段階でイヌイ先生の火傷しそうな熱い視線よりズルズルとだらし無く崩れ落ちては情けなくも私に支えられるこいつの方が気になつてきた。

「……私、知らないからね?」

「んー……むぐむぐ」

「……」

「むぐむぐ

「…………話戻すけど、ヒイラギを見つけられなかつたっていうのはおかしな話だわ。何も覚えてないの？」

氣のない返事を寄越す私にこれ以上何をいつても無駄だと感じたのか、話を戻すことに決めたようだ。やはり彼女は私の扱いを少しだけ心得ている。

因みにあの『抱き枕事件』の件はくだけごつそり抜いて一連を話してある。話したら物凄く煩そうだ。しつこく聞かれて絶対面倒になる。彼女には保健室に行つたら黒学の生徒が一人いたとだけ説明してある…………断じて嘘は言つていない。

「うーん、私は寝てたから…………むぐむぐ、はんほほひへはひ

「……」

「……『何とも言えない』」

何言つてんのか分からぬのよと言いた氣な視線を受け、飲み下してから言い直す。…………何度も言つが、食事中に話しかけてくるサカキが悪いと思つ。

「…………夢遊病とかあるんじゃないの？」

「…………ない」

……多分。

何せ意識がないときの自分の行動など自分自身では確認の仕様がない。だが今までそんなこと誰にも言われたことがないので私はそうではないのだろう。多分、絶対。

「…………ヒイラギッ！…」

「ふあい

「これの答え……」

突然サカキではない低い声が私の名前を怒鳴るように呼んだ。  
少し前から解雇処分が下された彼を閉じて床に置き、既に堂々と  
弁当を頬張っている私へ、遂にイヌイ先生が質題という名の注意を  
仕掛けってきたのだ。

彼の後ろに幻影の般若が浮かんでいるのが見える。相当立腹な  
模様である。

「ちょっと、どうするのよつ」

……何故サカキが慌てるのだろうか。よくわからん娘だ。  
どれどれと前の黒板を見てみると途中式を書くだけでも面倒臭そ  
うな式が長々と連なっていた。……陰険先生と呼んでやろうか。  
私はそれを眺め、鮭のムニエルを咀嚼しながらつーんと首を捻り、  
嚥下してから口を開いた。

「多分、1」

「多分つて何よ」

答えた私にイヌイ先生ではなくサカキが素早く突っ込んで来る。  
何つて、多分は多分だ。

苛立たしそうにこちらを睨み付け、組んでいる腕を指でかつかつ  
させていたイヌイ先生の指が止まる。

私を除くクラスメイト全員が息を呑み、しばしの沈黙が流れた。

「……さつさと食え」

「ありがとうござまふ……むぐむぐ」

「…………うわ…………」

チッと舌打ちをしてまた熱弁を始めるイヌイ先生。もうあの火傷しそうな光線を放つて来る事はない。  
どうやら許可が下されたようだ。私は礼を言つて食事に戻る。

「……どうして分かつたの？」

サカキが驚いたような、不思議そうな顔をして聞いてくる。同じ疑問を抱いているのか、他のクラスメイトもサカキと同じような表情をしてこちらを向いている。

テストの学年順位で毎度最下位を独占キープしている私が先程質題された難題の正解を答えられたのだ。不思議でたまらないのだろう。

「むぐむぐ……んー、勘？」  
「何で疑問形なのよ……」

脱力するサカキとクラスメイト達。その様子が何だか可笑しくてあははと笑う。

「おー、お前ら授業に集中しろーー！」

私に注目していた生徒達がひいつと悲鳴を出して慌てて前を向く。

「ヒイラギ、お前もわざと食えーー取り上げられたいのかーー？」  
「ふひはへん」

イヌイ先生の怒号が飛ぶ。

それは勘弁と私は即謝罪し、黙々と食事を再開した。

口に入れたまま喋ってしまったのでちゃんと伝わったかどうかは分からぬが、何も言われないのでまあ良いだろ。

しかしそくもあんなひょろい身体で馬鹿でかい声を出せるもんだ  
など失礼なことを考えながら最後の一 口を頬張つてしまい、  
ゆっくり胃へと流し込んだ。

「馳走様でした。」

0-1-0 上むを得ない食事事情（後書き）

誤字・脱字などあれば報告して下さるう有難いです  
（ 、 、 、 、 ）

本日もどうぞ宜しくお願ひ致します。

「——と、いうことがあつたんスよ。タチバナさん、どうしてだか分かるつスか?」

「んー」

授業を終え、学校を後にした私は家に帰つて早々、リビングの椅子に腰掛け、優雅にペンを走らせていたタチバナさんに今日の出来事を話した。勿論抱き枕云々の件は省いて、だ。タチバナさんに知られるのは、私にとって親に知られるのと同じようなものなのである。あのような醜態、話せる訳がない。

タチバナさんは少し考える素振りを見せ、何故か嬉しそうに話し始めた。

「悪魔の魅力が通じないのはー、多分ヒイラギが無意識に抵抗してるからだと思うー」

「……抵抗つスか」

「そそー。彼らは元々美形でしょー?そこへ更に魅力を振り撒くからねー。それって強烈な麻薬みたいなものだからー」

「ふむふむ」

「ヒイラギはー、常に無意識下で抗生素を打ちまくつてる状態つてわけー。吐き気やは副作用みたいなものだと思ひつい……できたー」

できたーという可愛らしい声と共に紙からペンを離すタチバナさん。覗き込んで見てみるとそこには立派なお城が佇んでいた。写真を簡易化したような出来のそれは私が帰ってきたときから彼女がずっと描いていたものだ。恐らく昨日私が教えた一筆書きであろう。

「この人、地球にある物を私が教える度に面白がって再現するのだが、毎回完成度が高すぎるのだ。

何ていうか再現というより最早私の知識を元にして新境地を開拓している。私はもう驚く事にも飽きてしまった。最近では彼女が何をしようが「タチバナさんだから」で納得してしまう自分がいる。

そんな風に私が考えているとも知らず、彼女は今日も気まぐれで新境地を開拓している。彼女にとつてそれはただのお遊び、遊戯なのである。……末恐ろしい御人ぞ。

「うふふー」

開拓者タチバナは今しがた出来上がった、一筆書きと呼ぶには躊躇われる最早立派なモノクロ絵画を上機嫌で眺めつつ言葉を続ける。

「まあ、普通はそう簡単にいかないんだけどー」

「そりなんスか?」

「そだよー。頭で抵抗しなきゃとか思つてもー、身体が勝手に相手に魅了されちゃうはずー」

しかし、私の場合オートで抗生素投与をしていくと言つたのはタチバナさんだ。

矛盾過ぎるその説明に疑問符を浮かべていると彼女は私が何を考えているのか察したのだろう。ニッコリと笑つて説明を続けてくれた。

「悪魔の容姿はー、大抵は少なからずとも好意を抱くハズー。綺麗なものつてよつぽどの変わり者でない限り皆好きだしー」

「確かにそうつスね」

「うんー。でねー、その少なからずの好意がー、彼らの使う魅惑で勝手に増長されちゃつてー、あつという間にメロメロになっちゃう

つていうわけー」

「……なるほど」

確かにそれに抗うのは難しいだろ？  
好意なんてものは本人の意志に関わらず勝手に沸き上がりて来る  
もので、殆どが無意識下の感情なのだ。それを消そつと思つても中  
々上手くいかないはず。

「対抗するにはー、惑わされないくらいの強固な意志とかが必要な  
わけなんだぞー。死学の生徒さんとまだまだひよっ子だからー。  
難しいんだねー。」

……それであの講堂の惨事という結果か。激しく納得した。  
しかし、なら何故私は大丈夫だったのだろうか?  
私から見ても悪魔の容姿は綺麗だと思う。  
首を傾げて考えるが……さっぱりわからない。  
どこかに欠陥でもあるのだろうか?……何か有り得えなくもない  
のが悲しい。

「いやいやー、ヒイラギに欠陥があるとかじゃないからー」

私の思考を読んだかのようにタチバナさんが違う違うと手を振り  
ながら言つ。

……どうして考えていることが…………いや、何も言つまい。相  
手はタチバナさんである。考るだけ無駄なのだ。

「ヒイラギの場合はー、確かに綺麗なものは人並みに好きなんだろ  
うけどー……」

「……けど?」

「んー……多分それと同時にー、『だからビリした』つていう気持

ちも同じくらいにあるみたいー。綺麗なものはそれなりに好きだけどー、興味もないー。簡単には見た目には惑わされないのだよー」

そうなのか。

欠陥品ではない事に酷く安心する私。

まあ確かに私は彼らを美形だなーとは思つたが、見るからに胡散臭く感じた。その上、実際に鼻血垂れみたいな輩もいたのだしそ然だらう。

いくら美形でも鼻血が付属されれば台なし、百年の恋も冷めるつものである。いや、恋なんぞしていなーいが。そしてその鼻血の原因は……まあ隅っこにでも置いておくのだ。私は悪くない。断じて悪くなどない。原因が何であれ鼻血は鼻血なのである。

「……まあそれだけじゃないんだけどー」

「……へ?」

「んー、まあそれはそのうち分かるからー……大変になると思つけどー、まあヒイラギなら大丈夫ー」

「……え?」

思案していた私にタチバナさんがポツリと呟ついた。

それだけじゃないつて? 大変って何が?

今日の私は疑問符だらけである。

私の説明ブリーズな様子に気がついているだろうに、それ以上は答えるつもりがないらしいタチバナさんはそれを笑顔でスルーしながら話を変える。

「あと保健室の件だけどー」

彼女は一寸言葉を切り、私を見遣る。私の訳が分からぬといふ訝し気な瞳とタチバナさんのこちらを探るよつた瞳が合わさつた。

そこからしばらく何も言わない彼女に不思議そうに首を傾げながら言葉を待つ私。どうしたというのだろうか？

待ち切れなくなつて私が言葉を掛けようとしたその時、彼女は珍しく不適に笑つた。

悪魔なんて田じやない。そちらの男共を一気に魅了し、膝まづかせそうなその神々しいお姿。その、なんて言いますか、あれです：物凄く怖いです、はい。

「ヤレーハー、本当にヒライラギが田描してた部屋なのかなー……？」

……それってどういう意味だらうか？

まさかタチバナさんまで私が夢遊病者だと言つのだらうか？  
はは、まさかあ、まさかね。

……。

「……………私つてもしかして夜中、徘徊とかしづけたりしてるん

スか……？」

「うふふー」

固まつて問い合わせる私に意味深な笑みを向けるだけで何も言つてくれないタチバナさん。え、ちょいとそこは否定してください。何だ？私は夜な夜な徘徊をしているのか？そして田覚めるときにはきちんとベッドに入つていると？だから自分では気が付かないとい？ そうならば本当に私は自分が夜中、何をしているのか分からないとこつ」と。

……怖いな。

「あの、タチバナさん……」

「うふふー」

「私つて徘徊癖とか……」

「うふふー」

「もしくは夢遊病とか……」

「うふふー」

「もういつそ両方とか……」

「うふふー」

「タチバナさ

「うふふー」

私の問い掛けを全て「うふふー」の一言でスルーし、ご機嫌にス  
キップしながら自室へと消えるタチバナさん。

いくら問いただしても彼女はそれ以上何も答えてくれなかつた。

誤字・脱字などあれば報告して貰うと有難いです  
（ 、 、 、 ）

012 個人的な忍耐修行（前書き）

本日もどうぞ宜しくお願ひ致します。

「……サカキ、私は夢遊病者で徘徊者かもしねれない」

「今日は珍しく早く来たと思ったら何よ突然……ってか、恐ろしく暗いわね」

朝登校して、いの一番に私の口から出たのがその台詞だった。自分でも物凄く暗い顔をしているのがわかる。だって怖いではないか。今日は登校時間の計算どころではなかつた、というか寝ると自分が何か仕出かすのではないかと一睡も出来なかつたのだ。

クマを付属させた死んだ魚のような眼で時計をチラリと見ると始業15分前を針が指していた。普段では有り得ないことである。

「まさか昨日私が言つた事を気にしてるの?あれ冗談だからね?」「…………冗談…………」

彼女は冗談でこんな爆弾を落してくれたというのか。

「ごめんごめん」と彼女は謝りながら今日も櫛を片手に私の寝癖を直してくれる。だが今更彼女が否定してもさして意味はない。彼女の知らない場所で発動している可能性も否めないのである。唯一私の夜中の様子を知るタチバナさんが否定してくれない限り私の夢遊病、徘徊説はバツチリ有効なのだ。タチバナさんは肯定をしてはいないが否定もしてはいない。まだどちらが正しいのかわからないのである。

私は席に着き、机に突つ伏した。

「それより今日は早速実習じゃない。ヒイラギはペア発表のときい

なかつたけどちゃんと誰と組むか聞いた?」

「……聞いてないよ。ペアとか、ほんとどいつもいいし」

それより昨日から発生している問題の真実が知りたい。

因みに昨日私を苦しめたフェロモン酔いの問題は既に解決済みだ。拳で説得、つまり殴って脅してフェロモンなど出させなければ良い。只それだけだ。

男だろうが女だろうがそれは変わらない。私は男女差別などしない主義なのである。

いくら言葉が伝わらない奴だとしても拳は世界を越えても共通語なハズ。そう私は信じている。余計な言葉は要らない。全ては拳が語ってくれる。

「どうでもいいって……3年間一緒になのよ? 代えられないのよ?」

ため息混じりで尚サカキが私に問いかけてくる。寝癖を直し終えたのかサカキは私の背後から隣にある彼女の席へと腰を下ろした。それを名残惜しく見送りながら先程の彼女の言葉を思い出す。

3年間か……確かに長い。どうでも良いといつても不快な奴とは流石に勘弁である。出来れば少し脅した程度で従ってくれる小心者が良いのだが……。

私の頭をふとよぎる昨日の不快な出来事、滴る赤い液体。無意識に苦虫を噛み潰したような顔になつた。……アイツは絶対嫌だな。

「……んじゃ鼻血垂れ以外なら誰でも良い  
「誰よそれ」

首を傾げるサカキ。あれだけ派手にやつたといつのに、やはり彼女は気付いていなかつたのか。

悪魔のフェロモンが凄いのか、はたまたサカキの周りが見えなく

なるほど美形に夢中になれることが凄いのか。

私が講堂を出たときの状態のままだつたならばサカキの隣で間抜けに鼻血を垂らして転がつていたはずなのだが、流石に移動したのだろうか。思い出すだけでも腹立たしい、あの性格、あの声、あの顔

顔……？

「…………黒髪に赤目の中」

「…………ねえ、それってわざと言つてるの？」

確かにそれではただ単に黒学の男子生徒と言つていいようなものだ。

しかし、私の中であいつの顔など最早へのべじ程度にしか記憶に残つていない。『ベ』の半濁点部分は言わずもがな、鼻血である。

覚えていないものをどう説明しようと。

「あれ？ イズミ先生」

まだ始業ベルが鳴る前だといつのにイズミ先生が教室に入つてきたらしい。サカキが思わず咳く。

私は未だ机に突つ伏したままなので聞こえてくる声に耳を傾ける。

「脚あんいますか？ ヒイラギは……いますね。じゃあ大丈夫ね」

いつもベルと共にピッタリと教室に入つてくる私がいるから大丈夫、皆いるだろう。言外にそう言つている言葉をイズミ先生が零す。我がクラスの生徒達は實に真面目だ。皆、始業開始20分前には教室にいると以前サカキから聞いたことがある。対して私は本当にギリギリで到着するという事は周知の事実だ。

軽く皮肉を言われたような気がしないでもないが、スバリ当たつ

ているので私に異論はない。

「これからペアと合流して一緒に講堂に向かってもらいます。移動してからだと時間がかかるので……とりあえず皆さん着席してください。着席したら入つてもらいします」

イズミ先生の言葉に従いガタガタと着席するクラスメイト達。黒学の生徒と聞いてか、そこかしこでヒソヒソと話しそがし、浮足立つているのがわかる。

当然サカキも例外ではない。何やら纏う霧囲気がお花畠だ。ルンルンランランしている。……見なくとも分かるとか……ちょっと浮かれ過ぎではなかろうか。

「ねえねえ、黒学の生徒が直接ここに来るつて……！」

「…………！」

突然背中にジンジンと痛みが駆け巡り悶絶する私。  
嬉しいのは結構なのが私の背中をその怪力でバシバシと容赦なく叩くのは止めて欲しい。絶対背中が赤くなっていることだらう。  
……後で覚えていやがれ、サカキ。

「…………では入つてもらいます……くれぐれも惑わされないよう」「

どうやつてサカキに仕返ししてやううかと思考を巡らせていくと、皆が着席したのを確認したイズミ先生がそう告げた。『くれぐれも』という部分がかなり強調されていたが……まあ昨日の様子ではそもそもなるだろう。イズミ先生の言葉が耳に入らなかつたのか忠告を受けても生徒達は騒いでいる。

これはマズいんじやなかろうか。

そう思つたときには前方からどす黒いオーラを感じた。空気がピ

リピリと張り詰めて肌を刺激する。……伏せていて良かつた。彼女が今どんな表情をしているのか…………おお、想像しただけでも悪寒が。美人が凄むと迫力がハンパないというのは本当なのだ。

流石にイズミ先生の無言の圧力に気づき、慌てて黙り込む生徒達。その様子を見てイズミ先生は深い溜息をついた。それと同時に張り詰めていた空気が消える。……どうやらギリギリでお咎めは免れたようだ。

しんと静まつた教室にガラガラと扉を開ける音が響いた。

「う……っ

気持ち悪い。昨日と同じく吐き気が一気に込み上げ、慌てて鼻と口を両手で押さえる。

奴らはまたもや大量のフェロモンを撒き散らしているようだ。扉が開いた途端、フェロモンが一気に教室へと流れ込んだらしく私は一瞬にして気持ち悪くなってしまった。

油断していた私も悪いのだが、先ずはお前ら害あるものを撒き散らすなど声を大にして言いたい。こんなもの公害でしかないというのに。

拳で説得すれば良いとはい、それは一対一の場合である。それに今はイズミ先生が近くにいる。昨日は見逃してくれたが今日も見逃してくれるという保証はない。全員を殴るわけにもいかない。

考えた結界、私は伏せたまま耐え抜くことを選択した。この鬱憤は後で晴らすことにする。勿論、今から来るだろうペアに、だ。

肋骨3本くらいなら許されるだろうか?いや、許さなくともやるけど。3本折れてもまだ半分以上残っているし、うん、大丈夫、問題ない。

ああでもないこうでもないと憂き晴らしの方法、基、ペアをボコる方法を考えて気を紛らわしながら私はじっと時が過ぎるのを待つた。



012 個人的な忍耐修行（後書き）

誤字・脱字などあれば報告して貰うと有難いです ( )

0-1-3 全てを超える者（前書き）

本田も必ずお宜しくお願ひ致します。

「キャーッ！」

「ヤバイ、カッコイイ…っ！」

「あ、今私に手え振つてくれた！」

「ちょっと違うって、私にだつてば…」

「違<sup>ちが</sup>え！俺だし…」

「はあ！？」

「あなたは黙つてなさいよ！」

あれだけイズミ先生が忠告したにも関わらず黒学の生徒が入室してきた途端に教室は色めき立つた。何だ此処は。ライブ会場か？アイドル並に熱烈な歓迎を受ける彼らは手を振つているらしい。ああ、苛々する。この疼く拳をさつさと解き放つてしまいたい。私の様子なんてお構い無し……いや、寧ろ気付いてすらいないクラスマイト達は続々と登場する美形集団を前にしてどんどんヒートアップしている。煩くてかなわない彼らの黄色い声は直接私の脳にガンガン響き、容赦なく頭痛を起こしてくれた。もう少し静にしてくれないだろうか……頭がかち割れそうだ。

「ちょっと、大丈夫？！」

机に伏せたまま口元を両手で覆い、顔色が恐らく真っ青であろううちに唯一気が付いたサカキが声を掛てくれる。このフェロモン酔いを昨日話したおかげか今度はちゃんと気が付いてくれたようだ。

今、友情はフェロモンを越えた。感無量である。

私は大丈夫だという主旨を伝えるため、チラリと彼女を横目で見

た。

「大丈夫なの？！」

「……」

視線の先にいたのは、口では心配の意を表すくせに顔を真っ赤に染めて前方を凝視するサカキがいた。

やはり友情など恋の前……いや、フュロモンの前ではとても儚い存在のようだ。サカキの友情と書いて薄情と読むのだろうか。

……いや、分かつてはいるのだ。これは生理現象といつても過言でない事は。悪いのは悪魔どものフュロモンでサカキが悪いわけではない。……だが実際こうなると面白くないのも事実である。

私がジト目になるのを認めたサカキが慌てて弁解をする。

「や、ごめんっ！心配してるのはー！？」

……うむ、全く以つて説得力がないな。

そのままじとーっと私はサカキを見る。しばらく「違うの」とか「体が勝手に」とか言い訳をぽろぼろと零すサカキ。もういいやとまた机に突つ伏してそれをはいはいと聞き流していたら急にサカキが黙り込んだ。……虐め過ぎたか？

チラリとまた横目で隣を見ると、彼女は顔といわば全身を真っ赤にしたままボーっと呆けていた。

口が半開きだ。……飴でも放り込んでやるつか。

カバンに片手を突つ込み、手探りで飴玉を漁つているとふと気が付いた。そういえばあれだけ煩かった教室もいつの間にか静まり返っている。……何故だろうか。

私が疑問符を浮かべながら彼女を見ていると今度は呆けていた顔が驚きの表情に変わり、大きく目が見開かれていた。……ころこ

る表情が変わつて忙しいな、サカキ。

彼女の視線は先程からずっと前に向けられたままである。一体何に驚いたのだろうか。

…… イズミ先生が変顔でもしたとか？

……。

……いやいや、まさか。

……。

……。

……何かドキドキしてきた。

是非に拝見したいです。

私は逸る気持ちを押さえながらサカキの視線の先を追おうとゆっくり前を向いた。

「……あれ？」

目に映つたのは残念ながらイズミ先生の変顔ではなかつた。寧ろ見えない。何も見えない。……何故か目の前に広がつているのは闇だけなのである。

眩暈が悪化したのだろうかと一瞬思つたが、体調はそこまで酷くないので直ぐ様違うと判断を下す。

原因は現在進行形で私の顔の上半分を覆つている何かだろう。なんじやこりやとカバンに突つ込んでいた右手をそれに持つていも、べとつと触つてみた。冷たい。…………これは手だらうか？

……手？ 何故に手？

所謂あれか？ 「ああ～れだ？」とか言つて相手の口を塞いで自分が誰だか当てるやつか？

懐かしい。そういうや幼少の頃はその遊びを何度も熱心にやつたものだ。皺がまだそれほど刻まれていないつるつるな脳みそを懸命にフル回転させて考えたフェイントやら小細工やらを駆使して皆でフィーバーフィーバーしていた。今では何故飽きもせずあれだけやつ

ていたのか謎だが、まあそこは子供が故と以此にしておけ。子供が故。なんて便利な言葉だろうか。一種の免罪符のようだ。

そんな今となつてはぐだらない遊びがここからの世界にも存在していたとは。別に驚く事はないが妙に感心してしまつ。

しかしこの手の持ち主は誰であるつか？

このままでは何も出来ないので自らの手を動かし、これが誰の手か確認してみることにした。

当たら何か奢つてもらおうかな――

「ちょっと――」

「離しなさいっ！」

「キヤーッ！」

「イヤーッ！」

……え、何事？

私が手を動かした瞬間、何故か周りが騒がしくなつた。頭にぐわんぐわん響いて意識が軽く遠退く。

あまりの騒がしさに手を離して触るのをやめてみた。……途端に先程までの騒がしさが嘘のように再び静寂が訪れる我が2-C教室。

……。

もう一度触つてみた。

「キヤーッ！」

「イヤーッ！」

「その汚い手を離しなさいー！」  
「殺すわよー！」

……わあ。

頭にかなり響く。物凄い大合唱である。そして恐ろしく息がピッ

タリ……お前ら仲良しさんだな。打ち合わせなんていつしたのだろうか。

悲鳴は死学の生徒、罵倒は聞いたことのない声なので黒学の生徒のものだろう。知りもしない奴に何故殺意が込められた罵倒を浴びせられるのかわいっぱい分からぬ。触つただけで殺すとかどんなどよ。

そして何だ？ 悲鳴が出るとか、手だと思つたこれは実は手じゃないのか？ ゲテモノの部類なのか？ いつの間にだーれだ遊びから物当てクイズへ移行したのだろうか。

しかし、このままではらちがあかない。悲鳴と罵倒の襲撃により頭はかち割れそうな勢いで痛いがここは無視して探ることにする。……なんだかゴツゴツ。そして「デカい」。そろそろと辿つていくと長いものを5本確認することが出来た。

これはゲテモノではない。やはり明らかに手である。より詳しく言えば男の手。

その手が私を田隠し……というよりは顔の半分を鷲掴みしている。力はそれ程入つていないので痛くはないが……これは何という技だつただろつか？

…………ああ、そうだ。あれだ。

「アイアンクローか」

「……相変わらず思考がぶつ飛んでいるな」

アハ体験でスッキリした拍子に思わず声に出してしまつていたらしい。売れっ子声優も顔負けな良い声で返事が返ってきた。

……氣のせいでなければバタバタと人が倒れたような物音が幾つか聞こえた。マジかよ。凄えな。惱殺ボイスとはよく言つが、リアルに人が倒れるなんて聞いたことがない。

低くてよく通る音が私の鼓膜を振動させる……何だらう。何かこの声聞き覚えがあるような気がするのだが。そういうえばこの手も知

つているよつたな氣がしないでもない。

「……治してやるつか？」

また私に話し掛けて来る心地好い声音。

あ、と思ったときにはあの忌ま忌ましいフヨロモン酔いは跡形もなく消え去った後だつた。

私はこの人を知つてゐる——当然だ。

毒抜きをしてくれたその手は、用を終えたとばかりにスッと静かに離れていつた。私の視界が徐々に開いていく。

「保健室のださま……黒学の生徒さん」

……危ねえ。

つかり抱きまくらとか言つちやつた口にせどんな田に合ひつゝとか。想像力豊かな皆わんであれやこれやと噂は変な方向に向かうこと間違いないだろう。相手が悪すぎる。女の妬みや嫉妬……想像するだけでも面倒臭い事この上ない。

目の前には昨日保健室で会つた超絶美形悪魔が無表情でこちらを見下ろしていた。

### 0-1-3 全てを超越する者（後書き）

誤字・脱字などあれば報告して貰うと有難いです  
（ 、 、 、 ）

014 支配と従属そして例外（前書き）

本日もどうぞ宜しくお願ひ致します。

いつの間にか静まり返った教室。

その中で視線は全て私の目の前にいる恐ろしく顔が整つた黒学の生徒へ集まっていた。

その視線は様々だ。

顔を真っ赤にして呆けている死学の生徒達からは良い意味でこの世のものとは思えないものを見る視線を、頬を染めている黒学の生徒達からは崇拜するようなうつとりとした視線を――そして唯一イズミ先生だけが探るような視線を彼に向けていた。先生のその視線においては私にまで及んでいる。……え？ 何で？

彼に視線を戻すと、すっかり顔色が良くなつた私を無表情で見下ろしていた。……この悪魔は何者なのだろうか。

ふと思いつき浮かぶ昨日考えた一つの説。私は若干心拍数を上げながらゆっくりと、だが着実に目線を下げていく。

……あつた。

視界には嫌味かという位やたらと長い足が2本入っている。どうやら幽霊ではないらしい。

そういうやester見たときも足はバツチリ付いていたなと思い出しながら再び視線を彼の顔に戻す。

あまりにも整いすぎて造り物みたいなその顔は相変わらずの無表情だ。何を考えているかさっぱり分からぬ。

彼の正体は物凄く気になるが、そんなことより先ずはお礼を言わなければならぬ。お礼は先程の毒抜きをしてもらつた事に対してのものである。今はイグラント在住で生糸の日本人とは言えなくなつてしまつたが、元日本人として仁義は忘れてはいけない。

「……かたじけない」

……何だか武士のような言葉遣いになってしまった。日本人らしくとは思つたがこれでは日本人味が溢れすぎている。ついでに漢氣も溢れてしまつていい。きっと何だか知らんが現在進行形で張り詰めているこの空気のせいだ。

少し間を置いて「ああ」という短い返事が返ってきた。彼は細かいことは気にしない性質たちのようだ。良かつた。

そんな彼を見つづ、先程毒氣を抜いてもらつたおかげで体調がすこぶる良くなつた私はへりりと笑う。悪魔は嫌な奴らだが、皆が皆そうではないらしい。今の所この目の前にいる悪魔は良い奴だとうのが現時点での私の見解である。何せ2回も助けてくれたのだ。そうやってただ笑つただけながら私を彼はイズミ先生と同様、探るように目を細めて見てきた。

え、何？間抜け面が見るにも耐えなかつたのか？……だつたら少しショックなのがだ。

そんな私を他所に教室中の視線を集めている彼はゆっくりと口を開く。

「お前がヒイラギか？」

名前を尋ねられた……というよりは確認をされてしまった。

彼の予想外な投げ掛けに私は驚いて目をぱちぱちさせる。

昨日名乗つた記憶はない。それなのに何故私の名前を知つているのだろうか？

「ヒイラギですけれども」

取り敢えず返事を返しておぐ。私は確かにヒイラギだ。サトウさんでもスズキさんでもない。

私の返事を聞いた彼は「そうか」と呟いたまま私をじっと見つめて動こうとしない。

彼は一体何がしたいのだろうか。

読心術スキルなんてものを習得していない私には彼が考えていることなど分かるはずがない。言いたいことがあるならさつと吐いて欲しい。

全く理解できない彼の行動に私は首を傾げ、無意識に眉を顰めた。

一方、教室は我に返った生徒がちらほら出てきたらしく、少しづわザワとしている。そして今にも射殺すとばかりの鋭い視線が私に向かっていた。黒学の女子全員と黒学の男子の半数ほどが私を睨みながら静かに言葉を投げ付けて来る。

——何、あの女

——調子に乗んじゃねえよ

——何でみんな女に

——キリュウ様に近づくな

キリュウとは私の目の前に立っているこの黒学の生徒の事だろつか？

ちょっと触れて言葉を交わしただけで一気に狂氣とも言える程の嫉妬を向けられるとか、ほんと何者なんですか。様付けなんてされちゃってるし。

私は彼をじっと見た。

寸分の狂いもなく整っている顔に装飾されている赤い瞳が私の平凡顔に付属されている明るい茶色の瞳とかち合つ。視界の端にはサラサラと流れる襟足が少し長めの艶のある黒い髪……いつも寝癖をそのままにしている私の髪とは大違いだ。そして肌は白い。そういうやサカキが色白の悪魔は珍しいと言っていたような気がする。

私は彼から視線を外し、ぐるりとクラスを見回した。クラスに入ってきた悪魔の中でその部類に入るのはどうやら彼だけのようであ

る。他の黒学の生徒の肌は色の濃さこそ疎<sup>まば</sup>らだが、皆揃つて色黒なんだ。

彼に視線を戻すと昨日とは若干違和感を覚えた。何となしに見ていると服装が違う事に気が付く。昨日とは違い、彼は黒学指定のブレザーを着ているのだ。

少し着崩された黒いブレザーには赤色のラインが入っていた。年齢までは流石に分からぬが、どうやら彼は私と同じ学年だということが判明した。まあそうでなければ彼が今このクラスにいる理由が分からぬ。

### 「ヒイラギ」

無遠慮にしげしげと觀察していると突然イズミ先生が私を呼んだ。考え方をしていたところへ急に名前呼ばれたので反応が遅れる。私は返事を返すのを忘れたままイズミ先生を見た。

イズミ先生はそんな私の様子を気にすることもなく言葉を淡々と続ける。

「彼は2年D組のキリュウ……あなたのパートナーです」

ああ、そうかこの人が私のパートナーか。

……。

……パートナー？

私は思わず彼を一度見してしまった。

#### 014 支配と従属として例外（後書き）

誤字・脱字などあれば報告して下さると有難いです

（ 、 、 、 、 ）

015 最適で不適なパートナー（前書き）

本日もどうぞ宜しくお願ひ致します。

『あなたのパートナーです』

先生がそう告げた瞬間、教室の騒がしさが最高潮に達した。

もう完全猫を取つ払つた黒学の生徒の中傷と死学の生徒の羨ましがる声が教室中に飛び交う。煩い。もの凄く煩い。そしてお前らやつぱり仲良いな。息がピッタリだ。……ところでさつき私の事を豚と呼んだ奴、後で覚えてろ。最近体重が少しばかり増加中な私は現在非常にデリケートなのだ。

そういうえばいつも煩いサカキの声がない。先程の惱殺ボイスでやられてしまったのだろうか。そう思つて隣を見ると彼女はキリュウさんと私を交互に見ながら鯉のように口をパクパクさせていた。

彼女は何とか生き残つていたようだ。そしてどうやらこのあまりの展開に追いて行けてないらしい。……気持ちよく分かる。本人ですら追いて行けてないし。

視線を戻すと綺麗な赤い瞳と合つた。

あれ、もしかしなくともずっと見られていたのだろうか。……その行為は信者共を煽るだけなので是非とも止めて頂きたいのだけども。しかし彼はそんなことこれっぽっちも考えてはいないのだろう。視線が外れる様子はない。

そういや彼、キリュウさんは顔と合致はしていないようだつたが私の名前を知つていた。昨日のペア発表のとき彼は私と同じく保健室にいたのに。前もつて自分のペアを先生にでも聞いたのだろうか。それに対して私は顔どころか名前すら知らなかつた訳なのだが。ペアなんてどうでも良いと思っていたが、まさか彼だつたとは……。拳で語る必要はもうなさそうだ。実習は思ったよりスムーズにいき

そうなので思わず頬が緩む。

「えーと、ヒイラギです。宜しくお願ひします。…………キリュウ、

さん？

「……ああ。呼び捨てで良い。敬語も使つな

呼び捨て御所望とは、彼は見た目に寄らず氣さくなよつだ。

少し上から目線な物言いをするので、何処ぞのお坊ちゃんなのだろうかと少し考えたが、まあ今はどうでも良い。細かいところは気にしないでおこう。話が通じるというだけで私は他に何も言つまい。先程彼から得た『呼び捨て』と『敬語なし』の許可は気を使わなくて良いから私はOKなのだが、それを聞いた黒学の生徒はそうもいかないらしい。私に向ける彼らの睨みや中傷が更にキツくなつた。うわあ、うるせー………… また私を豚と言つた奴、明日の朝日を拝めなくしてやろうか。

「そか。んじゃ改めて宣しく、キリコウ」  
「ああ」

取り敢えず周りは無視してこれから3年間お世話になる彼に挨拶をしておいた。思つてもみなかつた言葉が返つてきたので少し驚いたが、意外と気さくな彼とはうまくやっていけそうなので安堵する。話が通じる相手って本当に良い。

そんな私たちを見ていた黒学の生徒達からは遠慮なく中傷やらなんやらを私へと投げ続けられている。……だから何なんだお前らは。どうやらキリコウは過激な信者を沢山お連れのようだ。

和が「ンサリ」といふと不意に上へ下へが顔だけ振り廻り、彼の  
に一瞥をくれた。こちらから彼の表情は窺えないが、息を呑む生徒  
達の様子が見える。

さながら飼い主に叱られた犬状態である。あれだけ騒がしかつた

信者共が一瞬で黙りこくれた。凄え。心なしか彼らの頭と尻に垂れた耳と尻尾が見える。……何だか少し可哀相になつてき…………いやいや、私を豚と呼んだ奴らだ。情けなど無用である。

わんこ信者共は崇拜するキリュウに従順なようすで、まだ文句を言い足りないと聞いた氣な物凄く悔しそうな顔を私に向けていたが、口をつぐんでもう言葉を発する事はない。怨みをしこたま込めた視線が私に突き刺さるだけだ。

キリュウはそれを見届けて、またこちらを向く。

「……言つておぐがお前の為ではない」

「ああ、うん。知つてる」

何せベッドに運んでくれた理由が邪魔だつたから、だ。それに彼が止める義理もない。只単に煩くて耳障りだつた為にわんこ信者共を止めたことは分かつていた。

しかし私も彼と同じく煩いと感じていたので助かつた事には変わりない。

「でもありがと」

当然礼は言つべきと思い言つたのだが、彼は少し驚いた表情を見せた。

「結果的には助かつたし」と漏らせば彼は少し間が空いた後「そうか」と呴いたので私はまたへらりと笑う。

「……はい、では皆わんペアになりましたね。では一旦講堂へ移動してください。そこで今回の実習について説明があります」

今まで黙つて事の成り行きを見ていたイズミ先生はクラスが落ち着いたのを見計らい声を掛けた。一瞬目が合つた気がするが、直ぐ

にそらされ、そのまま彼女は教室を出て行く。……知らぬ間に何か悪い事でもしてかしたのか、私。

「……ヒイラギ、大丈夫?」

うーんと唸つていたら隣からサカキが心配そうに声を掛けってきた。  
大丈夫とは嫉妬やらなんやらで針の筵状態になつていてる事だろうか?  
?それとも体調の事だろうか?

どつちにしろ大丈夫だ。毒氣はキリュウに抜いてもらつたし、私は自他共に認める図太さを持つてゐる。嫉妬やらは面倒臭いが、生憎傷つくようなハートなんて持ち合わせてはいけないのだ。

「大じょ…………」

うぶ。

私は最後までその言葉を口にすることが出来なかつた。  
そのまま固まる私をサカキがひょつこり覗き込んでくる。

「ヒイラギ?……物凄い顔になつてるわよ?」

「…………テメエ」

そりや物凄い顔にもなる。

私は今苦虫を噛み潰したような表情をしていてことだらう。

「え、あーお前……つ!-!」

今まで口元を手で覆つて机に突つ伏していたので私も相手も気が付かなかつたらしい。

私が睨んでいると、今相手も私が誰だか気が付いたようではちらを指差して驚いている。

サカキの後ろにはあの鼻血垂れ、へのへのもべじ野郎が立っていたのだ。

「え？ 何？ ヒムロ君と知り合って？」

「いや、全然」

「おま」

「全く」

何か言おうとした鼻血垂れに被せて言つ。耳障りなその声なんぞ聞きたくない。

名前も知らない。知りたくもない。

私は今しがた聞こえた奴の名前を脳細胞から即デリートした。こんな奴『鼻血垂れ』、もしくは『へのへのもべじ野郎』で十分である。というか呼び名があるだけ奇跡なのである。こんな奴がサカキの後ろに突っ立っているとか目障りで仕方がない。

……ちよつとまで。

何か凄く嫌な予感がする。

「……サカキ、まさかコイツって……」

最後まで言い切れない私を不思議そうに見つめるサカキ。

その先は言いたくない。多分当つているけど言いたくない。そして聞きたくない。

そんな私の心情なんて知らないサカキが可愛く首をかしげながらあつたりと言つてくれた。

「私のパートナーよ？」

やつぱりかつ。

私は思わず頭を抱えた。

誤字・脱字などあれば報告して貰うと有難いです  
（ 、 、 、 ）

016 慮外千万鴨葱ペア（前書き）

少しばかりの流血表現があります。本当に少しばかりですが。

本日もどうぞ宜しくお願ひ致します。

よりによつて鼻血垂れ……。

確かに私のパートナーはコイツではなかつた。それはとても喜ばしい。

だがしかし、だからといつてサカキのパートナーで良いとも思わない。コイツは最低な野郎だ。そんなやつが友達のパートナーだなんて受け入れられるものか。

今思い出しても腹立たしいことこの上ない。蹴りは入れたが私としては本来あれくらいじゃ足りないくらいなのだ。それこそ顔の原形が分からなくなるまでぶつ飛ばしたいくらいなのに。

震える拳を何とか押さえ、私はサカキに聞こえないよう奴に近づき、少しばかりドスを効かせた声で奴に優しく忠告をしておいた。

「……テメエ、サカキに何かしてみる。次は鼻だけで済むと思つなよ……全身血まみれにしてやる」

「……つ……やれるもんなら」

私の忠告に一瞬怯んだもののすぐに立て直し、いつちよ前に挑発をしてきやがつた。

ちょ、生意氣。鼻血垂れのくせに生意氣。この馬鹿に分からせる為にはやはり圧倒的な力の差といつもの叩き付けなければならないらしい。

私は半田で指を順にパキパキと鳴らしていき、仕上げに首も傾げて一発バキッと小気味よい音を鳴らす。準備運動完了だ。

その様子を見た鼻血垂れは慌ててサカキの肩に腕を回した。うわ、人質取るとか卑怯臭い。これでは中々手を出せないではないか。

鼻血垂れのそのいきなりの行動にサカキは顔を真っ赤にしてわたわたしている。こら、目を覚ませサカキ。

手を出さない私を見て鼻血垂れは口に嫌な笑みを浮かべながらサカキの耳元で囁いた。

「ねえ、サカキさん……ああ、さん付けつていつのもよそよそしいよね。パートナーなんだし。サカキって呼んで良い?」

「えつ、あつ、構わないけど……つ」

「サカツ……つ！」

今正にサカキは奴の毒牙にかかりついている。……サカキさん、いくら何でも簡単に攻略され過ぎやしませんかね?

口を開いてサカキを止めようと思つたのだが鼻血垂れがフェロモンを振り撒きやがつたらしく吐き気が込み上げ、私はとつさに両手で口元を塞いだ。小瀆こうじくな真似を……後であれだ、サンドバッグ。そう、サンドバッグの『』とき拳を叩き込んでくれる。

鼻血垂れは私がそのようなことを考えているとは露知らず。サカキを盾にすると私が手出し出来ない。そしてサカキはちょろい。その2つを知り、奴は私の最大の弱みを握つたつもりになつてているのだろう。余裕な表情でサカキを口説き落としていく。

「サカキって美人だよね」

「えつ！？」

「反応も可愛いし」

「へつ！？」

表面上甘つたるい笑顔をサカキに向け、砂を吐きそうな台詞がポンポンと奴の口から出てくる。聞いているこつちはもう耳からも砂が溢れ出そうな勢いだ。

イケメンは何をやつても様になると聞いたことがあるが、あれは

真っ赤な嘘だ。田の前の「イツ」は一応イケメンの部類に属するが、何をやつても薄ら寒く感じられる。ここは最早極寒地帯と化した。

コート、誰かコートをおくれ。

こんな鳥肌モノな、そしてテンプレな口説き方をされていくというのにサカキはもうノックアウト寸前らしく、湯気が出そうな勢いで顔が真っ赤だ。この純情少女はイケメンにとことん弱いのだな。こんな鼻血垂れでもサカキフィルターにかかるとしつかり良い男に映ってしまうらしい。サカキフィルター、凄すぎ。

私が変な所に感心していると鼻血垂れがスッとサカキの腰に手を回した。それを見た私は頭の中の何かがブチ切れ口元を押さえていた手を離し、振り上げる。このとき、フェロモンの事など頭から吹き飛んでいた。

私の拳が奴の顔面に減り込む直前

「キヤーッ！」

サカキの張り手が奴の顔面を直撃した。

どすこい。

私の脳内に某格闘ゲームのS.E.が木靈じだました。

正にお相撲さんバリな見事な張り手である。いや、お相撲さん以上に見事な張り手である。

鼻血垂れは予想もしていなかつた攻撃に受け身も取れず、まともに喰らつたようだ。

サカキの張り手が決まつた瞬間、奴の身体は宙に浮き、そのまま机と椅子を幾つか薙ぎ倒しながら教室の隅まで吹き飛ばされ、壁へ強かに叩き付けられた。昨日は床で今日は壁。奴は見る度、何処かしらに張り付いている。その様を見ていると窓に張り付くヤモリを思い出した。

……といえば先程首が変な方向に曲がっていた気がするが生きているのだろうか？

「え、あれ？ヒムロ君！？ビバしたの！？大丈夫！？」

サカキが慌てて駆け寄り、呼び名に相応しく大量の鼻血を垂れ流している奴を力の限りガクガクと揺さぶっている。容赦のないそれは私の目にはトドメを刺している様にしか見えない。出血量は増加の一方を辿っている。いいぞ、やれ。もっとやれ。

しかも『どうしたの』と言つている彼女の様子からどうやら自分の所業ではないと思つていいようだ。自分の張り手が決まったことすら気付いていなかつたというのだろうか……恐ろしい娘。

耳を澄ますと蚊の鳴くような声で「やめ……っ」「死ぬ……っ」と聞こえてきているのでどうやら死んではいよいようだ。正にゴキ並な生命力である。殺虫剤なら効くかもしれない。是非とも今度は用意しておこう。

それにしても良い飛び具合だった。馬鹿力だとは兼ね兼ね思つていたがまさかここまでとは。壁がなかつたら何処まで飛距離を稼いでいただろう。兎にも角にも私が直々に手を出す必要は全くなかつたようだ。ビバ、純情。ビバ、馬鹿力。つまりはビバ、サカキ。

やはり心配は無用であった。

瀕死な鼻血垂れを見て一人満足していると視界がぐるりと回転した。フェロモンをまともに喰らつたせいで。私は踏ん張り切れずそのまま床に崩れる。

ああ、情けない。

016 慮外千万鴨葱ペア（後書き）

誤字・脱字などあれば報告して貰うと有難いです  
（、・・・）

本日もありがとうございました。お願い致します。

廊下に出て長い螺旋階段を上り講堂を目指す。全クラスが同じ行動をとつてしているのでぎゅうぎゅう詰めになるかと思われたが私たちの前方はポツカリと道が出来ていた。リアルモーゼの奇跡なるものを私は初めて見た。この分だとラブレターは勿論、バレンタインにはリアルに下駄箱からチョコがどさどさと出てきて足元に小山を作るに違いない。是非見てみたいものである。まあこの世界にバレンタインなんものは存在しないのだが。

——そんなことをついつい考えて思考を散らす。面倒臭い、とても面倒臭い事態になつた。

今私は周りの殺意と好奇の眼差しを一身に浴びながらユサユサと揺られている。目の前に映る上り終えた階段が次々と流れでは視界の端に消えていく。目線を変えると広い背中が逆さまに映つた……どうしてこんな事に。

現状をズバリ言つてしまつと、私は今キリュウ氏に担がれている……言葉通り米俵のごとく肩に担がれているのだ。

何故こんなおかしな状況になつているかというと、話は10分程前に遡る――

「……またか」

「……申し訳ない」

教室でフェロモン酔いが悪化し床に崩れた後、今まで傍観に徹していたキリュウが面倒臭そうに後ろから声を掛けてきた。私が身体

を捩つて後ろを振り返り彼を仰ぎ見ると予想通りビンにかかったるそ  
うな空気を醸し出している彼の姿が映る。

まあ、そうなるだろ。つい先程毒抜きをしてもらつたのにま  
たこの有様だ。面倒臭いパートナーで本当申し訳ない。……いやい  
や、よく考えたらお互い様ではないか？私はわんこ信者共から理不  
尽な仕打ちを受けているわけだし。

一人で自問自答していると私の頭にぽんっと手が置かれた。吐き  
氣やらがみるみるうちに失くなつていいくのがわかる。空気清浄器の  
様な魔法の手……私も欲しい。

「ありがとうございます」  
「……氣をつけろ」

仕事を終えて私の頭から去つていく彼の手を見送りながらお礼の  
言葉を述べると、お礼に対して初めて「ああ」以外の言葉が返つて  
きた。やはり一々毒抜きをするのは面倒臭いのだろう。はい、氣を  
つけますとも。

しかしフェロモンは色が着いているわけではないので視覚で察知  
出来るものではない。吐き気がして初めてフェロモンが撒かれてい  
る事が分かるのだ。そんな状態でどう対処できるとこ？

「移動しないのか」

やはり物理学的に無理ではないだろかと結論を出したといろく  
キリュウが声を掛けてきた。そういえば実習の説明を授けるため講  
堂に移動しなければならない。サカキを見るとまだ鼻血が止まらな  
いらしい瀕死状態の鼻血垂れに付き添つっていた。そんな奴放つてお  
けば良いのにサカキはパートナーだからそんな訳にはいかないと言  
う。……ペアって面倒臭いな。

仕方ないので私はキリュウと一緒に先に講堂に向かうこととした。

彼女の事は先生に伝えておけば良いだろ。

教室を一歩出ればササッと全員が道を譲り人垣が開いていく。そこへ「マジか」と引き攣った顔で言葉を一つだけ零し、足を踏み入れていった。

私はその原因である超絶美形を見上げた。このVIP待遇をさも当然だと言わんばかりに気にすることもなく歩いていく。私は物凄く嫌なのがだ。

彼は無表情ではあるが何処か氣怠げな空気を纏いつつ階段を上っている……一段飛ばしで。嫌味なくらいに長いそのコンパスをちょっと分けてはくれないだろうか。日本人には羨ましい限りなその足をじとーっと見ながら私はちょこまかと忙しく足を動かし、一段一段階段を上っていく。これは軽く筋トレになりそ——

「遅い」

「……タッパが違えばコンパスも違うのだよ」

敢えて自分が短足だとは言わない。意地でも言うものか。

キリュウが立ち止まり、振り返つて零したその言葉についてい言い返してしまう。その瞬間周りから物凄い殺意が込められた視線がぐさぐさと私を貫いていった。何故か集中砲火を浴びているが私は悪くない。どう考えてもキリュウが悪い。でもそれを言うと周りの過激な皆さんガヒートアップされるのが見て取れるので口には出さない。

パートナーが話の通じる相手なのは良いが、いつも周りの反感を買つてしまつと微妙な気がしてきた。プラマイゼロといったところか。まあマイナスよりは良いのだが。

また前を向いて階段を上つていくキリュウの後ろをとことこと追

いていく。……心持ち速度が下がった気がした。  
やはり良い奴ではあるようだ。

「…………うぐつ

「…………」

また急に吐き気が込み上げフェロモンが撒かれたことを悟る。両手で口元を覆い、立ち止まる私。きっと私を自分に引き付けてキリュウから引き離そうとでも考えたのだろう。……もう嫌だコイツら。どんだけキリュウ大好きなんだよ。

キリュウもそんな私の様子に気が付き、立ち止まって振り返る。  
……いや、そんな目を向けられても、やはり無理なものは無理なのだ。解決策を見出せる気がしない。

私は体重を支えるのも辛くなり壁に身体を預けながらキリュウに言った。

「…………めん、先行つて  
「…………」

私の言葉を聞いたキリュウは黙つたまま眉間に皺を寄せた。……  
何でだ。

そしてそのままひじひじへゅつくりと近づいて来る。いや、先に行つてくれと言つただろう。毒抜きをしてもらつてもまた同じ事が繰り返されるのは想像に容易い。それだつたらいつそのこと拳で語つた方が手つ取り早いと思つた故の発言だった。

「えつ

いきなりの浮遊感。ふわりと身体が宙に浮いた。そして次の瞬間には私の腹部に圧迫感が襲つた。「んえつ」と女としてどうかと思

われる奇声を上げてしまったが仕方ないだろう。奇襲に対しても可愛らしく悲鳴を上げられる女の子は小数だと私は思っている。……いや、今そんなことはどうでも良いのだ。

私は混乱しつつも状況把握に努めた。何だ? 何が起こった?

「……」

しばし私の時間が止まる。

私は目の前に広がる広い背中を見て全てを悟った。自分、もしかしなくとも、わっしょい担がれていやしませんか。

キリュウに。

「……あー……キリュウ?」

「「」の方が手つ取り早い」

何が何だか分からぬが取り敢えず話し掛けると淡々とした返事が返ってきた。

いや、確かにそうだけれども。キリュウの手はずっと私に触れているので、もうフヨロモン酔いに悩まされる事はない。

……しかしだな。

「……抱ぐ必要ないよね?」

ないだろ。

腕でもなんでも掴んでくれれば解決するのだ。

彼の理解出来ない行動に疑問を投げ掛けた。

私のその疑問に対しても返ってきた彼の答えは至極簡単であった。

「「」の方が早く着く」

……はいはい、足短くてごめんなさいねっ。

私はもう色々と諦め身体の力を抜いた。ダラリと伸びる私の身体を軽々と担いだまま歩き始めたキリュウ。重くないのだろうか？重いと言われ現実を突き付けられたら大ダメージを喰らってしまうので聞かないけれども。

キリュウは見た目は細そうに見えるのに筋肉はしっかりと付いているようだ。流石男なだけはある。

しかしその逞しい筋肉を所有しているのならこの扱いは如何なものか。私は一応これでも女だ。これはない。この担ぎ方はナシだろ。こう、もっと格調高くお姫様抱つことか……。

「……」

ないな。ナシだ。前言撤回だ。

お姫様抱っこをされる自分を想像して盛大に眉間に皺を刻む私。有り得ない。いや、本当に有り得ない。

そしてあれこれ馬鹿なことを考えている所で冒頭へと戻る。

誤字・脱字などあれば報告して下さる有難いです

（ 、 、 、 、 ）

本日もごつづけ宜しくお願ひ致します。

キリュウの肩に担がれ2人共無言のままユサユサ揺られ続ける私。後どれくらいで着くのだろうか。

私の腹にキリュウの肩が食い込んで結構苦しいわけだが今はそんなことを気にしている場合ではない。一度は諦めたがやはりこの曝さらしものになつてゐる現状を打破しなければ――

――そう考へてゐるうちに到着してしまつた。

我が21C教室から講堂までのこの道程は兼ね長いと思つていたが、今日ほど早く着いてほしいと思つたことはなかつた。まあ彼の存在感と長い足の効力で思つたよりかなり早く目的地に着いたわけだが。

講堂にはちらほら着席している生徒たちがいた。そこへ足を踏み入れた瞬間彼らから殺意と好奇の視線が向けられ私に突き刺さる。私の身体はもう穴だらけだ。蜂の巣状態だ。……何かもうそれらの視線にはこの短時間で慣れてしまつた。

キリュウは講堂に入ると入り口から反対に位置する一番後ろの席に私を下ろした。次いで自らも私の隣へ座る。

やつと足を地に付けることが出来た。私は担がれた事によつて地味にダメージを受けた腹を摩りながら安堵の溜息を吐く。頭に上つていた血が下がり暫しボケーとしていた。

キリュウと出会つてからの一日、とても濃い時間を過ごしている気がする。まだ2日なのに……これから3年間が物凄く長く思えた。

フローモン酔いに抱きまくら事件。あれはやらかしてしまったな  
と思ったが彼は気にしていないのだろうか。……できれば記憶から  
消し去つて欲しい。これからもどんどん問題は増えていくのだろう  
か?まさかの夢遊病説まで上がつたし。……夢遊病?

そこでふと思い付いた。保健室の謎。あれはキリュウに聞けば解  
決するのではないかろうか。何せ彼も保健室にいたのだ。私が寝てい  
るとき私がどうしていたのか尋ねれば良い。

「キリュウ」  
「ヒイラギ」

それだ、と意気込んで尋ねようと彼を呼んだのだが同時に彼も私  
を呼んだ。変な沈黙が二人の間に流れる。こいついう空氣つて妙に気  
まずい。

「……お先づけ」

やはり私は慎み深き日本人。保健室の事は物凄く気になるが発言  
権を彼に譲ることにした。

彼は私から発言権を渡され先に私へ質問を投げ掛ける。

「……昨日何故あの場所に来れた?」

あの場所とは保健室の事だろうか?どうやら彼は私と同じく保健  
室の事で気になつていることがあるようだ。……それにしても『來  
れた』とはどういう意味だろうか?私はここの中生徒だ。しかも2年  
生。よっぽどの方向音痴でなければ単純な造りのこの校舎で迷うは  
ずがない。

私がどう答えていいものか分からず首を傾げていると彼は私にち  
ゃんと通じていないうことが分かったのか、キリュウが補足をする。

「あれは黒学の保健室だ」

「……え？」

黒学の？

どういうことだ。

全く意味が分からぬ。混乱する私を他所に彼の説明は続く。

「昨日俺がこここの保健室と黒学の保健室の空間を繋げた。入つても俺以外は普段通りこここの保健室に着くよう細工をして、だ。俺と同じく空間魔法を使い、更に仕掛けた罠を潜らなければ黒学の保健室へ来ることはできなかつたはずだつた。……だがお前は何でもないかのように黒学の方に来た」

わあ、凄え。キリュウがいつぱい喋つちやつてゐる。ちょっと感動……じゃなくて。

なんと。

驚きの真実が判明した。

昨日の保健室での出来事を思い出してみる。そういうや彼は『何故ここにいる』と私に言つていた。あの質問は入れるはずのない場所に何故私がいるのかという意味だつたらしい。

あの時は死学の保健室だと信じて疑わなかつた、というより別の部屋だとは考えもしなかつた。知らぬ間に黒学の保健室に飛ばされていたのか。ということはあの素敵寝具は黒学の……。

ガツクリ肩を落とす私を見つめたままキリュウは更に続ける。

「……そして俺が出て行く前、繋げていた空間を切つた。扉を開ければ普通は黒学の廊下に出る。……だがお前はまた死学へと帰つて行つた。空間魔法は悪魔と天使にしか使えない。死神には使えないはず……。お前は一体何をした？」

私を深く探る「つ」とする赤い瞳。

それを綺麗だなと見つめながら私は答えた。

「いや、別に何も」

「……」

キリュウの目が細まる。どうやら疑っているようだ。

そんな目をされても何も答えられない。だって本当の事だし。

私はそのまま言葉を続ける。

「扉を開けたら勝手にそこに辿り着いただけだよ。今キリュウに言われて初めて黒学の保健室だつたって知ったし」

「……本当に何もしていなか?」

「うん」

「……そつか

まだ納得してなさそうだったが諦めたのかキリュウはそれきり質問をして来なくなつた。私の言葉に嘘は一つもないのだが。あの時は体調が最悪で只安息の地、ベッドを求めていただけだ。

「……」

「待て。待てよ?」

私が黒学の保健室に行っていたならば、サカキと鉢合わせしなかつたのはそのせいではないか。私は黒学の、彼女は死学の保健室に居たのだから。

「……」  
「すれ違いでも何でもない。場所自体が違うのだから会えるはずがなかつたのだ。

「……希望が見えたぞ。

「……キリュウ、私って寝てる間歩いたりしてた?」

「いや。寝言なら言つてこいたが

その言葉を聞いた私は無言で両手の拳を天高く突き上げた。

さよなら夢遊病説つ。

おめでとう、私つ。

私の夢遊病説はかなり白に近づいた。当事者が違つと言つたのだ。

この発言の効力はかなり高い。

タチバナさんのあの反応は今でもよくわからぬいが……今日帰つたらもう一度問い合わせてみよう。

……しかしまた一つ問題が浮上しなかつたか？

寝言つて何言つたんだ、私。

0-1-8 真相解明に伴つ無罪放免（後書き）

誤字・脱字などあれば報告して下さる有難いです

（ 、 、 、 、 ）

本日もありがとうございました。お願い致します。

夢遊病説がほぼ白に染まり、安心した私は机にだらりと伸びた。一気に眠気が私を襲い、瞼が鉛のように重くなる。ついで昨日は寝られなかつたのだつた。

私はそれに逆らう事もせず目を閉じた。もつ寝言とかどうでも良い。どうせどうでもいい事を喋つたのだ。そんな事より今は睡眠を取る方が大事なのである。

私の大好きなまどろみの時間。ひとつひとつその幸せな時間を堪能していた。

……うん、やっぱり良いね。寝られるって幸福な事だ。

「うぐ……」

幸せを堪能していた私は突如盛大に眉間に皺を寄せる。……誰だ。私の憩いの時間を邪魔しやがつたのは。

吐き気と頭痛。原因はあの憎きフェロモンである。

私のこの幸せな時間を邪魔するなんて絶対ただでは済まらない。私はその愚か者の顔を脳内に刻み込む為、顔を上げようとした。しかし不意に頭にかかるてきた心地良い重みにそれは叶わなかつた。

た。

「寝てゐる」

隣から聞こえるキリュウの声。何処か安心するその声に逆らわず、私は身体の力を抜いた。吐き気と頭痛はもうない。あの魔法の手が毒抜きしてくれたのだ。

残つたのは眠氣と心地好い重みだけだ。最初はぽんと乗つかつていただけのそれは今では何故か頭をゆっくり撫でている。……何これ、ヤバイ、気持ちいい。

先程まで私の中を蠢いていた殺意は跡形もなく消え去つた。代わりに訪れる強烈な眠気。

私はその手に誘われるようすに素直に意識を手放した。

黒学の生徒と教師が驚愕の表情でこちらを見ていたのだが眠っている私は知るはずもなく、ただやうやうと揺れるような心地良い波にのまれていた。

「 そろそろ起きる」

「 ……んあ？」

間抜けな声を発しながら私は眠りから覚めた。顔を上げると超絶美形の顔が視界に入る。……寝起き様にこの顔は駄目だ。眩しくて目がちかちかする。

私は目をしばたかせながら口元に手をやつた。……よし、今回は垂れてない。

セーフセーフと安堵しているとやけに静かな周りに気が付く。不思議に思い見回してみるとそこはもぬけの殻となつていた。広い講堂内に寂しくポツンと一人だけ座つている私とキリュウ。……何故？ 皆は？ というか今何時だ？

部屋の中央に鎖に繋がれ垂れ下がつてある大きな水晶玉を見る。時計である。この時計はどの角度から見てもちゃんと針が見えるスグレモノだ。構造はよく分からぬが恐らく魔法が施されているのだろう。魔法つて本当に便利。

因みに時間軸、季節なども不思議なことに日本と同じ。こちらとしては大変助かる。太陽らしきものも用いらしきものもちゃんとある

のだ。此処も太陽系と同じ様な構成をしているのかもしれない。全く違うところといえば西から上って東へ沈むということだけだ。某アニメソングと同じである。自転が逆なのだろうか？

そんなことを考えながらぼーっと時計を見ると針は12時40分を指していた。12時40分…………12時？

「……昼？」

「ああ」

私が思わず呟いた言葉にキリュウが肯定の言葉を零す。マジか。昼か。寝始めたのが9時頃だつたから3時間半ほど私は眠っていたことになる。ちよいと寝過ぎたかもしれない。此処に誰も居ないのは昼食を行つたからであろう。

「……実習」

眠つていたので何も聞いていないし何もしていない。もしかして寝ている間に終わってしまったのだろうか。

「……13時からだ。5分前に第一塔校門前に集合」

まあ良いかと思つていたらキリュウが隣から淡々と答えてくれた。  
……何だ終わつていなかつたのか。面倒臭い。

この講堂に現在私以外で唯一いるキリュウに目を遣る。彼は私が起きるまでずっと待つてくれていたのだろうか？別に放つておいても良かつたのに。

そこでふと頭に思い浮かぶ朝聞いたサカキの言葉。

パートナーだから？別行動は良くないと？……ペアつてホントに面倒臭いものだと思う。

まあ何にせよ私はまた彼に迷惑をかけてしまったようだ。

「ごめん、キリュウ。迷惑かけた。……あ、ご飯食べた？」

「……いや、俺はいらぬ」

「何で？」

思わず首を傾げて尋ねる。

昼食を抜くとは不健康な。健康の為にも出来る限り三食きちんと取るべきだ。

まさかキリュウが色白なのは不健康だからなのか？……それはないか。

……。

……昼ご飯をケチらなければならぬくらい貪食だとか？

「……悪魔は基本的に食事を取らなくても大丈夫だ」

私の考えていることが分かるのだろうか。キリュウは若干怪訝な表情でそう言った。

思わず読心術のスキルがあるのでないかと疑つてしまつ。

「……言つておくが心は読めんだ」

……いや、あるだろ。読心術スキル、バツチリあるだろ。私が疑いの眼差しをキリュウに注いでいると彼は小さく溜息をついた。

「そんなことより昼食はいいのか？」

「あ」

時間を見ると12時45分。ヤバイ。

実習先に持つて行くという手も考えたが荷物が増えてしまつ。と

いうか流石に没収されるだらう。皆手ぶらな中私だけが荷物持ちとか目立ち過ぎるし。実習には手ぶらで行くことがルールなのだ。

下りであれば教室まで走って2分ほどだが食事時間は5分と少ししかない。いや、待てよ。全力疾走した直後にご飯とかキツ過ぎる。休憩を入れれば実際5分もないだらう。……くそ、もっと味わつて食べたかった。

いやいやいや、悔しがつていい場合ではない。こうしていい間にも時は無情にも一刻一刻と過ぎていいのだ。急がねば。

「じめんキリュウ、先に行くよ」

「待て」

走り出さうとした私の腕を掴み引き止めるキリュウ。頼む、用なら後にしてくれ。私をタチバナさんお手製弁当が待っている。

懇願の意を込めて彼を見上げても一向に離してくれる素振りはない。何だ何だ。私の昼飯の邪魔をするとか、いくら恩があれば許さんぞ。……ここはやはり拳で語るべきだらうか。

「弁当か？」

この緊急事態にどうでも良い質問ありがとう。

私は早く行かないといけない。昼抜きとか考えられない。捕まれた腕を早く放せとばかりにガン見しながら頷く。

「何処にある

……だからさっさから何だというのだ。

早く行きたいのに何故か足止めを喰らい思わず眉間に皺が寄る。本当に時間がない。

「机の横に引っ掛けたる鞄の中だよ。だから早く

放せ。

後に続く言葉は口から飛び出す事はなかつた。ついでに握りしめた拳も。

目の前には見慣れた箱。そう、私のお弁当箱だ。それがいつの間にかキリュウの手にちゃんと乗つかつていた。え、何これ？ 激くないですか？

「コレか？」

ポカーンと口を開けて間抜け面を晒している私に向かつてキリュウが尋ねてきた。私は突然現れた弁当箱を凝視しながら何度もコクと頷く。

「時間がないんじゃないのか？」

ハッ。 そうだった。

不思議がるのは後から幾らでも出来る。現在の私の中での最優先事項は弁当を空にすることだ。

私はキリュウから弁当箱を受け取り、礼を言つてからじ飯を胃に詰め込む作業に取り掛かった。

019 瞳じく誘ひ魔法の手（後書き）

誤字・脱字などあれば報せ合して下さるに有難いです

（ 、 、 、 、 ）

020 ブレードマークは赤に書き下す（前書き）

本田も必ずお宜しくお願い致します（・・・・）

現在時刻は12時55分。

私とキリュウは時間ピッタリに集合場所へと到着し、既に列を成している生徒たちの最後尾に並んだ。走るどころか歩いてすらいい。ワープしてきたのだ。お蔭様で 私は残りの時間を全て昼食に回すことが出来た。空になった弁当箱はというと出してくれた時と同様キリュウが再び元あつた鞄の中へ返してくれた。渡した瞬間フツと消える様子はマジックとしか言いようがない。思わず歓声を上げて拍手まで送ってしまった。マジ便利過ぎる。

キリュウが言うにはこれが空間魔法というものらしい。空間を切つたり繋げたりすることが出来る超便利魔法だ。空間魔法自体はそれしか出来ないが、応用次第で昨日の保健室のように空間を歪める事も出来れば、先程の弁当のように遠くの物を取つたり自分自身がワープすることも出来る。位置を特定しなければならないため、知つている場所でないと失敗してしまうらしいが。

この魔法は悪魔と天使にしか使えないと講堂でキリュウは言つていた。惜しい。実に惜しい。それが使えば朝もつと惰眼を貪れるというのに。

因みに死神が使える魔法は、光と闇を除く火、水、雷、地などの自然魔法だ。光は天使、闇は悪魔しか扱うことは出来ない。

まとめるど、死神は火、水、雷、地など光と闇を除く自然魔法を、悪魔は闇と空間魔法を、天使は光と空間魔法を扱う事が出来る。

死神が扱える自然魔法は火や風などを起こすことができる。小さいものであれば薪など生活面の補助として、大きいものであれば攻撃や防御に使えるとても便利なものだ。……私は空間魔法の方が断然良かつたが。

あと魔法と言えるかは分からぬが死神特有の力が一つだけある。それが転魂てんこんである。狩った魂を転生させる力だ。転魂は魂が弱り切つて生き物を死神が鎌でぶつた切るだけで発動する。切るといつても切れるのは肉体と魂の繋ぎ目なので身体に傷が付く事はない。この方法以外で他界した生き物は転生することは一度とない。

また、余談ではあるが死神の戦闘スタイルは魔法の他に定番の鎌を使う。死神の鎌といえば身の丈程ある金属製の巨大なものを思い浮かべると思うが私たちの使うものはそれとは少し違う。

確かに大きさは身の丈程あるのだが、原料は金属でなく魔力なのだ。基本、火属性が得意な者は火属性、水属性が得意な者は水属性、とまことにかく自分が得意な属性の魔力をぎゅつきゅと固めて鎌を生成する。鎌の見た目は属性に伴い、燃えていたり水で出来ていたりと何属性か分かりやすい。鎌の強度は魔力が大きければ大きいほど上がり、そしてコントロール出来れば出来るほど体感的な鎌の重さは軽くなるので扱いやすくなる。自分が得意な属性で生成する理由はここにある。

同じ攻撃力の武器だとしても扱えなければ意味がない。下手をすれば鎌を生成したは良いが重過ぎて持つ事が出来ない、最悪生成する事すら出来ないということも有り得るのだ。

勿論鎌は魔力で作るので出し入れ自由、手ぶらで移動できてとても便利……なのだが。

「皆さん、揃いましたね。まずは……ヒイラギ、来なさい」  
「へ?……ああ」

イズミ先生にいきなり名前を呼ばれ、間抜けな声を発しながら顔を上げて彼女の方を見る。何事かと思ったが、視界にあるものを認め自分が何故呼ばれたのか瞬時に把握した。

私は「はーい」とやる気のない返事を返し、生徒の間を「ちょっとごめんよ」と言いながら縫い進む。そんな私をキリュウは無言で

見送っていた。

途中殺氣をそこかしこから感じたが気にせず一步一歩前へと足を運んだ。何人か私の足を引っ掛けで転ばせようとする輩ひがいがいたが、私はよいしょとそれらをかわし、そのお行儀おぎが悪い足を逆に思いつ切り踏ん付けてやった。オマケとばかりに捻ねじりも加えて。

その度に「う…ッ！」やら「い…ッ！」やら悶絶する声が上がるが自業自得である。わんこの躾しらべに手を抜いてはいけない。どちらが上かハツキリさせることが大事なのである。しかし、どいつもこいつも無駄に足が長い……躾の際に少々強く踏んでしまったのは御愛嬌だ、うん。

赤い帽子を被つた中年太りの某髭みゆきオヤジが茶色い最弱の敵を踏み潰していくかの如く前へ進んで行く。脳内では「トゥーン」というSE付きだ……ああ、BGMまで流れてきた。ててつてーててーてつ、てんつ。

懐かしみながら躾をしているうちに先生の前まで到達してしまった。結局奴らは足を引っ掛けようと/orする以外何もして来なかつた。つまりん奴らだ。

私がイズミ先生の前に立つと彼女は眉根を少し寄せ、持つているものを私に渡した。

「……無理はしないように  
「ありがとうございます」

私がイズミ先生から受け取つたもの。それは身の丈程もある金属製の鎌くわだった。

受け取つた私は礼を告げそのままそれをよつこいしょと肩に担ぎ、踵を返してキリュウの元へ足を進める。途中感じる視線は殺意から好奇のものとなつていたがスルーした。行きと違い、帰りは先程の躾の効果で噛み付いてくるおバカなわんこはない。

「……ヒイラギ、まだ出来なかつたの？」

「うん」

戻るとそこにはいつの間にか移動してきたサカキがいた。……ついで鼻血垂れもくつついているが視界に入れはしない。私の中で奴の存在を抹消した。

片手で顔を覆い溜息混じりで聞いてくるサカキに肯定の返事を返すと彼女はより一層深い溜息を吐き出す。いや、だつて出来ないものは仕方ないではないか。

「……それは？」

サカキと私のやり取りを見ていたキリュウが尋ねてくる。視線は私が持つている金属製の鎌に釘付けだ。……これ結構重いんだよ。ズルズルとずり落ちそうになるそれを私は抱ぎ直しながら答えた。

「私専用武器。私、鎌を生成出来ないんだよね。魔力で」

キリュウが物凄く驚いた表情をした……気がした。

020 テーブルマークは赤に■子（後書き）

誤字・脱字などあれば報告して下される有難いです（・・・・）

021

万年最下位のタイトル保持者（前書き）

本日もどうぞ宜しくお願ひ致します。

先程までちらほら私語が交わされていたのだが、今では私が投下した衝撃の事実に私を中心とする周りだけシーンと静まっている。あははと何でもない事のように笑う私を見るのは呆れ切った様子のサカキと今ではもう表情を読み取ることは出来ない真顔のキリュウ、驚きすぎて間抜けな面を晒している鼻血垂れ、そして私達の会話が聞こえていた周りの生徒達。周りの生徒に関しては、黒学の生徒は信じられないものを見る目を、死学の生徒は哀れむような目を私に向いている。私のこの出来の悪さは筆記テストで毎回最下位のポジションを陣取つてている事と共に死学の生徒達にはかなり有名な話である。まあテストについては筆記だけでなく実技も最下位なだが。……今更だが私、かなり出来の悪い落ちこぼれ問題児だな。

「……はあー？ マジかよー？」

「ホントよ。魔力は有るようなんだけどね……」

静寂を破つたのは我に返つた鼻血野郎だつた。それに対し律儀に答えるサカキ。サカキ、無視して良いんだよ。そんな奴。そしてそんな奴相手に頬を染めるでない。

鼻血垂れの言葉をきつかけにザワザワと周りが騒ぐ。聞いていた生徒から聞いていない生徒へとあつという間に話が広がつたようだ。あちらこちらから様々な視線が注がれて鬱陶しい事この上ない。私はモノクロ調の観賞用動物様ではないというのに。

まあ彼等が驚くにも無理はないのだけれども。

「……前代未聞だな」

「うん。死学始まつて以来らしいよ」

キリュウの言葉にあっけらかんと返す私。なんと私みたいな奴は今までいなかつたそうだ。どんなに魔力が小さからうがコントロールが下手だろうか鎌を生成出来なかつた生徒はいなかつたと以前聞いた事がある。

何度やっても出来ない私にイズミ先生は頭を抱え、苦肉の策でこの鎌の使用許可を出してくれた。これは少し特殊な鎌で魔力を注いで多少持ち堪えるように出来ている。まあやはりとか原料が金属であるので魔力で作られた鎌と比べるとかなり脆い。でも何も無いよりはマシ。横降りの雨の中、傘をさすようなものである。

またもやすり落ちてくる鎌を抱ぎ直す私を何故か探るような目で見てくるキリュウ。確かに前代未聞なら信じられないかもしないが……疑つているのだろうか？

「……今できるか？」

うむ、バツチリ疑つていたようだ。  
まあ仕方ないか。

私は「いいよ」と軽く返事をし、抱いでいた鎌を地面にドスッと突き刺した。そして空いた両手をキリュウに向かつて突き出す。やり方は実に簡単。ただイメージするだけである。

私は一つ深呼吸をし、魔力を手の平に集めるイメージを浮かべた。すると次第に手の周りが淡く光り出す。……ここまで順調。いつも通りだ。問題は次の段階である。

私は慎重にその魔力を固め、鎌の形に形成していく。光がぐにゃぐにゃとしながらもゆっくりと鎌の形に変わっていく…………が、もう少しの所でそれは飛散し、パラパラと光が散つていった。勿論私の手の中に鎌は存在していない。見事に失敗である。

「ほらね」

「……」

私が手をぱらぱらさせながらキリュウに見せると彼は田を細めてそれを見た。そして、何か考える仕草を取る。田の前でやつたというのにまだ疑つか。信じられないだろ？が本当に出来ないものは出来ない。

「何度もやつても固める段階で飛散しちゃうんだよね。そもそも魔法自体あんま使えないみたいだし」

「他人事みたいに言つてる場合じゃないでしょ？が

私のやる氣の無い言葉にすかさずサカキの説教が飛ぶ。私は「はいはい、頑張りますよー」と適当に返し、それをサラッと流した。いつもの事である。

「……戦えるのか？」

訝しげにキリュウが私に問い合わせてくる。彼が言つているのは魔物の事だろう。

この世界には死神、悪魔、天使の他に魔物というのも存在している。現在私たちがいる此処は人間の領域から隔離された死神の領域だ。同じイグラントに存在するのだが人間が住む大陸から海を跨いでかなり離れた所に存在する結構デカイ大陸なのである。魔法で姿を隠してあるので人間に発見されることはまず無い。結界も張り巡らしてあるので魔物も侵入不可能だ。

そんなこんなで死神の領域に魔物は存在しないが一步外に出ればうじゅうじゅうとそれらがいる。魔物は魔力を持った獣のような存在で、気性が荒いものは誰彼構わず襲い掛かってくる。だから人間の領域に行くには戦闘が余儀なくされるのだ。

因みに悪魔と魔物は違う種族だ。魔物は獣型が殆どで理性がほぼ無く、本能のままに生きる存在なのである。稀に魔力の高い魔物は理性を持ち、人型にもなれるらしいが。

そんな場所へ行こうというのにパートナーである私はといつとこの有様。確かに足手まといになるかもしれないと心配になるだろつ。

「あー、大丈夫。足は引っ張らないようにするから」

「……」

訝しげな視線は変わらず私に注がれている。うーん、信用無いなあ。まあ今日会つたばかりで信用もクソもないのだが。

「……あの」

まあ別に良いかと思い始めていたら突然サカキがキリュウに話し掛けた。彼女を見ると、まるで今から告白しますといわんばかりに顔が真っ赤だつた。手が細かくカタカタと震えている。加護欲をそそりにそそるその様は何だか知らんがついつい応援をしたくなってしまう。

頑張れサカキ。負けるなサカキ。

私は心中で彼女にエールを送った。

サカキは意を決した様に引き結んでいた口を開く。

「ひ、ヒイラギは大丈夫です。か、彼女、結構強いですから……心配は要らないかと……」

彼女の雰囲気からガチで告白かと思つたのに、まさかの私へのフオローだった。

デレた。サカキがデレた。顔を真っ赤に染めながら小さく話す彼女に思わずニヤついた私を誰が責められようか。まあ顔が赤いのは

キリュウが原因だろうけれども。  
サカキの気遣いがとても嬉しい。

「らしいよ？」

私は笑ってキリュウにそう言った。

誤字・脱字などあれば報告して下さると有難いです（・・・・）

本日もよろしく宜しくお願ひ致します。

「静かに。では今から人間の領域へ移動します」

未だざわつく生徒たちへイズミ先生が注意し、前から順に移動するよう促した。

移動先は第一塔校門と第三塔校門の間に有人間の領域へ通じるゲート、クリスタルゲートである。それはその名通りクリスタルで出来ている綺麗なゲートだ。横に10人並んでも余裕で通れるくらい大きなこのゲートは死神の領域のあちこちに設置してある移動機関らしい。人間の領域へ行くゲートは無色透明、悪魔の領域へ行くゲートは赤色、天使の領域へ行くゲートは青色をしていると以前サカキから聞いたことがある。今回は人間の領域へ行くので無色透明のゲートを使用する。

クリスタルゲートを使用するには電車の切符のような外見の通行手形というものがいる。江戸時代にあつたそれとは違い身分証明書やパスポート的な役割はない。ただの切符的役割をするものである。それを持ち、ゲートを潜ると目的地まで一瞬でワープさせてくれるのだ。

行き先は通行手形に記憶されているところへ飛ばされるので本当にただ潜るだけで良いし、帰りは通行手形を破けばこれまた一瞬で潜ったゲート前まで帰ることができる。通行手形を失くさない限り帰れないということはないのだ。もしもうつかり破いてしまったとしても死神の領域へ帰つてくるだけであるし、緊急時には破れば一瞬で戻つてこられるので安全面でも非常に優れている。

因みに通行手形には名前がしっかりと書かれている。他人が破いても通行手形に記憶されている人物のみ有効なので誰がそれに記憶

されているのか分かるようになつてているのだ。でないと、もしされが入れ代わつてしまつてしいる事に気が付かずには破いて自分ではない誰かが飛ばされてしまつた事態が起こつてしまつ。通常の通行手形には行き先も書かれているが、実習のものはそれが書かれていない。行き先を事前に知らされることはないのだ。これは多分、臨機応変、柔軟な対応を取つてみるという事だらう。今回の移動先も人里か山かそれとも海か、全く分からぬ。行き先を知るのは教師のみなのである。

周りを見るとそれぞれ通行手形を確認しているようだつた。……あれ？ そういうえば私、持つてないぞ？

「……ヒイラギ」

「ん？ おお、ありがと」

流石キリュウ。読心術スキルは相変わらず健在のようだ。  
彼は私に私の名前が書かれた通行手形を差し出してくれた。きっと私が講堂で爆睡している時、代わりに受け取つてくれていたのだろう。何だか目玉焼きに醤油をかけようとしたがそれを見つけられず、机を見回しているところへ妻がどうぞと醤油を手渡してくれたような……そんな何とも言えない微妙な気分を味わつた。キリュウ、お前は嫁の鏡か。

私は嫁から……ではなく、キリュウからそれを有り難く受け取り、ポケットの中へ突っ込んだ。

それと同時にイズミ先生の声が響き渡る。

「それぞれ人里へ行くよになつてしているので危ない地域へは飛びませんが魔物には十分注意して下さい。戦闘はペアで協力すること。最後にもう一度確認をしますが、今回の実習は視察のみです。魂を狩る必要はありません。2時間経つたら必ず帰ってきて下さい。……では前から順に潜つていつて下さい。気をつけて」

「おお、そうだったのか。

今更ながらに実習内容を把握する私。何せ保健室へ行つたり爆睡していたりで説明を一切聞いていなかつたのだ。仕方ない。うん、不可抗力というやつだ。

「……何よその今知りましたっていう顔」

「うん?いや、正にその通りだから」

「……」

「……」

「……」

その視線は文字通り三者三様ではあるが、揃つて無言で私に目を向ける三人。

呆れたといつた様な視線を向けて来るサカキに始まり、やつぱりかと言いた気なキリュウ。……鼻血垂れはイラッとしたので強めに蹴りを入れておいた。明らかにその目がコイツ馬鹿か?と物申していたのだ。蹴りを喰らつた鼻血垂れは「ぐつ……!」という呻き声を発し、うずくまつて痛む脛を抱えている。この駄犬は私に盾突くとどうなるかということをまだ理解できていらないらしい。

うずくまつている鼻血垂れに「大丈夫?」と声を掛けて心配するサカキ。だからそんな奴心配しなくて良いって。サカキの心配が減つてしまつ。

「次、早く行きなさい」

いつの間にか順番が回つてきていた。ゲートの前でイズミ先生がこちらを向いて急かしている。

「あつ!すみません!今行きます!」

注意を受け、サカキは慌ててそう先生に返し、今だ脛を抱えて動けない鼻血垂れの襟首をガシッと掴んでそのままズルズルと引きずりながらクリスタルゲートへと向かった。大の男相手だというのに、彼女のその淀み無い動作は全く重さというものを感じさせない。言っておくが決して鼻血垂れが軽いわけではない。サカキが怪力なだけだ。

潜る手前で立ち止まり、「じゃあ後でね」と言つて手を振る彼女に私も笑顔で振り返す。

サカキさん、サカキさん。首、良い感じに絞まってるよ。

勿論敢えてそれを言つことはしなかった。

少し緊張顔のサカキと色黒なのに顔が青い鼻血垂れがゲートを潜つて消えるのを見届け、私とキリュウは最後になつた。私も潜ろうと足を進める。

これを使うのは初めてな私。一体どんな感じなのだろうか……強い浮遊感がないことを祈る。実は絶叫マシーンが苦手な私は結構ドキドキものである。

「……キリュウ？」

私は、先程まで隣にいたキリュウがいつの間にかいなくなつている事に気がついた。キヨロキヨロと見回した後、振り返つてみると立ち止まって動かない彼を発見。私が声を掛けると彼は少し間を空けて「ああ」と一言返しこちらへ歩いて来た。どうかしたのだろうか？

彼が追いついたところで私も止めていた足を動かし、一緒にゲートを潜る。

「ツ！」

潜る直前、鋭い視線を背後から感じた。

まるでナイフを突きつけられたような鋭い視線。黒学の生徒からのものとは違う……あんな生温いものではない。

一体誰が？

私は咄嗟に振り返ったのだが眩い光に包まれ、その姿を確認することは出来なかつた。

022 イグラント的文明の利器（後書き）

誤字・脱字などあれば報告して下されると有難いです

（ 、 、 、 、 ）

023 残高の時を賣るモモ（前書き）

少しばかしグロテクスな敵が出て来ます。

本日もどういたしましてお願い致します。

移動は本当に一瞬で終わった。

ゲートを潜ると一瞬強い光が射し、眩しくて思わず目を瞑つてしまつた私。目をやけに刺激するその光はすぐ收まり、そろそろと瞼を上げると風景がガラリと変わっていたのだ。体感はキリコウが空間魔法を使ってワープしたときと同じだった。あのゲートにもきっと同じような空間魔法が施してあるのだろう。

まあそんな感じであつという間に飛ばされてきたわけだが、行き先は知らない。私はどこへ飛ばされたのか、まず現在位置把握をすることにする。移動する直前に向けられたあの鋭い視線……気にならないと言えば嘘になるが、考えないようにした。今そんな事考えても仕方がない。また後でじっくり考えようと私は脳内の隅にそれをぽいっと放つておいた。

私は辺りをぐるりと見回し、周りに何があるか確認をした。私の正面には天を貫かんばかりの大きな木が佇んでいる。右を向くと、これまた先程のものにも負けないくらい大きな大きな木が。そして左を向くと樹齢はいくつかと思わず考えてしまう先程のものに負けず劣らずな……。

……。

「…………森？」

「ああ」

ですよね。

分かつてはいたが一応キリコウに確認を取つてみた。案の定、肯定の言葉が返つてくる。どうやら私の勘違いではなく現在地は森で

確定のようだ。

私の視界いっぱいに埋め尽す縁といつ縁達。さぞかし田には優しいことだろう。しかし何故に森？イズミ先生は人里に着くと先程言つてはいなかつただろうか？

「……誤作動かな？」

「……」

静かな森にポツリと私の声だけ零れ落ちる。それに対しキリュウは何も答えず、また何やら考へてゐるようだつた。

私はもう一度周りを見渡してみた。

太陽の光は背の高い木々達に阻まれてゐるようまだ暁はばだというのに薄暗い。人気のないそこはやけに静まつていた。鳥の囀さえずりすら聞こえない。生き物の気配が全く感じられない。

私とキリュウが飛ばされてきたこの場所は、かなり不気味な雰囲氣を醸し出している。何だ此處は、草の影からお化けとか出て来そ

——  
「 ッ！！」

ぼけ一つと見ていた草の影からいきなり何が飛び出してきた。ガササツという音と共にこちらへ飛んできたそれを咄嗟に身体を捻つて避ける。

ビックリした。物凄く心臓に悪い。今ので寿命は何年縮んだのだろうか。……まあ多少縮んだところで気にしない程長寿になつてしまつたのだが。

避けた後、私はパツと振り返り飛び出してきたそれを確認する。

「……」

「…………」

「…………」「やあ」

そこには一匹の「わらわんがいた。

私はマジマジとその「さきさんを見る。……今、もしかしなくとも「にゃあ」って鳴かなかつたか？

思わず田を擦つてもう一度確認してみたが、やはり田の前のそれは何処からどう見て「わらわんがいた」。少し毛足の長い体毛は黒色。それに埋まるよつてこれまた黒いクリツとした大きな瞳が伺えた。ピヨコソと出た長い耳とちょこんと見える短い足、そしてふわふわの真ん丸な尻尾。身体を縮めて怯えるようにプルプルと小刻みに震えている。

……ヤバい。これはヤバい。殺されそうな可愛さである。いや、もうこの子になら殺されても良い。死因は勿論、萌え死である。実際に間抜けだがこの上なく幸せな死に方だ。

「ふにゃあつ！」

私は手に持つていた邪魔な鎌を放り投げ、そのけしからん可愛い生き物をギュッと抱きしめた。

「わあああああ何この子つーかあいいつーえ?「わらわん?猫?..びつち?もつぶつちでも良いくらい。あああああヤバいつーもふもふ最高…………」

抱きしめると想像通りのふわふわの体毛が肌に触れ、幸せが広がる。「ヤーヤが止まらない。止めるつもりもない。

かあいいつーめちゃくちゃかあいいつーヤバい、犯罪級にかあいいつ！

もふもふには田がない私である。

かあいいかあいいと連呼しながら小さい生き物に一方的に戯れる私。いつはないハイテンションつぶりを披露する私にキリュウが少し驚いている。だが知らない、気にもしない。もふもふの前にはそれ以外のものなどどうでも良い。今私の目には可愛らしいもふもふうひぎさんしか映つていな――

「 ッ!!

ガササツという音と共にまたもや草の影からいきなり何かが飛び出し、私の背後へ着陸した。もしや一匹目のもふもふか!?

私は喜々として勢いよく振り返り、その姿を確認する。

「……」

……結果を言つと、テンションがガタ落ちした。

飛び出してきたのはもふもふではなく骨のような犬……というより、肉がほぼ剥がれ落ちて骨になってしまっている犬のような生き物だった。ホラー映画に出てきそうな感じのゾンビ犬である。

きっと魔物であろう。こんなものが動物にカテゴリ分けされいるのならビックリだ。肋骨やら頭蓋骨が丸出しのそれはこちらに向かってグルグルと唸り、涎だか血だか分からないものを大量に垂らしている。ばっちいな。

先程まで私の腕の中で元気良く暴れていたうひぎさんは、今ではまたその小さな身体を更に縮めてプルプルと小刻みに震えている。どひやらコイツから逃げていたようだ。

「わっ」

ゾンビ犬がいきなり噛み付こうと飛び掛ってきたので私はうさぎさんを抱えたまま後ろに跳んで避けた。口から垂れる涎の量がハ

ンパない。どうやら私もコイツの捕食対象として認識されたようだ。私を食べたところでさして美味くもないと思うのだが。そもそもその前にコイツは骨のくせして食べたものを何処へ貯蔵するつもりだとこいつのだろうか。……食べる意味ないだろ。

カプカプと口を開閉しながら尚も飛び掛かつてくるゾンビ犬をかわし、ついでに先程放り投げた鎌を拾う。武器確保だ。流石にアレには触れたくないし。

先程までもふもふ天国を味わっていたのに……邪魔しやがつてこの骨犬めが。許さん。

「つむぎさん、ちょっとここで待つてね」

私は惜しみながらももふもふつむぎさんを安全な場所へ下ろした。流石に片手ではこの鎌を扱えない。本当に重いのだ、この鎌は。

そういうキリュウは何をしてるんだ？

チラリと横田で確認すると、彼は少し離れた場所でお花摘みに興じていた。

え、何してんのキリュウ。

023 時高の時を讀むモノ（後書き）

誤字・脱字などあれば報せ合して下されると有難いです  
（ 、 、 、 、 ）

少しばかしグロテクスな敵が出て来ます。

本日もどうぞ宜しくお願い致します。

「わわっ」

キリュウの思いがけない乙女な行動に思わず目が釘付けになつてしまつっていた。そんな私に向かつてゾンビ犬は口から勢いよく火の玉を吐き出してくる。ちょ、森が焼ける。火事になるつて。私は咄嗟に鎌の刃の部分で受け止める。森が炎上してしまつたら私も危ないし、何よりもふもふふもふさぎさんが危ない。それだけは頂けないのである。

慌てて火の玉を受けたは良いが、それが刃の部分に触れた瞬間飛散し、周りにパラパラと降り注いでしまつた。四方八方に飛び散つたそれらを全部受けられそうにない。ヤバい。着火してしまつ。

あんなにもふもふしているのだ。火事になつてしまつたらそのふわふわで燃えやすそうな毛皮を身に纏つているうさぎさんが逃げるのは困難だろう。私は火事を阻止するため、水をぶっかけようと魔力を練り上げた。

——しかし、それを放つことはなかつた。

「……あれ？」

ここは縁が沢山、というより縁しかない。枯れた葉っぱなども散つていたので火の粉が触れればあつという間に炎上してしまうと思つたのだが……。

燃えていない。何も燃えてはいない。

確かに火の粉は草や木に降りかかつたはずなのに触れた瞬間弾くようになってしまったのだ。何だこれ。

「……漆黒の森」

「ん? 何?」

キリュウがポツリと言葉を零す。お花摘みはもう堪能したのだろうか。

多分今彼が言つた漆黒の森とは此処の事だろひ。

「漆黒の森では木や草が燃えることはない」

「へえ」

「……知らないのか?」

「うん、全然。

私は尚も飛び掛かつてゐるゾンビ犬を避けながらキヨトンとした顔でこくりと頷いた。それを見たキリュウは眉根を寄せた。  
え、何? そんな有名な場所なのだらうか? 日本でいつ琵琶湖とかそういうた感じの観光地?

「……これを見る」

私が首を捻つてゐるとキリュウは自分の右手に持つてゐるものを見せてきた。

彼の手には小さい百合みたいな真っ黒い花が握られている。先程摘んでいたものだらう。

言われた通りそれをジー<sup>ツ</sup>と見つめる。勿論その間にもゾンビ犬は飛び掛かつてくるのでそれをかわしながら。

いくら見てもただの花。それが何なんだというのだらうか。

それ見たまま何も言わない私の様子にキリュウは微かに眉間に皺を寄せる。いや、だから何。

「……この花は此処にしか咲かない貴重な花だ。魔力を吸い取り、そしてその量、質によって色が変わる。因みに黒は魔族、赤は悪魔、青は天使、白は魔力を吸い取る前の状態だ。一度染まれば色は変わらない」

「へえ」

先程、キリュウはお花摘みをして遊んでいたとばかり思っていたが、勘違いだったのか。どうやら彼は周りを観察して現在地を調べてくれていたようだ。……疑つてスマン。

キリュウの話を聞く一方で、私は飛び掛かつてきたゾンビ犬の鼻つ面に水属性の魔力を纏わせた鎌の根本を叩き込んでやつた。ゾンビ犬はヤンヤン鳴きながら前足で鼻を仕切りに搔いている。火属性の彼は予想通り反対の属性である水が苦手なようだが……。

「うわあ……」

思わず顔が引きつる私。叩き込んだ鎌には想像通り涎だか血だか判別不能なものがべつとりと付着していたからだ。ドロドロと鎌を伝い地面に垂れている。……汚い。

鎌を振るたびにきつとそこらに飛び散つてしまつ。そのうち自分にも……ひいつ。

それは勘弁と私は急いで水魔法を発動し、それがベッタリ付いた鎌を洗い流した。綺麗になつた鎌を眺めて一人うんうんと満足する。キリュウはとつと手伝う気は更々ないのか、ゾンビ犬には目もくれない。おま、手伝えよ。

私が恨みがましい目で見ても気にせず彼は口を開く。

「……これは漆黒。人間の間では高価格で取引されていると聞く。何故だか分かるか?」

そう言いながらキリュウは花をペイッと捨てた。え、ちょ、今高価格とか何とか言わなかつたか？いくらくらゐするのか想像つかないがそんな扱いで良いのか？なあ、良いのか？

貧乏性な私には花が気になつて仕方ない。あれは札束を捨てたようなものではなかろうか？そんな真似私には絶対出来ない。

しかし何故かと言われても分からぬ。真っ黒なただの花だ。栽培が難しいのだろうか？

私が首を傾げているとキリュウは話を続けた。

「採取が困難だからだ」

困難？

見る限り普通のこの花を摘むのが？

先程キリュウが摘んだときも楽に摘んでいた。彼はそのとき特に何かをしたわけではない。花自身も毒など特別害があるわけではなさそうだ。本当にただの花なのだろう。

そういうゾンビ犬がじやれついて来なくなつた。不思議に思つて見てみると何だか怯えた様子でジリジリと後退し、そのまま踵を返して逃げてしまつた。急にどうしたのだろうか？

キリュウは気にするでもなく更に言葉を続ける。

「こゝの花の色は魔力が強ければ強いほど色が濃くなる。……つまり

キリュウはそこで言葉を切つて私の後ろを見据えた。

——直後、何か羽ばたく音と共に突風が吹き、私の髪を舞い上げた。次いで木々が薙ぎ倒される轟音が響く。何か物凄く大きな生き物が降り立つたようだ。

キリュウは私の背後にいるそれを少し目を細めて見遣る。

「……この近くに強い魔力を持った奴がいるということだ。……因

みにこれは周知の事実だ」

私は突然出てきたそいつを振り返つて見上げた。

……ああ、うん、なるほど。

理解した。

誤字・脱字などあれば報告して下されると有難いです

（ 、 、 、 、 ）

本日もごんづか宜しくお願ひ致します。

けたたましい咆哮が響く。

空気をビリビリと大きく震わせるその振動は肌にまで感じられる程。まるで打ち上げ花火のようだ。

奴の真正面にいた私は鼓膜の直撃を避けるため、咄嗟に手で耳を覆つた。支えを失った鎌がドサリと柔らかい草の上に落ちる。塞いでも十分に響いてくる咆哮。直に喰らえば鼓膜が逝つてしまふかもしね。……ちょっと気合い入れすぎではなかろつか。

私はもう一度そいつを見た。基本は獅子だが山羊の角と龍のような翼が生え、後ろ足は蹄<sup>ひづめ</sup>になっている。獅子と山羊と龍……多分キマイラだろう。神話のキマイラと言えば獅子の頭に山羊の胴体、そして龍だか蛇だかの尻尾<sup>しりお</sup>が特徴だった気がする。少々それとはずれているがこれは多分キマイラで間違いない。何せこちらのバナナはオレンジ色をしているなど、微妙に地球のそれらとはずれている所がある。基本は同じなのに不思議なものだ。味噌に醤油、そして米だつてあるというのに。私は日本人の食料における二種の神器といつても過言ではないそれらがこの世界に存在することを知った時、咽び泣いて万歳三唱<sup>むせ</sup>をした。以前読んだ小説やらなんやらでは異世界では決まってそれらが無いか、又は自力で一生懸命探している主人公が描かれていた。期待していなかつたものが此処には最初から文化としてあったのだ。これは喜ばずにはいられない。私が人生で初めて神を感じた瞬間であった。神様、実は素敵な奴だつた。良い仕事いやがつてこの野郎。感謝してやる。……あ、また思考が逸れてしまった。

私はもう一度キマイラを見上げる。……あれ、キマイラってこんなにテカかつただろうか？見ただけでも10mは裕にある。

「デカイね」

「ああ」

同じく見上げるキリコウは少し苦い顔だ。多分このキマイラは通常よりデカイのだろう。

しかしこのキマイラカッコイイなーとか考えつつぼーっと眺めていたらパチリと田<sup>た</sup>が合つた。敵と認識したのか唸り声を上げて睨み付けてくる。

睨まれたので私も負けじと睨み返す。ムムムとしたその表情は睨むというより不機嫌面になつていてるだろう。いきなり降り立つたりしてうさぎさんが踏み潰されたらどうしてくれんんだといつ念を込めているからだ。……ハツ！うさぎさん！

素早く視線を走らせると斜め後方で耳を完全に垂れさせ、プルプルと体を震わせていくうさぎさんがいた。へっぴり腰になつていてはどうやら腰が抜けて逃げられなくなつてしまつたようだ。やべえ、かあいい。

「おわッ！」

ズダンシと地面に減り込まんばかりの力を込めてキマイラがネコパンチならぬキマイラパンチをかましてきた。うさぎさんのあまりの可愛さに気を取られていた私は反応が遅れ、すんでのところで横に飛びそれを回避する。いくら寿命が延びて魔法が使えるようになつたからといつても身体が鋼のように頑丈になつた訳ではない。身体自体は以前のままだ。アレを生身で喰らつていたら骨が折れるどころかミンチになつていたに違いない。……危ない危ない。

「……妙だな」

私が安堵していると難しい顔をしてキリュウがポツリと言つた。  
疑問符を浮かべながら彼を見ると続けて説明してくれた。

「キマイラは知能を持つた大人しい魔物だ。通常突然襲い掛かつて  
来ることはないはず……」

「え？ でも現に攻撃されてない？」

しかも私単品で。何故か私単品で。

現在進行形で私だけを睨み、グルグルと唸り声を上げているキマ  
イラを見上げる。何だ何だ？ 私は何か機嫌を損ねることでもしたか  
？ それともこれがキマイラ流のじやれ方なのか？ 随分アグレッシブ  
というかこつちは命がかかったものではあるが。……マタタビでも  
付いているのだろうか？ 思わず自分の身体を見回すが普段と何ら変  
わらない。

「……とにかく気を付ける。さつきの犬とは格が違う」

「了解」

注意を促すキリュウの言葉に了解と言つたは良いが……どうする  
かな。チラリとまたうさぎさんに目を遣るが相変わらず動けないま  
まのようだ。あんな所にいては危ない。そのうち踏み潰されてしま  
う。

私は地面を蹴つてうさぎさんの所まで走り、素早く拾い上げた。

「ごめんね。頑張つて逃げてね」

私はうさぎさんにそう言つや否や振りかぶつてぽーんと彼女を思  
い切り放り投げた。そういうえばアリエルを助けたときも投げたなと  
思いながら綺麗な放物線を描く黒い毛玉を見送る。うさぎさんは猫  
ではないので着地は難しいかもしれないが辺りにはフワフワの草が

覆い繁つてゐる。クッシュョンの役割をして優しくうさぎさんを受け止めてくれるだろう。

キマイラに向き直るとまたキマイラパンチを仕掛けてきていたので横に跳んで避ける。避ける際、地面に転がっている鎌が目に留まつた。アレを回収しなければどうしようもない。

私は着地と同時に鎌に向かつて走り出した。無事に辿り着き拾い上げると既に目の前まで迫つてきているキマイラの前足が視界一杯に広がる——読まれていた……ッ！

「……ッ！」

拾つた鎌に風属性の魔力を込めてこれを受ける。鎌に纏わせた風魔法で押し返すようにしているのだが僅かながらにもズルズルと押し負ける私。……この風魔法、2七十ラックくらいなら余裕で遠くまで吹き飛ばせるというのに。とんだ馬鹿力である。

因みにこれが私の魔力の限界だ。私は戦闘では風魔法以外使えたもんじゃない。火はチャツカマン程度、水はバケツをひっくり返した程度、雷は特に酷く静電気程度なのだ。その上、不安定で今こそ鎌の付加スキルで安定させてくれてここまで風魔法が使えるが、鎌無しだと扇風機の強程度しか風を起こせない。他の属性においては不発という有様だ。何とも情けない。

キマイラはこのままでは無理と判断したのかもう一方の前足を振り上げた。ちょっと待て。ヤバい、これはヤバい。

喰らうわけにはいかないので私は受け止めていた前足を鎌を傾けて流し、その場を離れる。直後ズダーンッと響く轟音……キマイラが脚を退けると地面にクレーターが出来ていた。

……。

うん、帰ろう。

イズミ先生も無理はするなと言つていたことだし、この魔物、絶対2年生レベルが戦える相手じゃないと思つ。

そう判断した私はポケットに手を突っ込む。田舎では勿論、通行手形だ。今使わずしていつ使うとか。いや、実習終了時に使つて帰れば良いのだがこのままコイツの相手をして無傷で帰れるとは思えない。寧ろ帰れるかどうかも怪しいものだ。

「キリュウ」

「何だ？」

「帰つても良いよね？」

「……そうだな。これはフ年生でもキツイ」

すぐ後ろにいたキリュウに問うと予想以上の返答が帰ってきた。

そうだったのか。強いわけだ。

誤作動とはいえこんなものがいる所へ飛ばしてくれるとほ……うつかりでは済まされない。

さあ、さつさと破つて帰つてしまおう。そして先生に文句を言つのだ。

私は通行手形を求めてポケットに突っ込んでいた手をまさぐる。

……。

「……キリュウ」

私は至極ゆつくり後ろを振り返りながらキリュウの名前を呼ぶ。彼は何だといったように黙つてこっちを見遣り、そのまま次の私の言葉を待つている。

私は引き攣つた笑顔で口を開いた。

「……通行手形がない」

彼の眉がピクリと上がった。

……ま、誠に、かたじけなひ。

025 万年最下位対合成歎（後書き）

誤字・脱字などあれば報告して下さると有難いです

（ 、 、 、 、 ）

026

行方知れずな通行手形（前書き）

本日もどうぞ宜しくお願ひ致します。

ポケットというポケットをひっくり返しても出でてくるのは紙は紙だが飴の包み紙くらいで通行手形は出でこない。ハラリハラリと舞い落ちて私の足元に広がるそれら。……そろそろ「」み箱へ捨てに行かねば。サカキに見つかったら「アンタは幼児か」とまた叱られてしまう。

まあそれは良いとして、確かに私はキリュウから受け取ったそれをポケットに突っ込んだはずだ。しかしいくら探しても見つからない。こうなりや全部脱いで調べるべきか?……いやいや、ここにはキリュウがいるのだつた。ただでさえ彼には痴女紛いな事をやらかしてしまつたのにその上ストリッパーだなんて思われては私はもう自分で穴を掘つてそこに大人しく埋まるしかない。却下だ却下。

ポケットにないのならばうつかり落としてしまつたのだろうかと周りを見回してみたのだが何処にも落ちてはいない。え、あれ、おかしいな。

私達はクリスタルゲートを潜つてから全く移動をしていない。考えられるとしたら私が先程風魔法を使つたときに飛ばされてしまつた、という事態だ。もしそうだとしたら見つけるのは困難。風に乗つて遙か彼方まで飛ばされてしまつたかもしれない。

私がそうやってごたごた考えているうちにもキマイラからの攻撃はしきりに繰り出されてくる。勿論私単品に。何故だ。あっちにも黒い標的がいるというのに。

前へ後ろへ横へとかわしながら、そして散乱した飴の包み紙を拾い集めながら私は周囲を観察した。本当に何処かぼろつと落ちていないのだろうか。草に紛れているとか。

キマイラパンチの一撃一撃は強い上、あの身体のサイズから繰り

出されているとは思えないくらい速い。気を抜かないようひやつの攻撃を避け、目的のものを探す。

ない、ない、ない……何処にもない。何処に行つた、私の通行手形さん。

「……此處にはない」

次々と繰り出されるキマイラパンチから逃げ回りながらも視線をあちこちさ迷わせて通行手形を探している私に向かつてキリュウがそう言つた。ない？ないと？

ではやはり先程の風魔法でぶつ飛んだか。

「……風魔法を使った時に飛んではいなかつた。恐らくこの森をどれだけ探しでも見つからない」

私の思考に対し、読心術スキルレベルMAXのキリュウ氏から否のお言葉が即返つてくる。何かもう心を読まる事には諦めたとうか慣れてしまつたというか。それにしてもまたこの男は突然意味の分からぬことを……。説明が足りなさ過ぎて私にはさっぱりだ。断じて私の理解力が足りないわけではない。

この森自体にないだと？じゃあ何処にあるというのだろうか。まさか足が生えて走つて逃げたとか羽が生えて飛んで逃げたとか言つ訳ではあるまいな？

そんな事を考えながら田を細めてジトーシとキリュウを見たのだが今度は反応無しときた。きっと余りにも馬鹿馬鹿しい考えに返す言葉もないのだろう。そんな事は自分が一番分かっている。ほつとけ……いや、やっぱりほつとかないで。私にも分かるように説明をふりーすだ。

私の心の声が通じたのか、キリュウの口が開いた。

「………… アイツ……」

否、通じていなかつた。

アイツって誰だよ。今回の件に関係あるのか？

眉間にシワを寄せてまた考え込んでいるキリュウ。様子を見るにどうやら彼は訳知りのようだが本人そっちのけで自分だけ考え込んで欲しい。こちらは氣になつて仕方がないというの。

「キリュウ」

彼の名前を呼ばうとしたのだが、私の隣にある茂みからガサリと出てきた黒い毛玉に気が付き、中途半端な所で途切れてしまった。私の横には先程逃がしたうわぎさんがこちらを見上げてちょこんと座っている。うおっ、か、かあい……じゃなくてっ。逃げたのはなかつたのか？

ハツと前を見ると踏み潰すのを諦めたらしいキマイラが今度は炎のプレスを吐き出しているところだった。広範囲なこの攻撃は逃げようにも間に合わない。

私は迫り来る炎に向かつて風魔法を纏わせた鎌を有りつたけの力を込めて雑<sup>な</sup>いだ。

ホームランつ！ ホームランですっ！

私の中の実況さんが机をバシバシ叩き、マイクを握り締め、中腰になりながらそう絶叫する。我ながら良いスティングであった。

鎌が重い為、反動で口口口と身体がよたついたが踏ん張つて何とか持ち堪える。

迫っていた炎は私が雑<sup>な</sup>い払つた所からスパツと両側に割れた。鎌<sup>かま</sup>はそのままキマイラへ向かうがキマイラパンチに踏み潰され、ダメージまでには至らない。……これで私の魔法はキマイラに効かない事が判明した。ダメージを負わせるには直接切り付けるしかないらしい。

それを見届けた後、急いでうさぎさんを見た。火の粉は降りかかっていないだろうか。身体をぐるりと見回しても怪我はなさそうだったのでホツとす——ハツ。

き、キリュウっ。

炎は先程彼がいた場所に直撃していた。彼は大丈夫だろうか。バツとそちらを見た……が、彼がない。え、まさか灰になつた？  
嘘。え。マジで？え？

「……此処だ」

タラタラと汗をかきながら固まつていて上からキリュウの声が降り注ぎ、同時に私の目の前に何かが降ってきた。これは……羽根？  
ヒラリ、ヒラリと舞い降りる一枚の羽根は綺麗な綺麗な闇の色。私は目を見開き思わず魅入ってしまった。まるで何者にも侵されないような澄み切つた黒。こんな綺麗な色は初めて見た。

フワリと地面に落ちたその羽根を拾い上げ、私はゆっくりと声がした方を見上げる。

——そこには闇色の翼を広げたキリュウが私を見下ろしていた。

誤字・脱字などあれば報告して下さると有難いです

(、・・、)

本田もえいわ宜しくお願ひ致します。

バサバサと羽ばたく見事な闇色の翼を見ながら、そういうや彼は悪魔だったなど今更ながらに思い出した。悪魔ならば勿論翼が生えてる訳で。そして立派な翼があるならば勿論飛べるという訳で……。私はさも不満といわんばかりに眉根を寄せた。

「するい。それ寄越せ」

ズビシッと翼を指差し、しかめつ面で私が不満を零した。するい。する過ぎる。私が地上でちまちま頑張って逃げているというのに、キリュウはその翼でいとも簡単にフワリと浮いて回避できるのだ。代われ。翼があるならお前が標的になれ。

その不満たらたらな私の様子を見たキリュウは何故か少し驚いた様子だったが、すぐ真顔になり、「無理だ」と一言だけ言った。

私はチッと舌打ちをする。やっぱり取り外し不可能だつたようだ。アレはマジで背中から生えているらしい。私も気合を入れればによきつと生えてくるだろうか……。いつそり背中に力を入れて頑張つてみたが生える気配は微塵もない。

因みに彼等が背中に力を入れて翼を出現させるかどうかは謎だ。やつてみたのは何となくそうすれば生えてくる気がしたからである。無理だったが。

私も魔法か何かで飛べたらもっと楽なのだが……。他の生徒ならば風魔法かなんかを上手く使用し、飛行も可能ではないだろう。しかし、落ちこぼれの私には無理な所業だ。やつたとしてもコントロールが上手く出来ず何処かへ吹っ飛ばされるのがオチである。

そうやって馬鹿な事や考え方をしていくうちにキマイラの炎のブ

レス第一弾が放たれていた。いかんいかん、一瞬キマイラの存在を忘れていた。

私は先程と同じように鎌鼬でぶつた切りひとつ再度風属性の魔力を纏わせた鎌を構えた——が。

「あ

……何てこいつだ。

構えた鎌はメキッと嫌な音を立てて折れてしまった。

刃元から見事にポツキリといったそれは無情にも地面に突き刺さる。

……前々から思っていたが、やはりこの鎌は脆くなかろうか。下ろしたばかりにも関わらず途中で壊れる武器とか……大問題じやなかろうか。

実は私、実技などでこれを使用する度にぶつ壊している。半ば使い捨て商品だ。いつもはもう少し持ち堪えてくれるのだがキマイラのブレスが効いたのだろう。予想より早く使い物にならなくなってしまった。この鎌は根性つてものが足りない。腑抜けた鎌なのである。

まあ折れてしまったものは仕方がない。……そんなことよりヤバくないか?

視線を戻すと迫り来るブレスが容赦なくこちらへ向かつてくるのが見える。

……ハツーう、うわわわわわーうわわわわんがー！

私はもふもふ至上主義を掲げながらわざわざさんを拾い上げ、またもや遠くへぽーいと投げた。「にゃー」と鳴きながら綺麗な放物線を描く毛玉を見送る。「ごめんねー！

鎌のない私が風魔法を使っても所詮は扇風機の強である。キマイラのブレスに敵うはずがない。

私はギュッと目を瞑った。

「…………？」

「…………？」

覚悟したのだが炎が私を撫でることはなかつた。

私を襲つたのは想像した熱さではなく腹部への圧力と軽い浮遊感。何故か足は地についていない…………浮いているみたいだ。

そろりと目を開けると先程いた場所が見下ろせた。腹部には腕。視線を上げると予想通りキリュウが私を見下ろしていた。…………眉間に若干皺が寄つている。

「…………死ぬ気が」

「…………すみません。 そんでもうつてありがとうございます」

全面的に私が悪いので素直に謝つた。お礼も忘れずに言つ。

それにしても彼には助けられてばっかりだ。……いや、今まで私が戦っている間彼は傍観に回っていたのだし、これくらいは当たり前と考えるべきだろうか？うーん。

複雑な表情を浮かべながら今度は腹に回つている腕を見る。……全体重がかかつて地味に苦しい。今回は肩でなく小脇に抱えられている。相変わらずの荷物扱いだ。まあお姫様抱っこよりはマシだが。…………また想像してしまい私はげんなりとした。

「…………で、どうする」

「うーん」

キリュウの話によればキマイラは普段大人しいらしい。それが今、敵意を剥き出しにして襲い掛かつてきている。…………私にだけ。

私はキリュウに抱えられたままキマイラをジーッと見下ろした。出来ればもふもふさせて欲しい。あのでつかいもふもふの身体に埋もれたい。だがこの調子じゃ叶いそうもない。何だか嫌われて

いるっぽいし。……あ、自分で言つて何か悲しくなつてきた。黒学の生徒に嫌われようが嫉まれようがどうでも良い私だが、もふもふに嫌われてしまうと心が痛む。

何もしていらないのに嫌われるとか……それとも何か理由があるのだろうか?しかしそれがさっぱり分からない。

先程のキリュウの質問に答えると、逃げるか倒すかなのだが……倒すとか私には無理だ。力云々の前にもふもふに手を上げるなんて出来っこない。そんなことしたら自分を自分が許せない。かといって通行手形がない今、簡単には逃げられない。……そういえばキリュウは通行手形を持っているのだろうか。

「キリュウ、通行手形持つてる?」

私がそう尋ねるとキリュウは「ああ」と応え、内ポケットを探りキリュウの名前がバツチリ書かれた通行手形を見せてきた。自分が帰れないとばかり焦つてよく考えていなかつたが、キリュウは帰ることが出来るのか。

何だ、そつか。

一人うんうんと納得して私は一言キリュウに言った。

「先、帰りなよ」

予想もしていなかつた台詞だつたのかキリュウが驚いた……気がした。

……表情筋をもつと鍛えると良いと思つ。

誤字・脱字などあれば報告して下されると有難いです（・・・・）

028 蒼黒の異端者（前書き）

本日もお忙しい中宜しくお願ひ致します。

淡々と言う私にキリュウは少し驚いた後、眉間に皺を寄せた。それを見るとサカキを思い出す。つい先程別れたばかりだというのに妙に懐かしい……でなくて。

いや、だつて巻き込むわけにはいかないだろ。通行手形を失くしたのは私だけだ。持っているなら帰れば良い。何もキリュウまで危険に晒される必要はないのである。

「……お前はどうするつもりだ」

怪訝な顔でキリュウが問い合わせてくる。

確かに私は今、武器が壊れてしまつた上に魔法だつて満足に使うことが出来ない。先程より格段に弱くなつていてる事だらう。だが今そんな事を言つている場合ではないのだ。

「私は何とかして逃げ回りながら此処で待つてる。だからキリュウは悪いけど戻つて先生に連絡してくれないかな。そしたら通行手形の再発行なり何なりしてくれるでしょ」

「……」

何とかしてつて……無理だろ。

細まつたキリュウの目がそう私に告げている。わあ、私信用されてないな。

といつても、私も今のままではどうなるかは分からないと思つてるので否定はしないが。しかし今はそれしか方法が思い付かない。私は何とかして逃げ回りながら待つしかないのだ。どれくらい時間

がかかるか分からぬが、出来るだけ早く迎えに来て欲しい。……  
いや、もう、ほんと、切実に。

是非ともマッハでよろしくお願ひ致します。

「ま  
」

早く。

そう付け足さうとした所でキリュウの周りの空気が変わったことに気が付き、私は思わず言葉を飲み込んでしまった。今まで穏やかだったそれが、徐々に張り詰めてしまつたものへと変わっていく。一体どうしたのだろうか。

「……キリュウ？」

彼に声を掛けてみたがピリピリした空気は変わらない。……何だか嫌な予感がする。私は無意識に眉を寄せた。

そんな私を気にすることもなく、キリュウは何でもないかのように言葉を紡いだ。

「……そんな面倒なことは必要ない。…… 要はアイツを殺せば良いだけだ」

私は目を見開いた。

酷く、酷く冷たい声。キリュウのこんな声は初めて聞いた。

まだ彼とは会つたばかりであるのにこう言つのもおかしいかもしないが、彼がこんな声を発するとは思わなかつたのだ。今までは温かいとは言い難いが冷たくもなかつた……彼の声に安心すら覚えたこともあつたというのに。

私が驚き固まっているとキリュウは空間に闇を出現させ、片手をそこに突っ込んだ。その闇の先には何も無いんだろうなと何となし

に考えながらただただその動作を眺める。キリュウが闇からぬつくり手を引き抜くとそこには得物が握られていた。

深い闇色のダガーナイフ。

手に握られているそれが彼の武器なのだろう。死神の鎌に比べたら随分と小振りではあるが、何だか名刀の様な独自の雰囲気を纏っている。

……断言しても良い。これ、絶対に切れ味抜群だ。

きつと触れるだけで切れてしまう。某三代目怪盗映画に出てくる名刀のように鉄をもスパスパと切つてしまふ……そんな気がした。キリュウは得物の感触を確かめるように危な氣なく数回クルクルと手で回した後、パシッと音を立てて逆手に持ち替えた。

……ヤバイ。キリュウは本気でキマイラを殺<sup>や</sup>る気だ。恐らく彼はそれが出来るくらい強いのだろう。

「……捕まつてろ  
「ツ！－！やめつ  
「ツ！－！」

慌てて彼にストップをかけようとしたが、私の制止の言葉は最後まで言い切れずに途切れてしまった。キリュウが私を抱えたまま物凄いスピードでキマイラに突っ込んで行つたのだ。強い浮遊感が私を襲う。ジェットコースターがかなり苦手な私は息が詰まって言葉を発する事が出来ない。悲鳴なんてものは余裕がある奴が上げるものである。あまりの恐怖に泣きそうになる私。キリュウ、てめつ、後で覚えてる。

私は歯を食いしばり、ぶつ飛びそうな思考を何とか再開させる。こんな状態では、制止の声なんて掛けられない。口を開いた瞬間にそこから魂が飛んでいく自信がある。力ずくで止めようにも圧倒的に力が及ばない彼に私が何かしても無意味だ。

このままではあのキマイラが殺されてしまう。それはダメだ。きっとあのキマイラは何も悪くない。何か事情があるはずなのだ。

……あと、何となくキリュウには血を流させてはいけない気がし

た。

止めなければ。  
何としても。  
今、此処にいる、私が。

「……～～ツ！」

あー、もー、くそつ！

私は自分の首に着けているチョーカーに手を掛けた。黒い帯につだけ付いている小さな丸い透明の石がじろりと揺れる。迷っている時間はない。

……タチバナさん、ごめんなさい。

——約束、破りますよ。

私は力任せにそれを引き千切った。  
その瞬間、眩い光が辺りを包む。

「　ツ！？」

光が収まると同時にガキンッと固いもの回転がぶつかるような音が響き渡った。

私の目の前には驚いて田を見開き固まっているキリュウ、後ろを振り返るとグルグルと唸るキマイラがいた。キマイラが無事なことを確かめた私はふう、と安堵の溜息をつく。どうやらギリギリ間に合つたようだ。

「…………ヒイラギ…………お前は…………」

—— 一体、何者だ。

言外にキリュウがそう問い合わせただしてくる。

……まあそもそもなるだろう。私は思わずはははと苦笑した。

私とキリュウの間には闇色のダガーナイフともう一つ。闇色の得物と交差し、それをしっかりと受け止めている無色透明の鎌があつた。

そしてキリュウの視線の先……私の髪と目との色彩はいつもの明るい茶色ではない。

彼の瞳に映つている色は——

——闇のよつな黒と深い湖のよつな蒼。

028 蒼黒の異端者（後書き）

誤字・脱字などあれば報告して下さる有難いです  
（・・・・）

本日もごめんな宜しくお願ひ致します。

「ただいま。さて、ヒイラギ、髪と皿の色変えよつかー」

タチバナさんに頼まれていた薪割りを終える頃にはもう口が沈みかけていた。へろへろになりながら薪割りに使っていた斧を片付けて家へ入り、一杯の水を飲んで一息ついていた私。ああ、重労働後の一杯の水は身体に染み渡るなーとか考えていると、何処かへ出掛けていたタチバナさんが御帰宅された。玄関のドアを勢い良く開いて開口一番の彼女の台詞が冒頭のものである。

「きなりそのようなことを言われポカーンとする私。その私を二二二しながらタチバナさんは見ている。……えーっと、何だっけ？ああ、髪と皿の色か。

でも何故に？

「……おかえりっス。突然どうしたんスか？」  
「ヒイラギ明日入学試験でしょー？」

小首を傾げながらタチバナさんはそう言った。いや、まあ確かに今日の昼食時、突然思い出したかのように彼女から死学とやらに行けと言わたが。……明日入試だったのか。今知ったぞ。  
入試つていつも何をするのかすら分からない。……しかも明日つて。

……まあ何とかなるだろ。

……。

明日入学と判明しても勉強なんてするつもりもない。今更焦つても仕方がないのだ。中間テストじゃあるまいし、一日完徹でどう出来るものではない。そもそも教材 자체が無いのでどうしようもない。……ああ、また思考がぶつ飛んだ。いかんいかん。

えーと、タチバナさんは入試だからと言つたが……それとカラー・リングとどう関係あるのだろうか？

「これのままじゃ駄目なんスか？」

自分の髪を摘み、首を傾げながらタチバナさんへ問う私。彼女は少し困ったような笑みを浮かべながら答えてくれた。

「んー、綺麗だしその色私は好きなんだけどー、そのままだとちよつと目立つちゃうー」

目立つと言われた私の髪と目の色は黒と蒼。日本人特有とは言えないものだが自前である。母方の祖母が西洋系の外国人なのだ。どうやら彼女の目の色彩を受け継いだらしい。私は所謂クオーターといつやつである。

しかし目立つといつてもタチバナさんに比べたら幾分地味な配色だと思うのだが……イグラントではこっちの方が目立つのか。

何か理由があるのだろうかと考えていたらタチバナさんが説明を補ってくれた。

「死神って髪と目の色が皆それぞれ同じなんだよー」

ああ、なるほど。

確かにそれは目立つ。

どうやら私は毛色が変わった死神だったらしい。まあ異世界出身だし色彩が違うくらいでは特に驚きはない。寧ろこのファンタジー

な日常 자체が驚きだ。

そこで私はタチバナさんを見る。彼女の配色は金髪に碧眼だ。髪と田の色が違う。

「じゃあタチバナさんは死神じゃないんスね？」

謎が多いタチバナさん。今までただの……いや、ただのではない。色々と規格外なお姉さんだとは思っていたが何者であるかまで知らない。

私のその問いに彼女は「うふふー」と笑うだけだ。はぐらかされてしまつたが彼女が何者であつても私の恩人である事には変わらない。私にとってタチバナさんはタチバナさんなので何者であろうとも気にしないし、それに彼女が言いたくない事を無理に聞くことはしたくない。これ以上の追求はしないでおく。

「まあとにかく悪目立ちしちゃつかー、染めちゃおつかー。ヒヤラギも突つ掛かれるの嫌でしょー？」

「お願いするつス」

彼女の助言に私は即、了承の意を示した。

悪目立ちとか勘弁だ。面倒臭過ぎる。今まで染めたことはなかつたが、この色彩にこだわっている訳ではない。只単に髪を染めたりカラコンを付けるのが面倒臭かつただけだ。

しかしこの色彩のせいで面倒事が転がり込んで来るならば私は喜んで周りに擬態しようではないか。

「でもビーナスか？」

イグラントにもカラーリング剤やカラコンといったものがあるのだろうか？

私が首を傾げているとタチバナさんはポケットから黒いリボンみたいなものを取り出した。それを「ちょっとじつとしてー」と言いながら私の首にぐるりとまわす。何これ？ チョーカー？

疑問に思いつつも大人しくジーっとタチバナさんの手を眺めていたが、彼女がそれを装着した瞬間眩い光が目を刺激し、思わず私は目を瞑つた。

「はい、出来たー」

彼女のその言葉を聞き、私はゆっくり瞼を上げる。  
出来たって何が？

そう尋ねようとしたのだが、視界に入る明るい茶髪を見てその答えを知ることが出来た。凄え、髪染まっちゃってるよ。チョーカー着けただけなのに。

「田の色も大丈夫ー」

私がマジマジと自分の髪を摘んで眺めているとタチバナさんがそう言いながら鏡を持って来てくれた。覗き込むと髪と同色の瞳をした自分と目が合う。首には黒い帯に丸い透明の小さな石がちょこんと垂れ下がったチョーカーが装着されていた。これの構造は全く理解出来ないが……まあ魔法だろう。何でもありだ。

「おー、凄えー」と感嘆の言葉を発しながら鏡を食い入るように見る私。マジ凄え。

「髪色変えただけなのに何か別人つスね。そういうえばこの色にした意味あるんスか？」

「一番その色が多いー」

「へえー」

割りと明るい色だがまともだ。以前、赤だの縁だとカラフルな頭をした方々を見たことがあったので少しどぎマギしたのだがその配色でないことに心底安堵した。あそこまでいくと私的にはコスプレの域である。

「あー、それとー、魔力に制限かけたからー」

「何故に？首を傾げるとタチバナさんが簡潔に答えてくれた。

「デカすぎるー」

「はあ

「そうなのか。だがそう言われても自分では良く分からぬ。まあそして問題はないだろ？と思つたので適当に流した。

「でもちよつと調節が難しくてー、制限し過ぎて武器も出せなくなつちやつたかもー」

「……え、それってまずいんじや……」

訂正、やはり問題だつたようだ。

謙が出せなくて死学でやつてこけるのだらうか？

「大丈夫大丈夫ー。そんなのなくとも十分強いしー。それにいざと  
いう時には勝手に解除するようにしたしねー。あ、チヨーカーが取  
れても解除されちゃうからー、絶対外さないよーにー。私以外には  
誰にもそのこと言つたり見せたりしないでねー」

「り、了解っス」

ここに笑うタチバナさんから何だか威圧感というか黒い気配を感じ取り、背中にたらりと汗が伝つた。口から出かけた「やっぱり

無理ではないだろうか」という言葉なんて言えるはずもなく……。それを飲み込んで首を縦に振るしか出来なかつたのだった。

誤字・脱字などあれば報告して下されると有難いです

(、・・、)

本日もよろしく宜しくお願ひ致します。

……ああ、バラしてしまった。

後でタチバナさんに怒られるんだろうなと遠い目をする私。あの人の恐さは尋常じゃない。今田は記念日になるだろつ……恐怖的な意味で。

先程まではキリュウに支えられていた私だが、今それは必要ない。風魔法を使って少しの間なら飛ぶことが出来る。制御が解除されたので上手くコントロール出来るのだ。鎌も出せる。……ちょっと変わったものではあるが。

私はキリュウをチラリと見た。タチバナさんが言つた通りの事態、とてつもなく面倒臭い雰囲気をビシバシ感じる。まさか異端な色彩をしているだけでここまで驚かれるとは思わなかつた。あ、鎌も出しちやつたか…………ここはあれだ、見なかつたことにでもしてくれないだろうか。

私はへラリと笑つてごまかしを試みたのだが、キリュウの驚き顔が怖い顔になつただけであつた。顔面一杯に説明しようと書いてある。

あ、はい、すみません。見逃せとか無理ですよね。

私は長い溜め息を吐き出し、諦めてキリュウのご要望に応えようと口を開きかけた……が。

「わあツ！」

急に腕を取られ前につんのめつた。背後からキマイラが噛み付いてきたらしく、キリュウは私が噛まれないよう私腕を引いたのだ。いかん、すっかりキマイラのことを忘れていた。

「……先ずはコイツか

「ちょっと待つた」

キリュウの纏う空気がまたピリピリと張り詰め、武器を再び構えたところでガシッとその腕を掴み、待ったをかける私。キマイラを殺されてしまつたら私が決死の覚悟で秘密を明かした意味がなくなるではないか。

大体もふもふに手をあげる事 자체が許せん。しかもタチバナさんに怒られ損なんて最低最悪だ。ここで止めなければ全て水の泡と化す。そんな事させてたまるものか。

必死な様子で止める私を怪訝な顔でキリュウは見ている。いかにもさつさと放せと言わんばかりだがそんな顔したって譲らないからな。絶対譲つたりしないからな。

私は彼の腕を放すことなくそのまま口を開く。

「もつと穩便にいこう」

「……殺されかけた奴が何を言つている

まあ確かにキリュウが言う事も一理ある。私はあのキマイラに圧死、焼死、ショック死とスペシャルコースで殺されかけたのだしあキリュウに助けてもらわなかつたら本当に怪我をする所ではなかつたかもしれない。

……だがしかし。

「まだ私死んでないよ」

「……」

私がそつと語りきリュウの怪訝な顔が呆れ顔に変わつた。いや、だつて真実ではないか。私は小さな傷一つ負つていない。すこぶる健康体なのである。

「それに絶対理由があると思つ。さうとキマイラ自体は悪くない」

「……根拠は？」

「勘

「……」

何だその顔は。

今度は呆れ顔が馬鹿にするような顔に変わった。キリュウの質問に私は至極真面目に答えたのだが……まあ確かに逆の立場になつたら私も同じ態度になりそうなので黙つておくことにした。

しかし私の勘をナメてもらつては困る。結構当たるのだ、私の勘というやつは。しかもこいついう悪い状況下だと不思議な事にほぼ当たつてしまつ。

今回のこの事件は、信じたくないが誰かが仕向けているような気がしてならないのだ。面倒臭い。ほんと面倒臭い事この上ない。

二人、無言での応酬を続けていたのだが、キリュウの方は興醒めしたのか溜息を一つ吐き出し、纏う空気が幾分穏やかになった。どうやら、口押しがスキルは私の方が上のようだ。粘り勝ちした私はキリュウのその様子を認めてから鎌を消し、キマイラへと向き直る。王道の展開から考へるならばキマイラの子供が近くにいて気が立つてゐるとか、誰かに操られているとか……なのだけれども。札とか何處かに貼つてないかとキマイラの身体を隈なく見回してみた。

……。

…………つむ、何処から見ても彼は立派な毛並みをしている。何だあのツヤは。ふさふさ加減は。野性とは思えないほど小綺麗だ。あの綺麗な毛並みに埋もれたい。そして乗つてみたい。リアルものけのお姫様だ。私はあの映画を見たとき心底羨ましかつた。以前は現実にあんなデカイもふもふがいなかつたからこそ諦めたが、今目の前にその夢を叶えてくれるもふもふがいる。やつてみたくてウズウズする。据え膳喰わぬは男の恥つてな。……何か色々と違うが

まあ良いや。

しかしあれだけ「テカイ」のだ。私一人乗ったところで平氣である。「ああ、跨がって首に抱き付いてもふもふ……ん？」

思考を脱線させながらキマイラをキラキラした眼差しで見ていると、首元に何かくつついているのが見えた。何だ？「ゴミか？」

綺麗な毛並みにチラリと見えた小さな黒いものが無性に気になつた。折角綺麗なのにゴミ付きとは頂けない……つてあれ、もしや操るための媒体ではないだろうか？

もう一度目を凝らして見てみたがもう隠れてしまつたようで見当たらない。

それが本当に媒体かどうかはわからないが、確認してみる価値はありそうだ。

「キリュウ、ちょっと待つて」

彼の返事はなかつたが無言を了解と取り、私はキマイラに自ら飛び込んで行つた。

当然キマイラは獲物が態々やつて來たので攻撃を仕掛けて来る。私はキマイラパンチや噛み付きをかわしながら先程見たものを探した。……確かあの辺りだったよくな。

ガブリとやられそうになつたところを体を捻つてギリギリ横に避け、そのまま首に抱き着く。

「……ツ！？」

私はその瞬間固まつた。

誤字・脱字などあれば報告して下されると有難いです

（ 、 、 、 、 ）

本日もよろしく宜しくお願ひ致します。

「……どうした？」

「……い」

ピクリとも動かない私を不審に思つたらしいキリュウが話しかけてきた。ボソリと言葉を返したがどうやらキリュウには届いていなかつた様で、彼は再度「どうした」と問い合わせてくる。

どうしただと？

どうしたもこうしたもない。

私は埋もれていた顔をガバッと勢いよく上げた。

「……ヤバいッ！ キリュウ、もふもふっ！ 彼、超もふもふでその上サツラサラなのだよ！ 何この極上の毛並み一堪らんنたまなつ！」

「……」

もふもふに埋もれながらだらしない顔で頬を染め、興奮を露あらわに振り返り大声を張り上げて感想を伝える私を彼は何処か呆れた様子で見下ろしている。だがそんなキリュウの態度などどうでも良い。今はこの幸せを堪能するだけである。

止められない。止まらない。某菓子のキャッチフレーズが正に今  
の私の心境だ。もふもふ最高……ッ！

そんな幸せ一杯、ご満悦で極上毛皮に埋もれる私をキマイラは首を目一杯振つて剥ぎ取り作業に取り掛かっている。何やら必死な様子だが、こちらだってこの極上毛皮から離れたくなどない。私は彼の首に必死にしがみ付いた。絶対に放すものか……っ！

「……………ん？」

必死にしがみついていたら何やら指先に毛皮以外のものが触れていることに気がついた。これはもしゃと手を伸ばし、高級毛皮に深く埋め込まれていたそれをガツチリ掴んで引っこ抜く。

「……………これは

「……………羽根？」

自分の手に目を遣ると、そこには黒い羽根が握られていた。キマイラにも翼はあるにはあるが、竜のような翼なので羽根はない。彼の背中から生えているそれはゴツゴツとした骨格と翼膜で出来ているものだ。となれば別の生き物のものということになるが、私はこの羽根に強い慨視感を覚えた。先程拾ったものとそっくり…………しかし同時に違和感も覚える。何だ？

「……………あっ！」

首を捻つて考えていると手からスルッと毛皮が離れてしまった。キマイラに容赦なくブンブンと振り回され、流石にその力と遠心力に片手では勝てなかつたのだ。

「……………私のもふもふがっ！－！」

漫画なら間違いない背景にスプーンと書かれただろう飛び具合で吹っ飛ばされてしまった。遠ざかる極上毛皮を名残惜しげに見詰める…………などといった余裕は今の私にはない。

「……………ツ－！」

本日一度田の恐怖が私を襲う。強い浮遊感に息が止まり、声にならない悲鳴を上げながら強く目を瞑つた。瞼の裏に流れる走馬と……いやいやいやいや。まだ私は死にたくない。

「 うわッ！？」

後ろ向きに吹っ飛んでいた私の身体は突然何かにぶち当たり急停止した。軽い衝撃はあつたが痛みはない。

後から思えば現在制限解除状態で魔法が使えちゃう事だとか落下する前に体制を立て直さなきやいけなかつた事だとかあれこれ思い浮かぶのだが、恐怖によつてそんなものは頭からすぽーんと抜けてしまつていた。もし、あのままだつたらどうなつていか分からないでの本気で助かつた……未だびっくりな速さで脈を打つ心臓に思わず手をやる。

私が血の氣のない顔をそろそろと上げると、そこには予想通り超絶美形の顔があつた。眉間の皺というオプション付きで。

彼は何処かに飛んでいきそうになつた私を回収してくれたようだ。現在私は彼に後ろから一の腕を掴まれている何とも情けない恰好だが気にする余裕すらない。そしてその掴まれている一の腕がぶよぶよだとしても気に……いや、やっぱ気にする。そういうばあ先ほどは腹を抱えられていたがそこにも無駄な脂肪が……。彼には確実に私の乙女の悩みがバレたであろう。ダイエットしようにも飽き易い私は三日も継続しそうにない。彼は何も言わないのでいつもそこには触れない方向でいこう、うん。

「あー……ただいま？」

贅な肉が氣になりプチ混乱の私は礼をすつ飛ばし、取り敢えずへラッと笑つて挨拶をしてしまつた。益々キリュウの眉間のそれが深くなる。完全に台詞を間違つた。

続けて本来最初に言つべきであつた「ありがと」、「うう」という言葉を告げたがキリュウは渋い顔のまま一向に言葉を発さない。何だこの空氣……母親の前で正座させられて、怒られるのを待つていいような。気まず過ぎる。

それ以外に何を言つたら良いのか分からず視線を逸らしてはははと笑う私。すると今まで黙つて見下ろしていた彼から溜息が零れた。

「…………何を遊んでいる」

どうやら怒つているのではなく呆れていようだ。しかし私は決して遊んでいたわけではない。むしろ死にかけた。気分的には一回死んだ。

「遊んでないよ、ほり…………あれ？」

「…………」

私は力無く左手を持ち上げて戦利品をキリュウに見せようとしたのだが…………先程まで手の中になつた羽根が消えていた。  
通行手形といい、羽根といい所構わズポンポンと消えていく……  
一体何だ。私が何をしたというのだ。

「ごめん、何かまた消えた。さっきまで黒い羽根持つてたんだけど

…………

「黒い羽根…………？」

今は何もない左手をこぎこぎしながらさう言つとキリュウの眉間にシワが若干深くなつた。黒い羽根が引っ掛けているようだが……

「何故に？」

意味が分からず首を傾げていると難しい顔をしたままのキリュウが口を開いた。

「……多分悪魔の羽根だ」

「悪魔の羽根……」

キリュウの言葉を聞いて、ああやつぱり、と思つ。

私も羽根を引っこ抜いて見たときそつではないだろうかと考えた。

私が拾つたキリュウの羽根とそつくりだつたのだ。

鸚鵡返しをした私にキリュウは「ああ」と一言返し、まだ難しい顔をしたまま言葉を続ける。

「悪魔の羽根は魅了の力の塊……アレに触れたものは魅了の力を直に喰らひ」

「……つまり、キマイラはあの羽根の持ち主の操り人形って事?」「ああ」

なるほど。だから様子がおかしかつたのか。

そこでチラリとキマイラを見ると確かに様子が違つて見えた。やんちゃつぶりは何処へやら、唸り声を発することも無ければ殺氣も感じられない。彼はもう私にじやれついて来ることはないだろ。これで思つ存分もふもふさせてくれるだろつか。

「……お前はそれを素手で掴んで取つたのか」「うん」

そうか、とキリュウは呟き一度目を逸らして暫し思案した後また私に目を向けた。

「……すまなかつた」「へ?」

予想もしなかつた彼の謝罪に思わず間抜けな声が出た。

誤字・脱字などあれば報告して下されると有難いです

（ 、 、 、 、 ）

本日もどうぞ宜しくお願ひ致します。

またそんないきなり意味不明な……彼は一体何に対しても謝つてい  
るのだろうか。

彼に謝られる覚えのない私は盛大に首を傾げる。

「……お前、狙われるぞ」

「へえ……え？」

誰に？何故に？

覚えのない謝罪に続けてキリュウから零れた忠告とも取れる言葉  
にまたもや間抜けな声が口から零れてしまった。首はもうこれ以上  
傾げられないといった所まで傾き、大変なことになつていて。私は  
首を元に戻し、代わりに眉間に皺を刻んだ。

もう本当に訳が分からぬ。彼は本当に言葉が足りない。対キリ  
ュウ翻訳器なるものがあれば是非とも欲しいところである。大活躍  
すること請け合いだ。

「……えーっと、キリュウさん、出来れば順を追つて説明して頂け  
ると非常に有り難いのですけれども」

でなきやさつぱり分かりませぬ。

私の読解レベルを遥かに越えたのでキリュウに詳細を求めてみた。  
このもやもやを是非に晴らして欲しい。何だか針に糸が通らない時  
の心境に似ている。私は今、頭を搔き鳩巣たくて仕方がない。

そんな私を見たまま、彼は少し間を開けてから話し始めた。

「……お前は悪魔の上層部の奴らに口を付けられている」

突拍子もない事を告げられピシリと固まる。何だその至極面倒臭  
そうな事態は。

今、私はきっと豆鉄砲を後ろから一気に5発ほど喰らつた鳩みた  
いな顔をしているだろ。不意打ち過ぎる。

「……あー、うん? 私、何かしたかな?」

してないよね?

記憶をいくら連れども悪魔のお偉いさん相手に問題を起こした覚  
えはない。当然だ。そもそも私は悪魔自体昨日まで会ったことのな  
かつたのだから。そんな奴らに何故私が狙われなければならないの  
だ。

……まさか鼻血垂れをぶちのめしたのがいけなかつたのか? アイ  
ツ、実は上層部の奴の箱入り息子とか?

「……言つておぐが鼻血を垂らしていた奴は無関係だ」

だよな。

私の思考をバツチリ読んだキリュウが訂正を入れてくれる。  
まあアイツはどう見ても雑魚キャラもんな。どう頑張つても重要  
キャラには見えないもんな。

しかし奴はキリュウにも鼻血垂れとしてしか認識されていないら  
しい。余程影が薄いようだ。美形なのに。一応。

また思考が脱線している私。それにはもう慣れたらしいキリュウ  
が説明を続ける。

「……原因はペア発表の日、魅惑の力が効かなかつた事。そしてそ  
れ以上に目を付けられた原因が、黒学の保健室に辿り着けた事だ」

「あー、空間魔法がどうのいいのじゃつ？」

「ああ……それを担任 上層部の奴に知られた」

眉根を寄せるキリコウ。どうやら彼はその上層部の奴らがあまり好きでないようだ。そして担任、偉い奴なのか。偉い奴らって黒い皮張りのソファーで暇そうに踏ん反り返っているイメージがあるのだが。仕事をするにしてもポンポンハンコを押したりする書類関係なイメージがあるのだが。まさか教師は副業か？……いやいやいやいや。

またもやぐるぐると思考を回す。そんな私に田の前の男は更に爆弾を落してくれた。

「……あと探している通行手形だが、あれは俺と担任が掏り替えた物だ」

卷之六

たつぱり、それはたつぱりと間を開けて言った。は？もう一度言おう。は？

これだけ大騒動に……私は決死の覚悟で正体まで明かしたのに。黒幕がまさかまさかのキリュウだと？

フツフツと湧く怒りを感じながら彼を見る。

「……すまなかつた」

1

ふざけんなッ！！

……そう怒鳴らうと思っていたのだが、彼を見た瞬間怒りがしゅるしゅると痛み、そして消えてしまつた。

私はどうかしたのだろうか。幻覚が見える。キリュウの頭にへに

よりと垂れた耳、そして後ろからじょぼりと垂れた尻尾が見える。それほどまでに彼は反省しているようだ。先程前触れもなしに謝ってきたのはきっとこの事なのだろう。

私は溜息を吐き出し、怒るのを諦めた。といつより怒れない。幻覚が見える限り無理だ。

「……でもまさか此処に飛ばされるとは思わなかつた

「え？ 共犯なくせに行き先知らなかつたの？」

「……ああ。アイツに『正体を暴きたければこれを使え』と渡されただけだ。消えたのは……アイツが何か仕掛けをしていたのだろうな。キマイラを操っていた悪魔の羽根も俺のものではない」

「……え？ 何？ どういう事？ キリュウは私の正体が知りたかつだけ？」

色々気になる事を言われた気がするが、一番そこが気になつた。共犯と言うからにはこのまま連行されて人体実験やら何やらされるものだと思っていたのだが、そんな素振りは微塵も見せない。何やら暴露まで始めたし……彼が一体何をしたいのか全く分からぬのだ。

頭に疑問符をこれでもかといつ程浮かべまくつた私を他所にキリユウは淡々と続ける。

「……知らなければ隠せないだろ？ 上層部に告げ口するつもりは端からない」

「ん？ 何だ？  
つまりはあれか？」

「庇ってくれるの？」

「ああ」

「……何で？」

「……折角面白田そつな奴を見つけたのに上層部の奴らに横取りされるのは気に食わない」

……何だその自分のオモチャを取られたくないガキンチョのような考えは。

そんなお子様はきりう君が、きりゅ君に呼び方を変えてやる。名札を付ければバツチリだ。恐ろしく似合わないが。まあしかし助かった事には変わりない。何かよく分からぬが協力もしてくれるようだし……。

「ありがとう」

取り敢えずお礼は言つておひげ。そう思つて言つたのだが、キリュウが驚いた表情を見せた。

え？ 何？ 何か変な事言つたか？

「……飽きない奴だな」

「それは褒め言葉と取れば良いのかな？」

私のその問いにキリュウは「……それより」と話を中断させた。  
……もう勝手にそう取ることにする。

「……その色、何とかならないか？」

キリュウが言つているのは髪と瞳の色の事だらう。私は解除したきりなので未だ色は自前のものとなつてゐる。……確かにこれを他の奴に見られるのは厄介だ。

私は「了解」と無惨にも引き千切られたままだつた黒いリボン状のものをポケットから出した。チヨーカーだ。今は小さな透明の丸

い石は付いていない。

それを首に回し、目を閉じて魔力を集めるイメージをする。淡い光が私を包み、目をゆっくり開くと視界にもはや定着している明るい茶色の髪が映った。染色完了である。

先程まで千切れたただの黒いリボンだつたそれは、今では復元され、チヨーカーとして首に納まり、コロンと小さな透明の丸い石がぶら下がっている。タチバナさん曰く、これ、実は私の魔力の塊らしい。

キリュウはその一連の様子をジツと見て私の髪と瞳が染色された事を確認した後、口を開いた。

「……知らなければ何も出来ない。話してくれるか？」

そんな彼を私は見る。闇色の瞳の奥を覗くようにジツと見詰めてみるが騙しているような様子は見られない。彼はきっと嘘はついていない。

彼は信じていいと思う。根拠は無い……私が得意の勘といつやつだ。そもそも良い奴だと私は昨日から思つている。迷う必要はないのだ。

彼には秘密の共有者、そして協力者になつてもらおう。タチバナさんは……いいや、今は考えない。後々の恐ろしい情景しか思い浮かばないし。

私はふるふると頭を振り、意識をキリュウへと戻す。  
うーん、話か。

…………まあ、取り敢えずは――

「私はヒイラギ……柊湖都。改めてようじく、キリュウ」

自己紹介かな。

私は自然と頬が緩むのを感じつつ田の前のパートナーを見る。

さて、何から話そうか。

「……へえ。蒼黒の死神……ね」

2人が居るところから少し離れた場所。ポツリと静かに声が零れた。

薄暗い漆黒の森に白い羽根がハラリと舞う。浮くかと思われたその色は闇の森に違和感なく溶け込んでいった。

「……面白そうだね」

2人を観察していた一つの影は興味深そうに「一言歎き、ニヤリと意地の悪い笑みを浮かべた。

032

### 秘密の共有者兼協力者（後書き）

誤字・脱字などあれば報告して下さると有難いです

（、・・、）

× × ×

おまけ（前書き）

本日もありがとうございました。お願い致します。

「もふもふだーつ、幸せだーつ、私、幸せだーつ」

「……クウ」

キリュウに話した後、私はデツカイもふもふ——キマイラへ体当たりをかますように突っ込んで行った。……ヤバイ。やはり彼の極上毛皮は生睡モノだ。だらしない顔を晒しながらグリグリと頭を擦り寄せる。はあ……至福の時。

支配から解放されたキマイラはもう私に攻撃する事はない。彼は支配されていた時の記憶があるのか心なしか少し申し訳なさそうにしているように見える。違う、お前のせいではない。全く以て気にしなくていい。する必要もない。

そんな思いを込めつつ遠慮なくぎゅうぎゅうと抱きしめる私に彼はされるがままだ。時より漏らす鳴き声が恐ろしくかあい。見た目はカツコイイのに……ヤバイ、これがギャップ萌えというやつなのだろうか。……堪らない。

「……そろそろ帰るぞ」

いつからいつしていただろ。今までずっと黙つて傍観していたキリュウが声を掛けてきた。

この至福の時の邪魔をするな。足りない。もつともつと、もふもふするのだ。

私はキリュウを無視して頭を極上毛皮に擦り寄せる。

「……あと一〇分で時間だ。戻らなければ面倒臭い事になるぞ」

時間？

……。

……。

ハツ！

そういうえば今は実習の最中であった。極上毛皮に夢中になり過ぎて忘れていた。

「…………クウ」

「…………」

どうするー？と脳内に流れるキャツチフレーズ。その某CMのわんこのよつなキラキラとした瞳を私に向けないで。確實に負けちゃうから。喜んで負けちゃうから。

うー、と唸りつつ私はなんとか心を鬼にして極上毛皮を手放した。後ろ髪を引かれまくって禿げそうだ。

だがここで帰らなければ確かに説明やら何やら面倒臭そうなのも事実。私は渋々「また来るからね」と約束をし、今日は一日戻ることにした。

「…………」

待てよ？

戻るって、どうやって？

「…………早くこっちへ来い。空間魔法を使つ

ツ！！

田を見開いてキリュウを指差し、パクパクと口を開閉する。

おま、気づかない私も私が今まで何故それを言わなかつた……ツ！

キリコウはどうやら以前来た事があるのか、この場所をしつかり特定できていたらしい。

「…………すまない」

そんな私を見て何が言いたいのかバツチリ分かつたのだろう。「正体が掴めるまで使うのを躊躇つた」と付け足す彼。開いた口が塞がらない。これは文句の一つも言わなければ気が済まないと彼をギロツと睨みつけるように見た。

「…………」

「……」は一発ガツンと…………。

「…………一発…………。」

「…………。」

「…………無理だ。」

はあ、とガツクリ頸垂れる私。駄目だ、またもや私には幻覚が見えた。垂れた耳と尻尾……どうやら彼にそれが出されると私は何も言えなくなるようだ。

毒氣が抜かれた私は力無く一言だけ言つ。

「…………帰るうか」

「…………え? 手綱捌きはどうしたって?」

「…………その前に彼の何処にそんなものが付けられるのか教えて欲しい。」



× × × おまけ（後書き）

誤字・脱字などあれば報じて下さる有難いです

( 、 、 、 )

033

もふもふ故に最下位（前書き）

本日もどうぞ宜しくお願ひ致します。

初実習でキリュウと供に漆黒の森へ飛ばされたのは5月  
あれから早くも1ヶ月が経過し、6月へと入った。

此処、死神の領域の気候は私が慣れ親しんでいた故郷、日本とほぼ同じものだ。異世界であるのに妙に日本日本しているこの場所は時折日本にいるのではないかと勘違いを起こしてしまってそうになる程である。日常の道具にしろ日本臭さが滲み出ているし、豆腐やワカメ、そして揚げの入った味噌汁を啜つては沢庵をポリポリと齧り、ご飯を搔き込んでいる朝食などはまんま日本の風景だ。寝ぼけて今いる場所が日本だと思い込んでいた事も幾度とある。……まあ毎朝食卓を彩っているオレンジ色をしたバナナが視界に入る度、此処が異世界であることを瞬時に理解させてくれるわけだが。後は登校中、ウェディングケーキの様な校舎が目に入った時だとか。

そのようなことを除き、日本に酷似しているこの場所は勿論四季だってちゃんとある。ただし梅雨の時期である現在、日本ほど雨は降らない。梅雨が苦手な私には大変有り難い事だ。

今まで眠りに誘うほど柔らかだった日差しも段々と攻撃的になり、それに伴って気温も上昇する。今は正に衣更えの時期である。斯く言う私も制服を冬服から夏服に替えた——のだが。

チラリと前方を見遣ると、お前は何処の所属の黒子だと言いたくなる様な全身黒尽くめの長袖キリュウさんが視界に入った。  
……暑い。視覚的に暑い。自分が着ている訳ではないのに何故か体感温度が高くなる。何とも不思議なものだ。

しかしこれでもまだマシなのだ。コイツは初め、ブレザーまで着ていやがった。嫌がらせレベルとも言えるその光景に我慢できなくなり追い剥ぎの如くそれを引っ張がしたのは記憶に新しい。  
……怪

訝な顔をされたが私は悪くない。服を脱がせたといつても上着だけだ。ブレザーを取り払つて下が長袖だった事に新たな怒りを感じ、危うくそれも剥ぎ取りそうになつたが断じて私は痴女ではない。このくそ暑い時期にくそ暑い恰好なんてしやがるキリュウが悪い。

何故この時期にそんな厚着でいられるかといふと、キリュウ曰く悪魔や天使は体感温度というものに物凄く鈍いから、らしい。どれくらいかといふと、極寒地帯に居ても少し寒い程度、火口付近に居ても少し暑い程度だとか。これはこれで苦労すると彼は言つていたが暑さには滅法弱い私にとつては羨まし過ぎるスキルだ。何故死神にもそのスキルが備わらなかつたのか。同じ人外な生き物なのだからこちらにだつて付けてくれても良いではないか――

「……それも見逃すのか？」

ウダウダとくだらない事を考えていたらキリュウが声を掛けた。因みに只今実習中でどこかの平原へ来ている。初回のあの薄暗い森とは違い、視界を遮るものはポツポツと申し訳程度に生えた木ぐらいなので見晴らしはそこぶる良い。フワッと吹き抜ける風も気持ちが良い。その気持ち良い風を感じながら私は手の平に乗せた毛玉を撫でた。くすぐつたそうにもそもそも動くそれに思わず表情筋が緩む。

初回は視察だけだつた実習も段々難易度が上がり、今では魂を狩る所まで進んだ。

今回の実習の狩魂しゅこんレベルはE。狩魂とはその文字の表す通り、魂を狩るという意味だ。そのレベルはE、D、C、B、A、Sとあり、後者になるほど難易度が高い。現在実行中の狩猟はレベルEなので最低ランクの簡単なものである。

「だつて狩る必要性が見出だせない」

寧ろ狩ろうとする奴をめつた刺しだ。

そう言外に含ませながらキリュウの言葉に答えると彼は持ち前の読心術スキルを發揮し心を読んだらしく、少し呆れた様子で「そつか」とだけ応えた。

ね?と私が同意を求めた相手はヒヨコさん。私の手の平にちょこんと収まっている彼女は首を傾げて「ちゅん」と鳴いた。……多分雀さんではない。ヒヨコさんだ。見た目はヒヨコさんだから恐らくヒヨコさんなのだ。瀕死だった所を助けて今に至るが彼女が今回のターゲットだつたりする。

今までの実習で課題に出された狩魂はこれで10回くらいなのだが実は私達はまだ一度も狩ることが出来ていない。といふか私が狩ろうとしない。

何せEランクの狩魂は今回のような小動物ばかりなのだ。ウサギさんにわんこにハムスターさんに……何これ、イジメ?私に対するイジメ?ならば効果抜群だ。

しかも懸命に助けようと思えば助けられる。決して絶対死ぬといふものではない。あくまで瀕死状態なのである。今回のヒヨコさんも親と逸れて餓死しかけていただけなのだ。それを狩るというのが課題だが……出来る訳がなかろう。

私は毎回「やつてられるかー!!」と叫びながら借り物の鎌を放り出す。今回放り出した獲物もキリュウの足元に転がっている……あんなもの要らない。要るのは救急治療道具セットだ。今回もキリュウに頼んで空間魔法で取り寄せてもらった。相変わらずの便利っぷり。一家に一台、キリュウさままである。引き出しから突如出現する青狸の腹に張り付いている四次元なポケットなど私には不要なのである……彼といふとき限定だけれども。

課題遂行か救命か……そんなの勿論助けるに決まっている。もふもふ至上主義者として。

だが出された課題はあくまでも狩魂。私はターゲットを助けてばかりいるのでそんなもの出来るはずもなく、いつも失敗に終わって

いる。

そんなこんなで実習の成績は勿論

最下位。

まあいつもの事だ、うん。問題ない。

033

もふもふ故に最下位（後書き）

誤字・脱字などあれば報告して下さる有難いです  
（ 、 、 、 、 ）

本日も心うれしくお願い致します。

手の中にすっぽり収まっているヒヨコさんを撫で繰り回しながら私はキリュウを仰ぎ見た。

実習はペアで行うものであつて単独なものではない。私が最下位つまりそれはキリュウも最下位という事を表す。

聞くところによると彼は首席様らしい。しかも次席にすら落ちた事がないという。万年最下位な私とは正反対で、彼は万年首席のタイトル保持者なのだ。

そんな彼は現在私とペアを組んだばかりに実習で毎回ドベの常連になってしまっている。実習の成績は筆記や実技とは違い、定期にテストがあるわけではない。一つ一つ授業そのものがまるつと反映されるのだ。実習が終わる度、順位の書かれた紙が張り出される。勿論毎度最下位の欄には私の名前が居座っている……ついでにキリュウの名前も。その事で黒学の生徒達からのやっかみが増えつあるので鬱陶しくて仕方がない。まあ彼らが実行する嫌がらせは今の所小学生レベルのものなので、慣れつつある現在は鬱陶しさ半分微笑ましくすらある。……あれ？ 私、毒されていやしないか？

そんな面倒臭い事になつている現状なのだが、それでも私はEランクもふの魂を狩れる気がしない。この調子では彼の首席は間違いないなく引きずり下ろされるだろう。粉う事なき道連れである。

私は別に狩らない事自体は悪いとは思っていない。寧ろ良い事だと思っている。

しかしキリュウはそのことについてどのように思つているのだろうか。今回もそうなのだが彼は毎回狩魂をしようとしてない私に狩らないかどうかという事は尋ねて来るが、文句を言った事は一度としてない。自分でやつておいてなんだが本当に良いのだろうか。

そんな事を考えながらキリュウをジークと見ていると、不意に彼がこちらを向いた。そして幾許か見つめ返された後、彼は呆れたよう口を開く。

「…………何を考えているか知らんが、俺は成績などビリでも良い」

いや、知ってるだろ。

相変わらず見事な読心術つぶりである。

そのことに突っ込んでも今更なので、私は「そつか」と一言だけ返して手の中の毛玉を愛でる事に専念した。うつらうつらと船を漕ぎ始めるヒロハさん。見ているとなんだかこちらまで眠くなつて来る。今日も今日とて欠伸が出る程平和だ。

「」のよつな平穏な日々を過ごしているが、以前、キリュウは私が狙われると言つた。一応最初は警戒をしていたのだが、あの日から何事もなく今日に至る。最近では警戒するのも阿呆らしくなつてきて警戒の「け」の字も見せない私に呆れ氣味なキリュウである。何せこんなに平和なのだ。こうやってもふもふとも戯れられるし。危なくなつたら彼が何とかしてくれるだろうと他力本願さえ出て来る始末だ。

——あと、恐れていたタチバナさんの「」報告だが、意外にあつさつと事が済んだ。

漆黒の森へ飛ばされたあの日、キリュウの空間魔法を使って死学へと戻ろうとしたら、何処からともなくいきなりタチバナさんが現れた。気配なんて微塵も感じられず、彼女に声を掛けられるまで気がつかなかつたのだ。あれは本当にビビつた。心臓に氷をぶち込まれたような感覚……生きた心地がしなかつた。13日の金曜日でもないのに振り向いたら背後にジェイソンがいた、と想像してもらい

たい。

固まる私に始終二コ二コしているタチバナさんは最強に怖い。「ヒイラギー、バラしちゃったねー?」と軽い調子で言われているのに、それが私には死刑宣告にしか聞こえなかつた。それと同時に深まつたタチバナさんの笑みは形容し難い。……………敢えて言うならどす黒かつた。それを間近で見てしまった私は明日の朝日は拝めないかもしないと本気で覚悟をした。絶対に容赦なく攻撃魔法をぶつ放されるか、得物で攻撃されると思ったのだ。

しかし、それは杞憂であつた。入学前、あれだけバラすなど脅し混じりで忠告していたタチバナさんは何故かそこまで怒つていなかつたのである。

攻撃される所か、彼女はよしよしと私の頭を撫でるだけであつた。その後キリュウと一緒に三言葉を交わし、「じゃあ、先に帰つてる」。今日は肉じゃがー」と台詞を残して呆氣なく帰つて行つた。何故かご機嫌だったタチバナさんに對し、キリュウは微妙な表情だったのだが……理由はよく分からぬ。

まあ何はともあれタチバナさんの不興を買つことがなかつたので、心底安堵をした私である。

「……あ、寝た」

いつの間にか手の平の毛玉がスヤスヤと寝始めた事に気がつき、二マニマとする私。ヤバイかあいい。やはりもふもふは最高である。癒しの塊である彼女はマイナスイオンをどれだけ発生させているのだろうか。

「……それをどうするつもりだ」

私が締まりのない顔でヒヨコさんを眺めていたら上からキリュウがそう尋ねてきた。

「うーん」と首を傾げて考える。確かに助けたは良いがこの後の事を考えていいなかつた。連れて帰る訳にはいかないし、今までみたいに治した後、そのまま放つておくという事も出来ない。今までのターゲットは成獣のもふもふばかりだったのだ。しかし今回は幼いヒヨコさん。このまま野生に返してもまた同じ事が起きるだけである。

……となれば選択肢は一つしかない。

「親を探す」

「……」

断言した私にキリュウは一瞬呆れた視線を寄越したが、何を言っても私が意見を曲げないとthoughtたのだろう。仕方ないなどばかりに小さな溜め息が背後から聞こえた。

流石はパートナー。よく分かっておられる。

私が「ありがとう」と礼を言つと「ああ」といつも通りの返事が返ってきた。キリュウの了解を得ることが出来たようである。

ポケットに入っていた時計を見ると残り時間は3時間と少し。もう少しダラダラと休めるだろう。

空を見上げると大分太陽モドキが移動していた。現在私達は木陰にいるのだが、日が当たる方向が変わり、影が小さくなってしまっている。最早暴力レベルとなつてている日差し……これをヒヨコさんに浴びせる訳にはいかない。暑さが苦手な私だって浴びたくはない。後ろの黒尽くめさんは一人涼しい顔をしているのだろうけれども。

……畜生、羨ましいな。

辺りを見渡せば少し離れた場所に大きな木が立っていた。枝も良い感じで広範囲に広がり、影も十分にある。

「あつちに移りてもう少し休もう

」言ひが早いか私は木陰を求めて歩き出した。

034 磐石のもふもふ感上半義（後書き）

誤字・脱字などあれば報告して下されると有難いです

(、・・、)

本日も又お忙しごとくお願い致します。

移動し終えた私は木の幹に背を預け、足を投げ出して座り込んだ。女らしさなんて微塵もないが気にしない。休憩中なのに変に女らしくしては逆に疲れてしまう。そもそも私が女らしくしたところで何の意味も成さない。というか女らしい自分なんて想像するだけで無性にムズムズしてしまう。

少し遅れてキリュウが隣に立つた。幹に肩を預けているようだが座る様子はない。……疲れないのだろうか？

「座らないの？」

「……いざという時に反応が遅れる」

うちの番犬は未だに警戒心が剥き出しのようだ。守衛とかやれば天職ではなかろうか。

しかし、そんな常時気を抜かない状態では疲弊しない訳がない。現に彼は幹に肩だけ預けて負担を軽減している。

キリュウ自身が狙われる訳ではないのに、ここまでしてくれる彼はやはり優しいのだと思う。

しかしそれにも限度がある。私は王様なんかではない。パートナーだからといって無条件で守つてもらう義理なんてないのだ。

「 ッ！」

私はキリュウの服の裾をよいしょと引つ張つて無理矢理座らせた。怪訝な視線を投げ掛けられたが視線を合わす事もなく黙殺する。黙つて休んでおけば良いのだ。私だけ休むなんて居心地が悪すぎる。

暫くチクチクとした視線を左横から感じていたが深い溜め息が聞こえたと共にそれは外された。勝者は私、粘り勝ちだ。

諦めたキリュウの様子を横目でチラリと見た後、視線を手の中に落とすとスヤスヤと眠るヒヨコさんが少し身じろいだ。しかし、起きる様子はなく、また眠りの世界へと旅立つたようだ。……かあい彼女の為に早く親を探してやらねば。

ヒヨコの親といえば鶏だ。真っ赤なトサカがトレーデマークなコケコケと鳴くアレだ。……私の常識では、だが。何せこの世界では私の常識を斜め上に行くことがたまにある。私の想像するものが絶対だとはとても言えないのだ。

私の思い浮かべているもので合っているのならば、羽根を辿ればすぐ見つかると思った。しかし、辺りを見回してもそれが散らばっている様子はない。遠くにいるのか、それとも想像しているものとは別物なのか……もしも後者ならば非常に気になる。

「ん？」

思案しているとヒラリと田の前に何かが降ってきた。地面に到達する前に思わずそれをキャッチする。

何だろうかと持ち上げると手に長さ20センチ程の白く平たいものが握られていた。

「……羽根？」

私は首を傾げてポツリと呟く。

風に飛ばされて来たのだろうか。……まさか、これは鶏のものなのか？

だとすれば私の記憶のものより遙かに大きい。……巨大鶏……鶏の丸焼きはテーブルに乗りそうもない。しかも火が通りそうにないので生焼けだろう。

「あ

ひらり、ひらり。

私が鳥の丸焼きに思いを馳せている間にも次々と同じような羽根が降つて来る。何だこれ……風で飛ばされているところより上から降つてきているような……。

そういえば、とキリュウの方にチラリと目を遣る。彼の頭上にももなくシャワーの如く羽根が降り注いでいるだろう。

「……キリュウ？」

私は首を傾げて彼を呼んだ。

無関心な彼を想像していたのだが……私の目に映ったのは目を細めて睨みつけるように頭上を見上げている彼だった。私の声掛けにも反応しない。分かったのは彼が見上げているもの、この羽根の発生源があまり喜ばしいものでないという事だ。

「……」

私は覚悟を決めてゆっくりとキリュウの視線の先を辿った。

ひらり、ひらりと舞う羽根が視界を邪魔するが、その間からその姿を伺うことが出来た……人がいる。

そこには緩くウェーブがかかった綺麗な金髪、そして透き通った青空の色を宿した瞳を携えた男性が枝の根本に腰掛けていた。前者はサラサラと風に靡き、後者は緩く細められ、柔らかい眼差しをこちらに寄越している。距離があるので細かい所までは分からぬが……多分凄い美形だ。サカキがこの場所にいたら間違ひなく顔を真っ赤に染め上げているだろう。そして私の腕なんかを掴むのだ。そ

れはもう力一杯に。……此処に彼女がいなくて本当に良かつた。

彼は美形は美形なのだがキリュウとは違つたそれのようだ。与える印象は正反対。キリュウが陰なら彼は陽、キリュウが黒なら彼は白だ。

まあ色に関しては見たままである——彼の背中には大きな白い翼が生えているのだから。

今だにひらひらと降り続けている白い羽根の発生源は彼であった。

金髪、青眼、そして白い翼。

……彼はもしかしなくとも——

「…………天使？」

疑問形になつてしまつたが確信はしている。これで妖精なんて言われた時には、もう私は私の中の常識を容易に信じる事が出来ない。私がそう呟いて見上げていると、頭上に腰掛けている彼はフワリと笑つた。

甘く蕩けるような——

「 ッ！？」

——私は思わず目を見開いた。

決して見惚れた訳ではない。それを見た瞬間、何故か物凄い勢いで私の背筋を悪寒が走り抜けたのだ。

思わず腕を見ると思い切りチキン肌になつてゐる。先程まで暑かつたのに今は寒い。そのくせ嫌な汗がタラタラと流れて来る……何、これ。

私はもう一度彼を見上げた。

そこには相変わらず微笑んでいる彼がいる……が、その様子を認めた瞬間、治まりかけていたチキン肌が復活した。

え、  
何？

誤字・脱字などあれば報告して下されば有難いです（・・・・）

〇三六 横反する黒（前輪側）

本日もいつも宜しくお願ひ致します。

一つ分かつた事がある。

先程からあつた微かな違和感……私の第六感が切々と訴え続けて  
いる。

最初は見た目が真逆だと感じたのだが……さつとそれだけではな  
い。

——中身も真逆だ。

これはほぼ確定で良いと思つ。キリュウが純粋とすれば彼は不純  
なのだ。絶対今、一重、二重と重ね着を通り越した、もこもこの厚  
着で猫を被つている……間違いない。

そして恐らくコイツは私の最も苦手とするタイプだ。でなければ  
最初の悪寒やチキン肌、あと先程から頭のどこかでガンガンと鳴り  
響いている警報の説明がつかない。私の危機的状況回避能力がフル  
稼働しているのだ。これはただ事ではない。

一見柔らかさを隠れる彼の笑みにドス黒さが今もチラリチラリと  
垣間見える。

……隠し切れてない、全く以つて隠し切れてない。胡散臭くて堪  
らない。あの笑顔の下で何を考えているやら……いや、知りたくも  
ないが。兎にも角にも禍々しい事この上ないのだ。

私は一旦視線を外し、もう一度彼を見上げた。

「…………」

関わるな、近づくな、全力で回避しろ。

やはり私の脳は切実にそう訴え続けているのだが下手に動いてもまずそうだ。

どうしたものかと私は頭上から左隣りへと視線を移した。そうだ、私には頼りになるパートナーがいる。彼に指示を仰ごう。

先程は睨み付ける様に見上げていたキリュウの様子を伺——

「…………」

……うん、見なかつたことにしようかな。

私はそつと彼からも視線を外し、前を向いた。

何か無茶苦茶殺氣立つてゐるのは氣のせい……ではないだろう。上に氣を取られていて気が付かなかつたが、いつの間にか彼の周りの空気が氷点下を下回つていた。本日は気温の変化が著しい。しかもかなりの局地で。……あれほど敵視してゐた木陰の外に燐々さんさんと降り注ぐ強い日差しが今は恋しい。目の前にある筈の日当たりが心なしか遠く思える。

初めから歓迎モードではなかつたが悪化し過ぎてこちらにも悪影響を及ぼしている。……キリュウさん、寒いです。私、そろそろ凍つてしまいますが。

「 こんにちは」

どちらを見る事も出来ず、死んだ魚のような目で押し寄せる吹雪に堪えていると上から声が降つてきた。発信源は勿論胡散臭くて堪らないドス黒天使である。

耳に届いたものは高くもなく低くもないが—— 艶っぽい。つかエロい。そんな表現がピッタリな声。

そこらの女子おなじがこの声を聞いたら黄色い声を上げて身悶えていそ

うだが、聞いてしまった私はチキン肌が再復活……勿論悪い意味で。誰かあいつの首に機械仕掛けの赤色蝶ネクタイをぶら下げるてほしい。

眉間に盛大に皺が寄る。尽く私の苦手なタイプのようだ。この手合いには本気で関わりたくないというのに。

隣を見ると同じく眉間に皺を深く刻んだキリュウがいた。もしかしなくとも彼も奴みたいなタイプが苦手なのかも知れない。同士を見つけて少しばかし安堵をする。

「……ちっス

心の支えが出来た所で挨拶に応えてみた。……何だか不良みたいな挨拶になってしまったが。挨拶は挨拶だ、うん大丈夫。

ふと隣から視線を感じ、そちらを見ると恨めしそうに目を細めてこちらを見ているキリュウがいた。……いや、言いたい事は分かる。物凄く分かる。恐らく「何素直に応えている。関わるな、無視をしろ」的な事を言いたいのである。私だって好き好んでこんな不得体の知れない相手と関わりたくないなんてない。

だがしかし、私は元日本人だ。日本の心を忘れた訳ではないのである。祖国では挨拶されたら返すのが礼儀。初対面で挨拶を無視するなど何となく後ろめたいのだ。

「実習中?」

……にこやかに話し掛けられてしまった。

隣を見ると、それ見たことかと言わんばかりに眉間のシワが深くなっている……うん、何て言うかごめん。私が悪かった。日本の心が、とか言つてる場合じやなかつた。猛省します。

「実習中?」

「……っ」

キリュウに向いていた視線を急いで前へと戻す。

私が応えない事に焦れたのか、奴が木の枝からフワリと降りてきて再度尋ねてきたのだ。腰を屈めて私の顔を覗き込んで来る。

私は思わず横にズザッと飛び退いた。左に動いたので私の背中がキリュウの腕と衝突事故を起こす。すまん。

「……そうですけど？」

これ以上パーソナルスペースに侵入されでは堪らないと顔を引き攣らせながら渋々言葉を返す。落ち着け、落ち着け私。ここで突つ掛かつたりしたら相手は付け上がるに決まっている。それは過去に嫌というくらい経験したではないか。その時は頼もしい助けがあったが、此処ではそれは望めない。自分で何とかするしかない。

そんな私を見て奴は更に笑みを深くした。外見上甘い甘い……甘すぎて吐きそうなくらい甘あい笑み、だが私にはドス黒いとしか思えない笑みを万遍に浮かべる。

うおおおお、やめる、チキン肌ががががああ。

「俺も実習なんだけど暇で暇で。一緒に良い？」

え？ やだよ？

それを口にせずとも思い切り引き攣る私の口角。取り繕えてない事は自覚している。表情筋がもう限界だと悲鳴を上げているのだ。だから、だからね？ 言いたい事、解るよね？…………おい、小首なんか傾げて二口二口顔で返事を待つな。敢えて空気読まないとかしなくて良いから。

チラリと背後にいるキリュウを見ると拒絶のオーラを発している。

援護射撃を要請しようと思つたのだが、そういうやこれは私が<sup>ま</sup>時いた種であつた。……同士、私、頑張るよ。自分の尻は自分で拭うよ。  
……自信は欠片もないけれども。

私は意を決して負け戦に挑んだ。

「……あー、連れも何だか嫌そうなので他当たつて下さい?」

連れ『も』と言う事で、私も嫌だという事を遠まわしに告げる。何故か疑問形になつただとか、残り少ない気力を掻き集めて作った笑顔が相手には笑顔に見えていないだろう事とか、結局キリュウも巻き込む体制に持ち込んでいる事だとかはもう目を瞑つて欲しい。これが私の勇姿だ。

そんな私の言葉を聞いた彼は徐おもむりにキリュウへと視線を移した。相手の意識が相棒へ移つたことに心中で盛大にガツツポーズを取る。頑張れ、運命共同体。

「そつかな? そんなことないよね、キリュウ  
「消える」

……ちよつ、今なんつた?

驚きに目を見開いたまま私は2人を交互に見る。

相変わらず黒い微笑みを浮かべたドス黒天使と射殺さんとばかりの鋭い視線を投げ付けるキリュウが対峙している。ホントに両極端だな——じゃなくて。

……何、キミら知り合いなの?

〇三六 横反する印と黒（後書き）

誤字・脱字などあれば報告して下さる有難いです

(、・・、)

本日もどうぞ宜しくお願ひ致します。

奴はキリュウの名前を知っていた。そしてキリュウもそれに対しても驚いた様子を見せなかつた。

つまり、それが意味する事は……。

「…………えーっと、キリュウ、こんな事いうのも何なんだけどね?…  
…………友人は選んだ方がい　　」

「赤の他人だ」

私が今まで言う前にキリュウは簡潔且つ絶対的な拒絶の言葉を以つてして私の話をぶつた切つてきた。だよね、お姉さん安心したよ。も

「他人だなんてヒドイなあ。俺とキリュウの仲なのに」

キリュウの反応にフフッと笑いを零しながらそう不満を零すドス黒天使。キリュウはといふと、私が今まで見てきた中で一番というくらいの深くシワを眉間に刻んでいる。……どうやらドス黒天使の片想いらしい。

しかし関係はどうあれ互いに顔見知りという事は変わらない。まあキリュウの方は様子を見る限り不本意だとは思うけれども。

「俺はホヅミ。ねえ、名前何ていうの?」

ひいつ。

色々思考を飛ばしていたらドス黒天使がいきなりひょいと私の顔を覗き込んで名前を尋ねて來た。何やら自分の名前を名乗つてい

た様な気がするが……うん、聞かなかつたことにしよう。以前なんて呼んでしまつたら一気に奴との距離が短くなつてしまつ。それは回避しなければならない。

まあそれは置いておくとして、現在後ろへ下がりたいのだがすぐ背後にはキリュウがいるので叶わない。早く下がれよとばかりに必死に背中でグイグイとキリュウを押しまくる。するとすぐに意思を察してくれた彼がずれてくれたのでドス黒天使と少し距離を取ることに成功した。

そんな私とキリュウの様子を何やら楽しそうに眺めながら「一ミリ」「と返答を待つドス黒天使。……とても名乗りたくない。一ミリたりとも奴との距離を縮めたくはないのだ。

「……スズキです」

……気が付けばそう答えていた。

無意識下とはいえサラリと偽名を名乗つてしまつたが罪悪感は微塵もない。だつて心底呼ばれたくない。

「ふーん? スズキちゃん、ね」

ドス黒天使は意味深にそう呟きながら笑顔を浮かべた。それは、一応黒さを隠しているそぶりの見えた今までの笑みとは違い、黒さを惜し気なく前面に押し出したようなそれだ。……全身にチキン肌が立つた。やめてくれ。そろそろ私、チキンビニカル河豚にでもなるのではなかろうか。

彼は目を細めて更に続ける。

「嘘だつたら

「スズキ改めヒイラギと申します」

私はドス黒天使の言葉を遮つてハキハキとした声で訂正を入れた。あの続きを絶対聞いてはいけない気がしたのだ。名前は止むを得ず晒してしまったがこれが最善策であつた。その証拠にドス黒天使が小さく舌打ちをするのが聞こえた。……危ねえ。

ふう、と安堵の溜め息を吐いていると奴は暫し思案した後、にっこり笑つて口を開いた。

「んじゃ、ひいちゃんね」

「……は？」

思わず間抜け面で固まる私。

「イツは今、何と……？」

「ひいちゃん」

私の心を見透かしたようにもつ一度繰り返す目の前の男。何だ、コイツも読心術スキルを取得済みなのか？…………いやいや、今はそんなことどうだつて良い。

呼び捨てを通り越していきなりあだ名だと？  
そんなフレンドリーな間柄になつた覚えはない。

「……いや、ヒイラギですが」

「うん、だからひいちゃん」

「……ヒイ」

「ひいちゃん」

「…………」

そうはさせると何度も訂正するが、奴は直す気は更々ないらしい。二二二と黒く微笑みながら尽く被せられてしまった。

いや、聞けよ。お前、ホント聞けよ。耳が腐っているのなら

一つも付いているその目で私の顔をよく見てみる。きっと物凄く嫌そうな顔をしているはずだ。

後ろを肩越しに振り向くと、キリュウはドス黒天使に向けていた視線を一瞬私の方に移したが、また奴を睨みつける作業に戻つた。……それはあれですか。諦めろという事でしょうか。

キリュウからの援護は望めないと踏んだ私は、油の切れたオモチヤの様な動作でギギギと首を捩つて視線をドス黒天使に戻した。

「まあそつ睨まないでよ」

そう言いつつも終始「口」「口」と黒い微笑みを浮かべているコイツは本当に良い性格をしている。

私がその胡散臭気な様子を半田で見ていると、彼は「あちやー」と咳きながら空を仰ぎ、片手で頭をワシワシ搔きだした。今度は何だ。

「…………見つかったかな？」

ボソリとそう零す。

その言葉に首を捻つていると彼は「もう少し話してたかったんだけどなあ」と咳きながら頭を搔いていた腕を今度は横に拵つた。

「 ッ

眩しつ！

私は咄嗟に手を翳<sup>かざ</sup>して眩い光から目を庇つた。  
目を細めて見てみると、彼が手を翳した先にポツカリと縦2メートル程の穴が空き、そこから強い光が漏れ出ている。  
……何だあれ。

「今日は帰るね。また今度」

奴はこの強い光に慣れているようで目を庇うそぶりも見せないまま、そう言い残して光の中に足を踏み入れていった。奴の身体がどんどん光に飲まれ、入りきつたという所で一層光が強くなつた。耐え切れなくなり、思わず目を瞑る。

光が収まつた後、チカチカする目を擦つてもう一度目の前を見た。

「……いない」

ドス黒天使は消えていた。あれだけ散らばつた羽根も見当たらぬい。

キリュウを見ると渋い顔をして何やら考えている様子だった。

「あのドス黒、また今度とか言つていたな。

……。

——断固拒否する。

誤字・脱字などあれば報告して下さる有難いです

（ 、 、 、 、 ）

本日もどうぞ宜しくお願ひ致します。

超大型の台風が去った後、私とキリュウは暫し無言のまま微動だにしなかった。……ああ、空気が美味しい。凄く美味しい。あのドス黒は空気まで濁させていたのだな。歩く災害か公害か……どちらにせよ悪影響を与える存在には変わりない。

「……あのドスグ……げふんげふん。……パーツは天使っぽい人、キリュウとどういう関係？」

……いかん、思わずドス黒と言いかけてしまった。まだ奴とキュウとの関係性が分からぬ今、いかにアレといつても謗るような言い方は避けた方が良いだろう。パーツは天使っぽい人、という言い回しが適しているのかどうかときかれれば悩む所ではあるが。

まあそれはともかく、私は落ち着いた所で先程から一番気になっていた事をキリュウに尋ねた。……そう口に出した所で、何やら浮気現場を目撃した彼女が彼氏を問い合わせているような感じになつている事に気が付いたが、まあ気にしないでおこう。

その質問を聞いた彼は眉を潜めて珍しくも露骨に嫌そうな顔をした。奴について極力触れたくないらしい。……いや、気持ちは物凄く分かる。しかし、奴がまたこちらと接触する事を仄めかした以上、相手の事を知つておいた方が良い。敵を知る事は大切なのだ。作戦だつて立てやすくなる。出来れば私だつてこの話に触れたくないが対策を練つておきたいのだ。余裕など皆無である。

さあ吐けとばかりに彼をジーッ見ていると観念したのか、彼は溜め息を一つ吐き出してゆつくりと口を開いた。

「……以前、いきなり現れて攻撃を仕掛けられた事がある」

「え。 それだけ？」

私が思わず訝しげな視線を向けているとキリュウは続けて補足説明をしてくれた。

「奴とは過去に一度戦った事がある……それだけだ。名前も先程初めて知った」

知りたくもなかつたがな、と付け足して呟く彼に嘘をついている様子は見られない。

……え、マジか。それだけであのドス黒は堂々と友達気取りをしていたのか。キリュウの話からすると恐らくそれは只の敵同士ではないのか……いや、どう考へても間柄はそれで正解だろ？

どういった思考でそのような答えを導き出せるのだろうか、……

……奴の思考回路はかなり混線しているようだ。一度その頭をかち割つて回線を繋ぎ直してもらえば良いと思つ。いや、寧ろ中身」と取り替えるても良いだろ？ 手間も省けるし。一昔前のアンテナが頭から生えてくる「いつづりブラウン管テレビよりしく衝撃を与えるべきのか？石……いや、温<sup>ぬる</sup>いな。奴にぶつけるなら岩くらい質量がないと駄目か。

「……お前はいらしかつたな」

「ん？」

奴の理解不能な頭の構造についてあれこれ考えているとキリュウが話し掛けてきた。私らしいとは何だろ？ 私は頭に疑問符を浮かべる。

「いつもなら軽く往なすだらう」

「あー……」

キリュウが言っているのはいつも黒学の生徒達は軽く往なしてい  
るのに何故今回はそうしなかったのかという事であろう。

確かに彼らには初実習の日から今日まで、魅惑の力を使われたり、  
クサい台詞やナンパな台詞、キザな台詞と様々なパターンのものを  
投げ付けられたりされたが全て3倍返しで返り討ちにしてきた。そ  
の私が今回、返り討ちの『か』の字も出せなかつたのだ。キリュウ  
が不思議に感じても仕方のない事だろう。

私は少し思案した後、口を開いた。

「明確な目的のない奴は対処に困る」

「……目的？」

「うん。黒学の生徒はキリュウ関係でしょ。どいつもこいつも私が  
パートナーだからっていう嫉妬」

そうなのだ。わんこ信者共はどういつもこいつもキリュウ大好きっ  
子なのである。パートナーだからといつだけの理由で何度も噛み付か  
れた事か。まあ成績の足を引っ張っているからという理由もあるよ  
うだが……これは合意の上なので口出しされる謂ではない。嫉妬な  
ど以つての外だ。

よつて私は噛み付いて来るわんこ共を心置きなく言葉や実力行使  
で黙らせる事が出来るのである。

「……でもあのドス黒は違う。ちょっとかい出される理由が分からな  
い……愉快犯的なものなのかな。そういうタイプはどう対処すれば  
良いか分からなくなる」

二人の間柄が敵だと分かつたので私はもう気にせず奴の事をドス

黒と口にする私。名前など最初から呼ぶつもつもないこれで十分だ。

「あいつ程ではないけど地球で同じようなタイプの奴に絡まれた事があつてね。あれは本気で参ったよ。……まあ助けてくれる人がいたから良かつたけど」

そう、いたのだ。そんなツワモノが。

その助けてくれていた人というのは——私の双子の片割れである姉である。

私がそういう輩に絡まれば、何処からともなく駆け付け、いつも助けてくれていた。今思えば彼女はかなり強かつたと思う。うん、何ていうかアレだ……中身がタチバナさんと相通する所があるので。それだけで察して欲しい。

実は離れてしまつた今でも私は彼女と夢の中ではしばしば面会している。

双子の為せる技のかどうかはよく分からぬ。面会といつても逢瀬といつたようなものではなく、彼女との小さい頃の思い出やらを夢で見るのである。またまた変なものもあるが。……彼女が殿で私が姫の時は本当にどうしようかと。

まあどんな内容であれ、週に2、3回は彼女と一緒にいる夢を見る。彼女と離されてしまった今、会わなくとも大丈夫と言えば嘘になるがそこまで寂しくはない。それはその夢のお陰であろう。元々寝るのは好きだったが、こちらに来てからは彼女の夢が見られるという事で益々好きになつたのだ。

……おっと、段々話が逸れてしまった。

「あと、基本的にタラシは拒絶反応が出る」

思考を戻し、私は先程のものへ付け足した。

これの良い例が鼻血垂れである。あいつはヘタレだから力技でいかせてもらつたが。所詮鼻血垂れだしあんなものであらう。

……まあそれはともかく、今まで挙げてきた苦手なタイプを全部まとめて兼ね備えているのがあのドス黒天使という訳だ。本当に相性が悪過ぎる。私にとつてラスボスもいい所だ。

「……お前を助けていたという奴は？」

思い出して顔を顰しかめているとキリュウが興味深そうに聞いてきた。  
彼が他人に興味を持つなんて珍しいなと思いつつ答える。

「姉だよ」

「……姉？ 兄弟がいるのか」

その言葉にキヨトンとする私。あれ？ 言つてなかつたつけ？

例のキマイラ事件の時に私は彼に地球の事から始まり、現在に至る経緯の全てを話したつもりだったが姉について伝え損ねていたようだ。

この調子じゃ伝え損ねている事がまだありそうだが……そもそも何を伝えられていなかがが分からぬ。まあ発覚したらその時に説明すれば良いだろう。

私は取り敢えず今のキリュウの疑問に答える事にした。

「いるよ。私の片割れの姉」

「……双子か？」

「うん。依都いとつていうの

「…………いとつ」

「そそ、柊依都」

「そう私が答えると、キリュウは少し思案する様子を見せた後、「いと……」と私の姉の名前をもう一度咳き、難しい顔をして何か考え込んでいる。……何だ? うちの姉の名前がどうかしたのだろうか?

「……糸ラーメンではなかつたのか」

「ん? 何て?」

「……いや、何でもない」

声が小さ過ぎてうまく聞き取れなかつた。何? ラーメン? まさかラーメンか? ラーメンがどうした?

やけにスッキリ顔で一人納得しているキリュウの様子に私は首を傾げる。

彼の中で何が解決したのだろうか。

先程の話を整理するとキーワードは恐らく『依都』、そして『ラーメン』……。

……。

考えた結果、僅か5秒で迷宮入りが確定した。  
我ながら正しい判断だと思つ。

038 人生至上最強な天敵（後書き）

誤字・脱字などあれば報告して下さると有難いです

（ 、 、 、 、 ）

039 小言対専用秘技（前書き）

本日もごんづか宜しくお願ひ致します。

茜色に染まつた空。夕日が少しづつ沈んでその姿を隠し、その度につつすらと闇が広がっていく。その反対側からは地球のものと比べると明らかにサイズが大きな用うしきものがひょっこり顔を覗かせている……今日も静かな夜が皆の元へ平等に訪れるようだ。

燐々と強い日差しが降り注ぐ昼間も暑いが、夕日がじわじわと照り付ける夕方だって昼よりマシとはいえども十二分に暑い。

——なのに「イツらときたら……。

「……暑苦しい」

思わずそう声に出してしまつ程には私に影響を及ぼしているその光景。

現在私達はクリスタルゲートの前にいる。終了時間になると全員此処で待機するのが決まりなのだ。終了時間目前の今、この場所は人口密度が恐ろしく高い。

半目で辺りを見渡せば、視界に入り込んでくる黒、黒、黒、黒。

……まあそれは良いとしよう。髪やら肌やらは生まれついたものだし私がとやかく言う権限はない。言えばそれは人種差別以外の何物でもないのだから。

——だがしかし、ブレザーは我慢ならない。しかも色は黒。クソ暑いのだから半袖でもっと涼しそうな色にして欲しい。お前らは良いかもしれないがこちらは視覚的に暑すぎる。何これ、もうあれだけよね、嫌がらせ決定だよね…………とか思つているのは私だけなのか? なあ、どうなんだ?

ブレザー姿の奴らに囲まれているといふのに嫌な顔一つせずに、

寧ろ嬉しそうな表情すら浮かべてこむとはビックリした。見た。

彼らはこの暑さでやられてしまったのだろうか。それとも感覚痺痺にでもなっているのだろうか。はたまたフェロモンにやられたのだろうか。…………十中八九フェロモンだろうな。皆揃つて目がハートだし。早く慣れるよ————  と言いたい所だが未だに吐き気を抑えられない私も人の事は強く言えない。

ほん、と私の頭に置かれているキリュウの手。フエロモンが噎せ返りそうなくらい充満するこの場所で、現在吐き気を催す事もなく、こんなにも余裕で周囲を観察出来てるのはこの魔法の手のおかげだ。いやはや、いつもお世話になつております。有り難や有り難や

「...キリュウ」

少し咎めるようにそう呟く私。  
頭からスルリと手が滑り、また定位置に戻るのを何度も繰り返していく。……何故か乗せたその手が時折私の髪を撫でるのだ。私はわんこでもにゃんこでもない。

やめてくれないかと斜め上に視線を送るが一向に応えてはくれない。汗をかいてベトベトなそれをおまり触らないで頂きたい。それにまら、そんなことをするとまた面倒臭い事が――

「またアイツ……ツ」

「キリュウ様が汚れる……ツ」

ボソボソとそいから聞こえる悪口雑言。あつじんかくざうごんその予想通りの事態に溜め息が零れた。

そう、面倒臭い事とは勿論わんこ信者共の嫉妬による副産物だ。幾つもの視線がチクチクと私を刺していく。しかし原因はお前達だ。この状態が嫌ならフェロモンを引っ込めてくれれば良いだけである。

わんこ信者共はキリュウが私の頭に手を置いている理由を知らない。いい加減気づけと言いたい所だがキリュウに待つたを掛けられた。彼曰く「弱点を懲り教えるな」と。まあ確かにそうなのだけれどもキヤンキヤン吠えられて噛み付かれる度に対処するのが面倒臭くなってきた訳で……。

驚くことに、いつもいつの間に仕掛けるのか、教科書にカッターというものはや廃盤並な嫌がらせがあるのだ。初めこそ感動すらしたが、そのカッターが異様に丁寧にペツタリと隙間なく貼付けてあるので処理が物凄く面倒臭い。最近ではカッターの刃廃棄箱なるものまで教室の隅に設置され、それが溢れ返っている始末だ。まあ教職員が流用して「ヨミにはなつていらないようだが。……いや、流用ではないな。本来の用途に戻つただけだ。決して教科書にせつせと貼り付けるものではない。そういうえば昨日箱に入れたとき大分溜まつてきていたし、そろそろ回収の頃合いかもしない……じゃなくて。私はもう一度ぐるりと彼らを見渡した。……暑い。やはり暑い。」この際今回の嫉妬の副産物は見逃してやろう。だからその暑つ苦しいブレザーを脱げ。今すぐ、直ちに、迅速に。見本はうちの番犬だ。

隣に立つ優秀な彼の出で立ちはブレザーを脱ぎ、下に着ていた長袖のシャツを腕まくりしている。色は同じ黒だが、これだけでも与える印象が全く違う。視覚的に涼しいのだ。体感温度が5度くらいは下がっているかと思う。エコだろう、涼しいだろう。だからほら、テメエらも見習つて……おい、何故そんな恍惚とした真っ赤な顔でキリュウを見ているんだ?ちょっと薄着になつて腕を捲つだけだらうが。

……それだけでも色気が垂れ流しか……恐るべし。キリュウの天然フェロモン恐るべし。

「ヒイラギ、キリュウさん

清涼計画とキリュウの色氣について悶々と考えていると、後ろから声を掛けられた。振り返るとサカキと鼻血垂れが視界に入る。

「サカキ、お疲れ  
「お疲れ様」

私の言葉にサカキが返す。鼻血垂れに言わるのはデフォルトだ。必要性を全く感じない。

奴は「お疲れ様です、キリュウ様」とキリュウにだけお辞儀付きで労いの言葉を掛けて……って、ちょ、おま——

「……お前、やれば出来る子だったんだな  
「は？」

「清涼感溢れてる

私は鼻血垂れをまじまじと見た。

ブレザーを脱ぎ、下の長袖シャツを肘まで捲っている。私の中の鼻血垂れ好感度が10程上がった。上限は1000だけれども。私に見られている鼻血垂れは「あ……ああ」と言いながら何故か少し怯えている。

「私が頼んだのよ。見てるだけで暑くて」

それを聞いてまた好感度が8程下がった。何だ、サカキの仕業だつたか。

奴の怯えは多分サカキが原因だろう。頼んだと彼女は言つたが実際どのような面白い頼み方を……ああ、肩をやられたか。視界の隅に肩を押さえる鼻血垂れが映り納得する。

私は次に彼女へ視線を遣つた。彼女は他の生徒とは違い、まだほんのり頬が染まりはするものの、もう目がハートになるまで墮ちる

事はない。優秀なのだろう。

そんな彼女も私と同じようゴブレザー集団を暑苦しく思つてはいるらしく、出来るだけ周りを見ないようにしていいのだ。普通考えれば暑苦しいよね、うん。安心した。

「……で、今回は狩れたの？」

同じ考えの仲間に会えて嬉しく思つていたのにその一言で嬉しさが半減してしまった。……またサカキさんの小言が始まると。私はそろそろと彼女から視線を外す。

ドス黒が帰つた後、ヒロミさんの親を探し出して帰してあげた。結構離れた場所にいたので少し手間取つたが無事終了だ。因みに親は普通の鶏で少しガツカリした。その一方、勿論課題は失敗である。彼女は私の態度でそれが分かつたのだろう。彼女が眉間に皺を寄せて口を開きかけた瞬間、それはさせまいと私は行動を起こした。

「どういへ  
「きやつ！？」

何時ぞやの私とは違い、奇襲に対しても可愛らしい声を上げるサカキ。どうやら彼女は少数派のようだ。相変わらず期待を裏切らないな、この子は。

私はサカキの腕を引っ張つてキリュウへと放り投げた。普段は怪力な彼女だが、不意打ちには敵うまい。

思惑通り、彼女はぼすんとキリュウにぶつかつた。避けはしないが受け止めもしないキリュウ。……おこ、そこはちゃんとしつかり受け止めろよ。

筋違ひな非難する視線をキリュウへと向ける私。

「あ、こめんなさ

」

振り返り、そこまで言つた所で見る見るうちに顔が赤くなつてい  
く。彼女の目の前には程よく筋肉の付いた胸板、視線を上げれば超  
絶美形の顔が待ち構えているのだ。

### 秘技、天然フェロモン。

サカキはキリュウから物凄い勢いで距離を取り、ゆでだこ茹蛸になつて固  
まつた。これで今日のところは小言を聞かなくとも済むだろう。  
彼女の心臓には負担が掛かるかもしれないが、私は今日物凄く疲  
れてしまった。あのドス黒のせいで神経をぞりぞりと磨り減らされ  
たのだ。これ以上は勘弁して頂きたい。

軽く眉根を寄せてこちらを見ているキリュウに「グッジョブ！」  
と良い笑顔でサムズアップをし、未だに茹蛸状態のサカキを見た。  
……ふむ、この技、使えるな。

動けない彼女をそのままに、いつの間にやら壇上に立っていた教  
師の挨拶を聞き流して本日の実習を終了した。

039 小言対専用秘技（後書き）

誤字・脱字などあれば報告して下さると有難いです  
（ 、 、 、 、 ）

本日もよろしく宜しくお願ひ致します。

今日の夕飯は私の故郷、地球に存在する国の一つである中国のアレ、超豪華なアレ、料理の数が無駄に多いアレ——そう、満漢全席だ。

まさかこのような皇帝気分を味わえるとは……幸せ過ぎる。席に着いて「頂きます」と手を合わせてから逸る気持ちを抑え、いそいそと口へ放り込み、まぐまぐと噛み締めた。……う、ウマシッ。

一度口に運ぶと後は止まらない。私は忙せわしく箸を運び続け、次々と目の前のウマシな中華料理モドキを胃の中へ収めていった。

しかしこのようなハンパない数の手が込んだ料理を一皿、しかもたつた一人でよくぞ仕上げられるものだ。そしてこのお洒落な大量の皿達は何処にあったのだろうか。どれも見た事がない。あと確かにコソロは2つしかなかつたハズだが……いや、考えるのはよう。あれこれ考えると折角の料理を思い切り味わえない。これを作ったのはタチバナさんだ。それだけで答えはもう十分ではないか。さくさくと標的を平らげ、目の前に陳列する皿はもう殆ど空になつてゐる。料理の数こそ多いが20分の1スケールなので腹に丁度納まる量なのだ。

「よいよ私はシメのデザート、杏仁豆腐にスプーンを差し込んだ。……口に入れた瞬間とろりふわりと消えてしまうこの纖細さ。ヤバイ、美味しい。私の中の杏仁豆腐に対する認識が革命を起こした瞬間であつた。幸せ過ぎて死にそうだ。死なないけど。

「御馳走様でしたっ！」

「いえいえー、お粗末さまー」

パンツと勢いよく手を合わせて感謝の言葉を口にする。「うふふー幸せそうな顔ー、作りがいあるー」と、にこにこ顔で零しながら食後のミルクティーを優雅に飲むタチバナさん。いや、もう、はい、今私は世界一の幸せ者だと豪語しますよ。

お蔭様で今日の憂いも疲れも全て吹っ飛んでしまった。私は案外単純なのかもしない。

「今日は実験どうだったー？」

幸せオーラ全開で満腹になつた腹をすりすり摩つて「う」と力チャリとカツプを置いたタチバナさんが話しつけてきた。毎日恒例のご報告である。

本日の報告の田玉は勿論ドス黒についてである。もう口にするのも嫌なのだがタチバナさんならば打開策を思い付いて教えてくれるかもしれない。私は眉間に皺を寄せながらも口を開いた。

「天使……中身が半端なくドス黒い天使に会つたつス

「天使なのにドス黒いのー？」

「うーん、纏つ空気が禍々しいというか……確かに名前はホヅミとか何とか」

拒絶反応を起こす輩の名前を口にしてしまつたせいで嫌悪感そのまま表情に現れてしまつた。苦虫を噛み潰したような顔になつているだろうが止めようがない。その様子を見たタチバナさんはふむ、と少し考える素振りを見せてもつ一度口を開いた。

「その子もしかしたら噂の問題児君かもー」

「噂の……問題児？」

「そそー、風の便りによると天使の領域内で問題になつてゐるらしい。気を付けてねー。ござとなつたらキリュウ君を盾にすると良い

と思ひー

風の便りつてこの隔離された状態でどうやって仕入れた情報だろ  
うかとか気にしたら負けだ。タチバナさんだし。

アドバイスはキリュウを盾にしろという事だが……うん、候補と  
して考えておこう。制御が掛かっている私とは違い、彼ならばそん  
な簡単にくたばないはずだ。

うんうんと納得していると「ちょっと待つてー」と言い残し、  
タチバナさんが奥に引っ込んでいった。何だ何だと待つていると幾  
分もしないうちに彼女は何かを手にして戻ってくる。

「ただいま。はーい」

ビーナーと彼女が手にしていた物を差し出してきたので「ありが  
とうございまー」と条件反射で応えて受け取る。何だ?

そつと手の中の物を見てみると、そこには纖細な模様（まいじやう）が施してあ  
る金の土台に青い石がぽつぽつと散りばめられた少し湾曲した橢円  
形の物があった。

これは――

「……バレッタ？」

「そそー、暑いでしょー? 作つたからヒイラギにプレゼントー」

何と、手作りでしたか。もう一度手の中のバレッタを見る。土台  
は縁の中にクネクネと蔓と葉を描くように金属を曲げて接着してあ  
り、そこへ小さな青い石が絶妙な位置に嵌め込まれ実のように見せ  
ているようだった。部屋の光を反射し、キラキラと光つてとても綺  
麗だ。

最近暑くて髪をどうにかしたいと思っていたので大変有り難い。  
……しかし残念ながら私はこれを使うことは出来ない。

「嬉しいっス。でもこれは私……」「うん、髪に止まりにくいんだよねー。知ってるー」

言い淀む私が何を言いたいのか分かったタチバナさんが代弁した。そう、私の髪はこういったものと相性最悪なのだ。止めた矢先からズルズルと落ちていつてしまつ。上手く止められたとしても10メートルも歩かないうちに落下してしまうという厄介な髪なのだ。だから私は何もせずにそのままこのナチュラルスタイルが基本なのである。もれなくアクセントに寝癖も付いているが。

「ヒイラギの髪質でも外れないようにしてあるからー。大丈夫ー」「マジっスか」

それは凄い。今までどれを使つても一向に良い結果を出さなかつたものだから諦めていたというのに……流石はタチバナさんだ。驚く私ににこりと笑い、更に続ける。

「滑らないようにしたし軽いから頭の負担も軽減ー。そのくせ頑丈ー。象が乗つてもだいじょーぶー」

どこの筆箱ですか。

しかしこの人は本当に規格外過ぎる……開拓者タチバナは今日も絶好調のようだ。

「ありがとうございます」「いいえー。あ、私明日から二日程家空けるねー」「了解っス」

今思い出したかのように付け足されるタチバナさんのその言葉に

慣れた感じで返事を返す私。彼女は時々こうして家を空ける事があるので戸惑いといったものはないのだ。いつもながらに連絡が突然だが、これはもう諦めるしかない。

「一応戸締まりはしつかりねー。お留守番よろしくー」

『一応』といつのは結界がある前提だからだ。我が第一の家に泥棒は有り得ない。

一応の注意を促す彼女に「うつス」と返事を返しながら家をぐるりと見回す。私は泥棒なんかより心配する重要事項があるのだ。

今までの経験から考へると、三日後には大量のお土産がこの家を占拠する。私はギッシリと物に囲まれたこの部屋を見渡した。……今度は何処に収納しようか。

案の定「お土産何にしようかなー」と不穏な台詞を暢氣に呟くタチバナさん。

それに反し、私は食後のお茶で喉を潤しながら頭をフル回転させ、スペース確保が可能な場所を探すのであった。

誤字・脱字などあれば報告して下されると有難いです

(、・・、)

本日もどうぞ宜しくお願ひ致します。

「……凄え」

いつも通りギリギリまで惰眠を貪り、朝食を食べ、身支度を整え終えた私は今、鏡の前で一人感動している。

目の前に映る鏡の中の自分はいつもの寝癖全開ボサボサ頭ではない。自由奔放に跳ねていた髪は後ろに一まとめに留められてスッキリとしている。早速昨日タチバナさんから頂いたバレッタを使ってみたのだ。

市販品のものでは直ぐにズルズルと落ちてしまうそれは、跳んでも跳ねても一向にずれる気配を見せない。しかもタチバナさんが言っていた様に、かなり軽いので頭皮が引っ張られて痛むという事態にも陥らない……素晴らしい代物である。

最近本当に暑くて髪をどうにかしなければと考えていた所なので物凄く助かった。後ろ髪を上げるだけだが、下ろしている時と比べるとかなり涼しい。

……つと、いかんいかん。いつまでもやつていると遅刻してしまう。

「行つて来ます！」  
「はーい、行つてらっしゃーい」

元気にタチバナさんと挨拶を交わし、家を後にする。

一步、二歩、三歩、四歩。どんどん進んでいくが……ズれない。足をいくら運んでもズれない。スキップなんてものもしてみるが……やはりズれない。

「ふへへつ」

私は嬉しさのあまり、奇妙な声を発しながら足取り軽く学校へ向かつた。

「ヒイラギ、どうしたのそれ？」

「ふへへ、タチバナさんに貰った」

「良かつたじやない！へえ、綺麗なバレッタね」

「ふへへ」

いつまでも「ふへへ」と奇妙な笑い方をする私に「嬉しいのは分かるけど、その笑い方、気味が悪いわよ」と続けるサカキ。細かい事は気にするな。良いじゃないか、嬉しいのだから。放つて置いておくれ。

現在、私たちはクリスタルゲートの前にいる。昨日に引き続き、今日も実習なのだ。多分またレベルEの狩魂なので今回はどんなもふもふなのだろうかという楽しみも相乗し、私は今とても気分が良い。例え周りに暑苦しい黒色ブレザー着用集団が犇めいていて視覚的に体温度が上昇しそうが、むせ返るフェロモンのせいで頭いつもお馴染みの手が置かれていようが、それに伴って陰口をバジバシ叩かれようが軽く見逃せるくらいには気分が良い。私の今の心の広さは太平洋並だ。是非とも菩薩ぼさつと呼んでくれ。

——しかしそんな私でも一つだけ気になる視線があった。

「……」

「……あー……キリュウ？」

「……」

何なんだ。

プスプスと視線が突き刺さり、気になつて後ろを振り向く。すると何処か不機嫌そうなキリュウと目が合つた。え、何故に不機嫌。話しあげた私に反応を返すことなく今度は私の前髪を頭に置いていた手で拾つてサラリと梳き、そして若干目を細めて不機嫌の意を表す彼。……いや、だから何故。

意味が分からないと首を傾げる私を幾分か見た彼は徐に私の後頭部に手を伸ばし——バレッタを外した。

「？」

力チリとバレッタが外れる音と共にまとめられていた髪がサラリと零れる。自分では確認することは叶わないが寝癖だらけの髪の毛はあちこち跳ねてさぞ個性的なヘアスタイルになつているだろう。キリュウが起こしたその突然の行動にポカーンと間抜け面を晒す私。そんな様子の私を気にすることもなく彼は大惨事の私の髪を手で梳していく……いや、手で梳いたくらいじゃ直りませんよ、それ直らなくてイライラするのではないかと思ったのだが、幾分か彼の眉間の皺が減つた気がする……と思えばまた刻まれた。意味が分からぬ。

よく彼を観察するとバレッタをジッと見つめているようだつた。

暑いし早く返してくれないかなと思つていたら、何故か彼は小さく舌打ちをして私の髪を手早くまとめ上げ、パチリと元の位置に留めた。……どうでもいいが器用だな。あちこち跳ねる自己主張の激しい髪に私は結構手間取つたというのに……何とも言い知れぬ敗北感を味わつてしまつた。もう何なのこの子は。一体全体何がしたいんだ。

彼は無言のままぽふつと再度私の頭に手を置くが、不機嫌な様子

は変わつていない。そして視線はまだバレッタに釘付けになつて……

釘付け…………はつ。まさか。

「……欲しいならタチバナさんに頼んであげ  
「いらん」

言い終わる前にスパツと告げられた。何だよ、遠慮すんなよ。パ  
ートナーな仲じゃないか。まあキリュウがバレッタを付けてもアレ  
だけどひ。

私は口を尖らせ不満一杯な様子のまま、そういうやサカキはどうし  
たと彼女に向き直る。私と目が合つた彼女は頬を染めて一度視線を  
外し、次いでこちらをチラリチラリと伺うように見るといつ謎の行  
動を取つてきた。……おい、お前もどうしたよ。

サッパリ訳が分からず顔を顰める私に彼女は怖ず怖ずと口を開いた。

「……あつ、えーと……あのつ、わつ、私、お邪魔よね？」

何が？

そう問う前に彼女は「ご、ごめんねつ！」と勝手に一人盛り上が  
つた様子で何処かへ駆けていった。いや、え？ 何？ え？

不本意だが、今まで私の中で空氣君と化していた鼻血垂れを説明  
求めて見てみるが、同じく少し頬を染めてサカキの後を追つて行つ  
た。お前が頬を染めても全く以つて可愛くない…………じゃなくて、  
ちゃんと説明してから消えろよ。

「……？」

今気が付いたが周囲も不自然な感じにザワザワとしている気がす

る。不審に思い、ぐるりと周りを見渡せば、黒学の生徒からレーザービームが繰り出されそうなくらい剣呑な目が一斉に私へと向かっていた。

——だから、何なんだ。

誤字・脱字などあれば報告して下さると有難いです

（ 、 、 、 、 ）

042 愚鈍な選択（前書き）

本日もよろしく宜しくお願ひ致します。

「おはようございます。皆さん昨日はお疲れ様でした。連日になり、大変かと思いますが今日から　」

「……はあ」

教師の言葉をさらりと聞き流しながら私は溜め息をついていた。結局、皆の態度の訳が分からぬまま、もやもやの状態を強いられているのである。

何処かへ行つてしまつたサカキを探して問い合わせたいところだが、今移動するわけにはいかない。よりによつて今壇上で喋つているのはイズミ先生だからだ。彼女は現在、凛とした声で淡々と言葉を紡いでいる。美人でクールな彼女は生徒達の人気者だが、怒ると怖い。前にも言つたがとっても怖い。実習でキリュウを巻き込みながら最下位を維持している私に目を光らせている彼女。少しでも問題を起こせば直ぐさま呼び出しを喰らつてしまうかも知れない。そしてお決まりの言葉を掛けられるのだ。「何故狩らないの?」と。そしてそれに對して私もお決まりの言葉を彼女に返すのだ。「私にEランクは無理です」と。勿論ここで言うEランクとはもふもふの事を指すのだが、彼女は実力的なものと取つてゐるかもしれない。

しかし私は敢えてその誤解を解こうとはしない。解いた所で説教を免れられるとは思えないからだ。寧ろ説教時間が長くなる気がしてならない。そんなものは御免被る。

ならば、と私は隣を見上げて口を開いた。

「……さつきの周りの妙な反応は何?」

私が小声でそう尋ねたのはもう一人の当事者であるうキリュウだ。彼は未だバレッタに釘付けのようで、相変わらず眉間に皺を刻んだままいる。他人と比べると、その表情の変化はよく観察しないと分からぬ程僅かなものだが、普段表情変化が乏しい彼の表情筋は本日かなり酷使されていると思う。眉間に皺を寄せっぱなしとか地味にキツイ。筋肉痛にならないだろうか。表情筋の筋肉痛とか中々ないというか聞いたこともないけれども。……レアな体験おめでとう、キリュウ。

そんな明日には筋肉痛が心配されるキリュウはチラリと私に視線を遣つた後、僅かに考える素振りを見せ、一言言つた。

「……知らん」

いやいやいやいや、知ってるだろ。

思わずジト目になるのも仕方がない事だ。

私がそんな視線を遣つてているというのに彼はそれ以上答えまいと前を向いた。

粘り強さは私のほうが上だと思つていたのだが、どうやら勘違いだつたらしい……それからイズミ先生の話が終わるまでずっと見続けていたのに彼は口を開くことはなかつた。何故にそこまで頑ななんだ。意味が分からぬ。

身長差で見上げる形になる私はだんだん首が疲れてきた。<sup>さうそく</sup>それにこれ以上見ていても意味がない。そう判断するやいなや私は颯爽に諦めた。時間が経てば周りの反応なんてものはどうでも良くなつたし。

それより今から会えるもふもふに思いを馳せ、ウキウキしようじやないか。

私の切り替えは早く、そして潔い。<sup>こわきよ</sup> そう思った一分後には私の脳内をもふもふが占拠した。

「では、ゲートの方に進んで下さー」

今日はどんなもふもふに会えるのかなと内心わくわく、しかし外見は締まりのないただのアホ面になりながら考えていた所に掛かるイズミ先生の声。ようやく実習開始のようだ。

ぞろぞろと生徒達がクリスタルゲートへと進んでいく。私も例の邪魔にしかならない鎌をよっこいせと担いでキリュウと共に生徒達の流れに紛れようと足を動かした。

「キリュウ」

突然背後から声が掛かり、立ち止まるキリュウ。つられて私も足を止めた。……隣を見ると眉間に本日一番の深い皺を寄せている。

……あ、今この子舌打ちしちゃったよ。

何だ何だと振り返ると黒学の男性教師が3メートル程後ろに立っていた。彼を見て私は少し驚く――肌の色が白い。キリュウ以外で肌が白い悪魔は初めて見た……といつても色白という程までもないのだが。キリュウと比べると若干白さに劣るのだ。

そんな彼はセミロングの髪を後ろで一つ括りにし、少し気崩したスーツを身に纏っている……暑苦しい事に彼も長袖だ。今の季節が暑いと感じる私には気が知れない。

そして悪魔である彼ももれなく美形である。しかも外見年齢的に大人の色気がオプションで付いている。……サカキが騒ぎそうだ。

恐らく彼がキリュウを呼んだのだろうが…………ん? この人どうかで見たような……。

誰だつけ?と遠慮もなしに観察していたら彼とバッチリ目が合つてしまつた。その瞬間妙な色氣を振りまきながらニッコリと笑う彼。

……今これ絶対フェロモン垂れ流しだよね。頭に置かれた魔法の手

がなかつたら尋常でない吐き気が私を襲つていただろう。グッジョブ、キリュウ。私はもうあなたが手放せない……訂正、あなたの手が手放せない。

セーフセーフと背中に妙な汗を垂らしながら笑顔を返そと試みるが、多分失敗して大惨事になつてゐる。そんな私の様子に若干目を細める彼。失礼な私の態度に怒つたのかもしない。すみません、でもコレが頑張つた結果なのですよ。

彼は暫し私を見詰めた後、今度はキリュウに視線を合させた。  
「……」  
視線を外す直前、一瞬だけ睨まれたのは氣のせいじゃないな。うん。

「ちょっと話がある。来い」

「……」

キリュウはその言葉に答へず私を見下ろした。何だらう、聞かれたくないのだろうか。

私は周りを見渡し、残りの生徒が少ない事を確認した。ゲートまでも近い。これなら走つていけばフロロモンの餌食にはならないだろう。

「私、先行つてるよ」

「……………ああ」

かなり間を空けて返事が返つて來た。相当迷つたようである。しかし、キリュウがこういうのならやはり聞かれてくない話のようだ。私も聞かれてくない話を聞きたいわけではないし、ここはさつと離れよう。

「んじゃ後で」  
「ああ……直ぐ行く」

最後に頭を一撫でされ、キリュウの手がスルリと離れた。

それと同時に私はキリュウにひらひらと軽く手を振り、重い鎌を担ぎながら一人走つてクリスタルゲートへ飛び込んだ。

頑張つて走つた成果かフェロモンの餌食にはならなかつた。一向に吐き気は襲つてこない。

その事にホッとする……そう、私は暢氣にそんな些細な事で安心していたのだ。

走り去る私を後ろから心配そうな目でキリュウが見ていたことも知らずに。

そしてこの数分後、キリュウの危惧していた事が起こつてしまつ事も知らずに。

——私はこの時、重大な事を忘れていたのだ。

042 愚鈍な選択（後書き）

誤字・脱字などあれば報告して下さる有難いです

（ 、 、 、 、 ）

043 最も不適切な対応（前書き）

本日もごんづか宜しくお願ひ致します。

### 043 最も不適切な対応

「ひいちゃん」

「……」

「キリュウいないみたいだけど一人？」

「……」

「ひいちゃん？」

「……」

「寝るとちゅーしちゃうよ~。」

「バツチリ起きてます」

何だ何だ何だ何だ…………一体この状況は何だ。

私は今、大混乱中だ。原因はこの田の前の男、…………とこうよつこの体制。

現在の体制を説明すると寝転がった私の上に外見だけは王子風、でも中身は真っ黒な天使モドキが覆い被さっている。そして近づいてきたその顔を私は両手でガツシリ掴んでぐいぐいと押し返してくる所だ。

……何コレ意味わかんない。こいつが何を考えているのか私にはサッパリ分からん——ツ！！

私は確かゲートを潜った後、周りを見渡して何処に飛ばされたのか確認をした。今回は街近くの森。私は少し先に街が見える森の入り口に飛ばされたのだ。

今回のターゲットは……実は私は分からぬ。告げられる課題の内容は、『何時何分に何処何処の場所へ現れる』というもののだけ。対象の特徴やらは一切知らされないので。私達はそれを探し出し、そして狩魂をする事が課題である。

課題内容を何故私が知らないのか。その答えは至極簡単、全く聞いていなかつたからだ。だが何も問題はない。キリュウが知つてゐるはずなのだから。私はいつもこういつた事は彼任せなのである。いやあ、優秀なパートナーだと楽出来て良いね。

しかしこのままでは何もする事がない。私はキリュウを待つ為、近場の木陰にゴロンと寝転がり、少し寝ようと目を閉じた。

気温は高いといつても日陰で少しほ涼しいし、サラリと流れる風も気持ちがいい。私は眠る体制になつてから幾許も経たずにうとうとしていた。それと比例して警戒も薄まる。

——それがいけなかつた。

瞳を閉じて五分くらい経つた頃、だらうか。

両の耳元でかさりと草が揺れる音がしたのだ。何かが置かれたようその音に夢の中へ片足を突つ込みかけていた私の意識は浮上した。そして何故か背筋を駆け抜ける物凄い悪寒。

こんな所で寝たから風邪でもひいたのかな、と暢気な事を考えながら私は徐に瞼を上げた。

そして田の前の光景に絶句し、田を見開く。

田の前に広がるのはウェーブのかかった金髪と青空の色を宿した瞳。わあ、天使だ、天子様だ……なんて言つてられない。

私はコイツを知つてゐる…………それはそうだ、昨日会つたばかりなのだ。

そこには何故かドス黒がいたのだ。

これは悪夢に違いないと、放心状態になつてゐるといひで冒頭の  
したくもない遣り取りになつたのだつた。

「……ッ、ちょ、つと、退いて、くれ、ませんか、ねつ！」  
？」

ふぬぬ、と踏ん張つて顔を押し退けようとする私だが一向に退く  
気配はない。見た目細いように見えるが、一応相手は曲りなりにも  
男だし力はあるのだろう。それなりに力がある私でも全く敵わない  
のだから。もしかしたらキリュウと同じく着痩せするタイプで服の  
下には立派な筋肉が付いているのかも知れない。それにこの体制で  
は力が出しきれなくて圧倒的に不利だ。……ああ畜生、出来るもの  
なら五分前の自分を寝るな、死ぬぞ、と思い切り蹴り飛ばしてやり  
たい。

「嫌だつて言つたら？」

後悔の念に駆られてくる私へ、爽やかなよつでやはりドス黒い微  
笑を浮かべながらそう言つ田の前の男。

嫌だ、じゃねえよ、わいつと退け！……つて蹴り上げられたら良  
いのに。

私はそれを実行出来ずにいた。何故なら以前、依都に言われたの  
だ。「湖都ちゃんはそやつて律儀に反応を返すからああいう輩に  
絡まれるんだよ」と。その後「私に任せて。追つ払つてあげる」と  
柔らかく微笑んでいた彼女が懐かしい。毎回どうやっているのかは  
謎だが、言葉通りに追つ払つてくれるそんな姉は實に頼もしい存在

だ。

しかし残念ながら今、彼女は此処にいない。自力で何とかしなければいけないのだ。

と言つても考えれば考えるほど混乱する。やはりどう対処すれば良いのか分からぬ。

冷や汗を流しながら「一、二」と考へてゐる間に少しずつ近づいてくる顔……。つて、近一、近二、近三……。キリュウー！――お前番犬のくせにまだ来ないのか――！」主人様が大変な目に遭つてゐるぞ――！――

「だんまりだとここのまましかやつよ？」

キリュウにヘルプの念を送つてこらへり、ドス黒はそう言つなり一層顔を近づけてきた。

ますますアップになるその顔。

やばい。ここのままで本氣でやばい。

でもいつもの態度で返すと依都のお告げ通りに……いやいや、しかしこのままではこの変態と口をくつ付ける羽目にならんッ

！――

もう少しで唇が重なるといつ時、私の中の何かが――キレた。

「テメエいい加減にしろ……！」

言つと同時に渾身の力で右足を蹴り上げる。

脇腹を狙つたのだが、ドス黒はヒヨイツと身体を起こして難なくそれを避けた。予想はしていたのでそれほど驚くことはない。この男が現在の私よりも強い事は分かつていて……でなければとつては実力行使で排除している。

ドス黒が退いたので自由になる私の身体。素早く身を起こして無

造作に放り出していった鎌を拾い上げる。毎回お荷物だと思っていたものだが、今回はそれなりに役に立ちそうだ。キリコウが来るまでの間だけでも持ちこたえて欲しい。もう本当に。

鎌を構え、私はギロリと相手を睨みつけた。それを受けたドス黒は相変わらずにひいりと薄ら寒い笑顔を浮かべ、口を開いた。

「へえ、それが鎌？ ひーちゃんは変わってるね」

「お前にだけは言われたくない」

私の言葉を聞くなりきょとんとするドス黒。奴は瞬きを数回繰り返した後、小首を傾げて心底不思議そうに聞いてきた。……小首とか傾げるな。見てるひーちゃんはイラツとするだけだ。

「ふーん……俺の何処が変わってる?」

「全部。お前変態だろ」

それも超の付く変態だ。間違いない。

ふんっ、と即キッパリ言い放つ私を奴はマジマジと見た後、何を思つたのか——噴出した。

「ぶつ あはははははははは！」

腹を抱えてひいひい笑う日の前の変態。

……わあ、何だか凄くいやな予感がする。

「あはははは……ひ、ひーちゃん、ははつ、面白……つ……」

「…………」

やつてしまつた……あれだけ言われ続けていた事なのに

。……。

私はこの瞬間、この男のお気に入りに私が追加されてしまった事を悟った……勘弁して下さい。

### 043 最も不適切な対応（後書き）

誤字・脱字などあれば報告して下さると有難いです

（ 、 、 、 、 ）

044 黒い微笑みと不測の事態（前書き）

本日もいつも宜しくお願ひ致します。

「ははっ……あー、笑った笑つたー」

一頃<sup>しき</sup>笑つたドス黒は酸欠なのが肩で大きく息をしている。そのまま笑い過ぎて逝つてしまえば良いのにとついつい願つてしまつたのは仕方がない事だろう。誰もが許してくれると思う。

「もう、ひいちゃん最高」と言いながら目尻に溜まつた涙を拭うドス黒……まだ若干肩が揺れている。こいつは笑い上戸なのだろうか。今なら箸を転がせば笑い出すのだろうか。転がし続ければ天に召してくれるだろ？ ならば私はいくらでも転がしてみせる。魂を半分飛ばしつつ、私はどうすればコイツの興味対象から外れる事が出来るのかを考えた。しかし一向に良い案が思い浮かばない。あ、どうか手遅れなんて言葉は出さないで。泣きたくなる。

「俺、変態なんて初めて言われたよ……ふふつ」

そう言つて嬉しそうに笑うドス黒……え、嬉し、そつ……？ 何故に変態と罵られて喜ぶんだ。……ああ、そうか、コイツは真正の変態だったのか。常人にはこのドの付く変態の思考回路など読めるはずもない。これからは敬意を込めてド変態と呼ぼうじゃないか。ドス黒からド変態へクラスチェンジだな、おめでとう。是非ともその変態部分は自分の中に押し留めておいてくれ。でないと公害になる。これからは主に私へ迷惑が降り懸かる気がする。

しかし、初めて言われただと……？ ロイツはどう見ても変態だろう。あまりにも変態すぎて皆言えなかつたのか？ うん、なら納得だ。皆ドン引きして関わらないようにしていたのだろう。

「あー、違うからね？ひいちゃん以外は皆俺に好意持つてくれるか  
う」

——雷を直に喰らつた様な凄い衝撃を受けた。

「コイツも読心術スキルの習得者かとか、もつひとつでも良くなるくらいの強い衝撃だった。

信じられないと目を限界まで見開いて目の前のド変態を凝視する。「あ、そういうやキリュウも例外か」と付け足すかのようにぼやいているがそれもどうでも良い。というよりそれは正しい反応だ。キリュウは常人だから——じゃなくて。

「コイツに好意？そんな天変地異が起きてたまるか。…………あ、そうか、勘違いか。コイツの思い込みか。そういうやコイツのお頭は大混線しているのだった。その上『変態』と相手は言っているのに『紳士』やらそういう言葉に誤変換される余計な機能までが搭載されてるようだ。ある意味中身の詰まつた脳みそをお持ちで。聞こえは良いが全く羨ましくない。詰まっている内容に問題があり過ぎる。つまり、一言で言うとこのド変態は残念な……いや、残念過ぎるイケメンなのだ。

「いや、だから違うって」

思考を読んだらしいド変態が苦笑混じりでそう答える。何が違うものか。

奴を疑いの色しか宿していない目で見ていると、奴は自分が何を言つても無駄だと思ったのか「まあいいか」と肩をすくめた。いや、そんなもん信じる訳がないだろう。ドの付く変態だという事実は曲げようがない。

「あ、やつをも聞いたけどキリコウはいないの？」

話は終わったとばかりに質問を持ちかけるド変態。

「ド変態は兎も角、そういうやそだなとポケットの中の時計を確認する。こちらに来てから15分程時間が経っていた。……遅い。パートナーがこんなド変態野郎に絡まれているというのに彼は何をしているのだろうか。……あの黒学の教師の話が長いのか。早くキリコウを開放してこちらに送り届けてくれ。こちとら緊急事態なんだよ。」

「ふーん……まだ来ないみたいだね？」

私が渋い顔をしているとド変態が笑みを深めてそう言った。それを見た私は全身に鳥肌が立つのを感じた。

変態が笑つた…………物凄く嫌な予感がする。

「ねえ、ひいちゃん、俺と遊ぼうよ  
「ひいちゃんなど変態」

ゆづくづ近付いて来るド変態に向かつて私は容赦なく鎌を振り下ろした。威嚇である。と言つても90%くらいは本気で切り掛けたがそう易々と当るとは思えなかつた。……万が一当ればラッキだ。寧ろ当れ。

しかし、そんな幸運が訪れる事もなく、予想通りそれを奴は軽々と避ける。「暴力反対ー」とふざけて両手を挙げているが、お前は先程私に何をした。こちらから言わせて貰えば『セクハラ変態野郎断固お断り』だ。お引取り願う。ついでに天国でも地獄でも土にでも帰つて欲しい。迅速に宜しく頼む。

「ふふつ」

「……………」

何故に蕩けそうな笑顔。

攻撃されて物凄く嬉しそうにするとはびつこう事だ。やはりド変態はあくまでド変態か……先程からチキン肌が治まらない。勿論気味が悪くてのそれだ。

私が心の底からドン引きしても気にする素振りも見せず一口一口と笑うド変態……本氣で関わり合いたくないのだが。

「あのキリュウが氣に入るのも分かるなあ。ひいちゃん面白いっていうより不思議生命体だし?」

——不思議生命体はお前だ!!

顔を引き攣らせて心の中で思い切り叫んだ。

私が反応を返す度にコイツを喜ばせているは何となく分かるが今更だ。どうしようもないといつも、もう良い、どうでも良い。付き纏うならその度に返り討ちにしてやる。

そう意気込んでもう一度攻撃を仕掛けようとしたのだが、奴の次の言葉にそれは叶わなかつた。

「ねえ - 蒼黒の死神さん?」

「ツー!」

蒼黒……それは私の本来の髪と瞳の色だ。……それを何故こいつが知っている?

一瞬固まつてしまつた私。

その隙を相手が見逃すハズもなく、我に返ったときには背後を取られていた。

「これは預かっておくね?」

ド変態は私が振り返る前に手をチヨーカーへと伸ばした。そして流れれるような動作で素早く解かれる。止める間もなかつた。

「ちょ　　ツー！」

辺りが光に包まれた。

視界に映る髪はいつもの明るい茶色でなく漆黒、今自分で確認はできないが瞳は蒼色だらう。私は元の配色へと戻ってしまった。咄嗟に取り返そうと手を伸ばすがド変態は白い翼を広げ、空へと羽ばたいたので届かない。

奴は空の上から風に靡いている私の髪と驚きに見開かれた瞳を見遣り、黒く微笑んだ。

「じゃあ、またね」

ヒラヒラと手を振り、いつかのように出現させた光の中へ消えるド変態。呆気に取られ、私はその様子を固まつたまま見送る事しか出来なかつた。

先程まで晴れていた空はいつの間にか暗雲が立ち込めている。そして空からポツリポツリと雨が降り出し、点々と服や髪を塗らしていくが、そんな事気にしていられなかつた。私はド変態が消えた空間を見上げながらそのまま立ち去る。

次第に雨脚が強くなり、零が頬から首筋へと伝つた。首に馴染んだ感触が今は無い。

濡れる私の髪とほんやりした瞳は血前の色のままだ。

……ヤバイ？

044 黒い微笑みと不測の事態（後書き）

誤字・脱字などあれば報告して下さる有難いです

(、・・、)

045 焦燥と力技（前書き）

すみません、物凄く遅れました。;

本日もどうぞ宜しくお願い致します。

一人ぽつんと残された森の入り口。見上げる空は相変わらず雨が降り注ぎ、止む気配を見せない。

「一」

ぱーっと間抜けに見上げていたせいで雨が目に入り、慌てて下を向く。ゴミは入らなかつた様だが少し違和感がした。瞬きを何回かして慣らしていると、ハラリとしつとり濡れた黒髪がずれ落ち、視界へと入ってくる。

黒………… そうだ、今は黒髪だった。

「…………、」

タラリ、と背中に冷たい汗が流れた。

——ヤバイ。タチバナさんとの約束を破つてしまつた……どうしよう。キリュウのときは意外にアッサリだつたが、今度もそつとは限らない……否、絶対前回のようにはいかないと自信がある。バレた相手が大問題だ。キリュウとド変態では比べるまでもないだろう。

しかし終わつた事はどうにもならない。……この際隅にでも置いておこう。考へても仕方ないので。

せめてチョーカーを取り返したいが、現在奴が何処にいるのかサッパリ分からぬ。いや、分かつた所でこの姿ではホイホイと容易に動き回る事は出来ないだろう。完全に手詰まり……いやいやいやい

や、何とかしないと。

「うーん」と唸りながら解決策を考えていたその時——じゃりつ、と土を踏む音が聞こえた。

背後に誰かがいる。

「 ッ！！」

ド変態の件で十分面倒臭いのにこれ以上面倒臭い事が増えるのは勘弁である。もしも目撃が増えてしまったら……タチバナさんの黒い笑みが脳裏に浮かんだ。

その恐ろしい光景に一瞬ピシリと身体が固まってしまったが氣力で何とか我に帰り、私は森の中へと駆け出す。…………が、森へ入るその直前でガツシリと腕を掴まれてしまった。おい、何故掴む。少し戸惑っていると私はそのまま腕を引かれて引き寄せられてしまった。

——ヤバイ、見られる。

そう思つと同時に私は掴まれていない方の拳を繰り出した。

まだ瞳の色までは見られてはいない。見られる前に逃げるのだ。最悪、キツイ一発を入れて記憶を失くしてしまえば良い。相手にとつたらとんだ災難かもしれないが、私は知りもしないあなたより我が身の方が断然可愛い。諦めてくれ。

狃うは相手の顎。当れば脳震盪を起こして立つてはいられなくなるように出来る限り体重を乗せ、下を向いたまま思い切り振り上げた。

「 ッ！！」

パシッと乾いた音が響く。私の拳は掌で止められてしまったよう

だ。

正直これで決まると思っていた私は少し驚いた。相手は思つたよ  
り体術が使えるらしい。

ならば、とまだ残つてゐる足を繰り出す。拘束したままでは  
避けられまい。

身体を捻り、シコツと空氣を切る音と共に回し蹴りをお見舞い—  
——するギリギリで止めた。

私は目をパチパチと瞬かせる。

……何やらこの黒服には見覚えがあるぞ。

「……」

じぢらも動くことなく、そのまま暫しの沈黙が流れた。

——のままでは埒が明かない……私は意を決して、恐る恐る顔を上  
げ、確認をする。

——見上げた先にはやはり見慣れた顔があつた。

今は雨でしつとりと濡れているサラサラの黒髪に赤い目を携えた  
超絶美形悪魔——私のパートナーがいた。いつの間に。  
取り合えず上げたままの足をゆっくりと下ろす……うん、物凄く  
居た堪れないな。

私が自分に気づいた事を認めるとな彼は溜め息を零して口を開いた。

「……お前は相変わらず手が早いな」

「……申し訳ない」

……返す言葉もなかつた。

取り敢えず私の配色がよろしくないので人目の付かない場所へ移る事にした。

ベシャベシャとぬかるんだ森の中へ進んで行く私とキリュウ。雨は相変わらず容赦なく降り注いでいたが一人とも既にずぶ濡れになつていたので気にもしても今更だ。急ぐ事もなく歩いて進んで行く。

「わつ」

驚いて思わず足を止める私。

突然私の頭の上に何かが被さり、視界が一気に暗くなつたのだ。何だ何だと手に取つてみるとそこには黒学指定のブレザーさんがあつた。見た瞬間私の眉間に皺が寄る。……見たくもないものが突然降ってきたのだから当然だ。

取り合えずコレ、切り刻んじゃつて良いだろ？か。結構なストレス発散になるとと思つ。

「……被つておけ」

不穏な気配を感じたのか、立ち止まつたまま親の仇のようにそれを睨みつける私へキリュウがそう言いながらまた憎きブレザーを被せてきた。切り刻むのはどうやら駄目らしい……まあこれキリュウのつぽいしね。切り刻むなら他の奴らのものにしよ？。我慢だ。

しかしこの暑いのにこんな物を被れとは拷問だろ？か……それにもう何処もかしこも雨に濡れてしまつている今、雨を凌いでも意味がないと思う。

不満たらたらな様子でブレザーの下からキリュウを見上げると、淡々とした答えが返つてきた。

「……何処で見られているのか分からん」

「……」

被せたのは雨を凌ぐのではなく色を隠す為だつたらしい。  
まあ、確かにそれは必要かもしない。

漆黒の森では誰も居ないと思つていたのにド変態に覗き見されて  
いたのだ。用心に越した事はない。

……しかしながら。

私はもう一度キリュウを見上げる。ほんとコレ、暑いんだよ。出  
来るなら被りたくない。せめて違う布が欲しい。この生地は分厚す  
ぎるので。

そうやつて田で訴える私の思考を読み取つたらしくキリュウはま  
た一つ溜め息を零した。

「……あとはこれ位しかないが?」

そう言つて見せたのはキリュウが今着ている黒シャツ。裾をまく  
つて見せてるので臍がチラリズムだ。見える腹には無駄な脂肪が  
なく、程よく筋肉が付いている……畜生、羨ましい。

思わず黒シャツではなく腹をジーッと見ている私にキリュウが怪  
訝な視線を遣つてき…………はつ、いかん。これではまた痴女疑惑  
が……ツ。

私は急いで首をぶんぶんと横に振り、いらないと意思表示をする。  
いくら暑いからといつても、流石に彼が今着ているものをぶん取ら  
うとまでは思わない。

「じゃあそれを被つていろ」

「……へー

私は渋々くそ暑いブレザーを被り、ぬかるんだ道なき道を再び歩き始めるのであった。

045 焦燥と力技（後書き）

誤字・脱字などあれば報告して下さるう有難いです

（ 、 、 、 、 ）

046　自ら起るか一 次災害（前書き）

本日もごいづれ宜しくお願ひ致します。

ぬかるんだ地面に足を取られつつ、森の奥へ進む事約20分。私達は崖にポツカリと出来ていい窪みを発見した。少し余裕を持つて2人入れるくらいのその窪みは、広くはないが周りから見付かりにくい上、雨宿りくらいは充分に出来そうだ。

私とキリュウはどうちらからともなく目配せをし、軽く頷き合つ。ここで少し休む事にした。

二人そこへ腰を下ろし、雨に濡れた服を絞つていく。私がチビチビと着たまま裾だけ絞つていると、隣ではキリュウが黒シャツを脱いで豪快に絞っていた。私もそれに見習いたいが、やれば痴女認定を受けそうな上、腹のお肉様を披露する羽目になってしまつ。それは断じて頂けない。

チラリと隣に視線を遣ると、そんな腹肉に悩まされている私と違ひ、脂肪とは無縁の彼の身体が窺えた。<sup>うかが</sup>男と比べても仕方ないとは思うが、本当に彼は良い身体をしている。羨ましい限りだ。その筋肉を分けてはくれないだろうか。

またもや、つい彼の身体をガン見してしまう。視線を感じてふと視線を上げるとキリュウがこちらをじっと見ている事に気が付いた。いかんいかん。

へらりと笑つて誤魔化しを試みるが胡散臭さげに目を細める彼：  
……これは遂に認定されてしまったのだろうか。<sup>誤解だ。</sup>私は断じて痴女ではない。このふよふよの腹肉の代わりに逞しい筋肉が欲しいという純粋な心を持っているだけなのだ。

「……被つておけ」

彼はそう言って私が先程絞つてそのままさり気なく後ろへ置いていたブレザーをバサリと被せた。どうやら痴女認定ではなく、ブレザーを被つていない事に対して非難の視線をくれていたようだが……。

「…………暑い」

「…………我慢しろ」

再び戻ってきた要らぬ温もりに眉根を寄せ、溜め息を吐いた。そんな私を労るようにブレザーの上からポンポンと頭を撫でられる。私はわんこか。

すぐ離れるかと思われたその手は、尚も私の頭をブレザー越しに撫で続ける。

「……」

……定期的に訪れるその心地好い重みに、何だか瞼が重くなってきた。この魔法の手は相変わらず私に安心感を与えてくれる。

このまま眠れば至福の時を味わえるだろう——だがそれは駄目だ。こんな場所に長居するわけにはいかないし、気温が高いとはいはずぶ濡れ状態では風邪をひくかもしれない。それに今後の対策を練らねばならない。

……いやしかし、至福の時は魅力的

「……で、何があった？」

大人しく撫でられながら心の中で格闘していると、頭上から声が

降ってきた。睡眠欲に負けそうになっていた私の意識がフワリと浮上する。……ああ、あのまま眠りの世界へ旅立ちたかった。

「……寝るな。風邪をひく」

「……」

全てお見通しなキリュウから注意が飛んでくる。

私はうたた寝を渋々断念することにした。

しかし、「何があった」って……色々ありすぎて何から言えれば良いのか。言葉に詰まり再び沈黙が流れる。

そもそも彼に一から説明するという時点で私の意欲は急降下していた。物凄く面倒臭い。こんな時こそ彼の読心術を発揮させて欲しいのだが……珍しく不調なのだろうか。

私は深く息を吐きだした後、仕方無しに口を開いた。

……まあ取り敢えずアレだ。

「変態に遭遇した」

「……はしょり過ぎだ」

やはりその一言では解らないという事で面倒臭いながらも私はクリスタールー前でキリュウと離れた後の一連を話した。

キリュウを待つ間、寝ようと転がっていたらド変態が現れた事、恐らくお気に入りに追加されてしまった事、髪と瞳の元の色を知っていた事、チョーカーを盗られてそのまま消えてしまった事等々——あつた事を全てだ。説明しただけで精神をじつそりと削がれてしまつた……流石はド変態である。

……それでも、あのド変態め……全部全部あいつのせいだ。あいつがチョーカーを取つていったからこんな面倒臭い事態に……

次会つたらボロ雑巾並にボロボロにしてくれる。

私は拳を握り締め、怨みを全て元凶であるド変態へと向けた。そして脳内で殴る蹴るを繰り返し、マウントポジションを確保して再び拳をお見舞いしている所でプツッと妄想が途切れる。キリュウがポツリと言葉を零したのだ。

「……あの時か」

顔を向けると眉間に皺を寄せているキリュウが映った。何処か落ち込んでいるように見える。……もしかして責任でも感じているのだろうか？

確かに不可抗力とはいえ彼の策略に嵌つた事によってド変態にもバレてしまつた。しかしそれは終わつた話で、しかも彼は私を護るためにあはれからという動機で暴いたのだ。彼は何も気負う必要はない。

「悪いのはあのド変態だけだよ。キリュウは悪くない」

私がそう言ひとキリュウは何故か少し目を見開いた。……何に驚いたのだろうか？

相変わらずよく分からないと首を傾げているといつもの無表情に戻る彼。そしてその後――フツと口元に笑みを浮かべた。それを目の当たりにした私は一瞬固まる。

――私を見るその瞳がひどく優しい。

「……そつか」

「うん……、」

足に障害のある金髪少女が初めて立つた光景を叩きした元気な山好き少女並に衝撃を受け、盛大に吃<sup>じゅ</sup>ってしまった。

私は思わず彼の顔から視線をはずらす。例の如く、直ぐに無表情に

戻った彼だが、何だかとてもいたたまれない。手に変な汗までも搔いてきた。何だ、これは。

彼の笑顔らしきものを見たのはこれで二度目だ。以前見た時は希少なものを見た気分でマジマジと見ていたが、今回は何か違う。何だか見てはいけないものを見てしまったような……何とも言えない感じだ。

「……そういえば何故『変態』なんだ？」

私が一人よくわからないものに焦つているとキリュウが問い合わせてきた。私は気を取り直して「ああ、それはね」と前置きして答える。

「被さつてきたからだよ」

「……被さる？」

「うん、寝てる時に」

私の言葉に眉間に皺を寄せるキリュウ……ん？ 言つてなかつたつけ？

……ああ、そう言えれば説明の時、思い出したくないが故に『寝てたらいきなり現れた』と説明した気がする。言つていなかつただけで、決して嘘ではない。

そろりと彼の顔に視線を戻すと違和感を覚えた。……雰囲気が何やら不穏なものになつてきてはいいか？……何故だ。私は何か彼の気に障る事でも言つてしまつたのだろうか。

気になりつつも視線で話の先を促すキリュウに負け、続けて話す私。

「……えーと、その、気配に気付いて目を開けたら目の前、に……

つ、

あ、あとねつ、変態つて罵られてアイツ喜ぶんだよ。

本格的な変態なんだよ、怖いよねつ

「……………言葉の受け取り方はそれぞれだからな……賛同は出

来んが」

説明の途中、不穏な空気が更に濃くなつた所で私は話を変えた。纏う空氣は相変わらずだが、これ以上濃くなる事態は阻止出来たようだ。ふう。

キリュウの不機嫌スイッチが何か分からぬ私は冷や汗タラタラである。よく分からないがタチバナさんはまた違つた意味で彼を怒らせてはいけないと警笛がガンガン鳴つているのだ。ここは慎重に話題を選ばねば……。

……あ。

『被さる』で彼に告げ忘れていた事を思い出した。アイツがどれだけ変態なのかを切々と伝える為、私は苦虫を噛み潰したような表情でそれを付け足す。

「あと、アイツにちゅうつかれ……、」

『ちゅうつかれ』の部分で物凄く黒い空氣を一瞬で纏わせたキリュウに私の言葉も停止する。

え、ちょ、だから、何故……――

「……………それでないな……？」

地の底から響くような声で質問とは言えない質問を繰り出す彼。答えは『イエス』か『はい』しか受け付けない、みたいな……。

えつと、目の前にいる奴はキリュウだよね?まるで別人……

何だか不良のようでござりますよ。

戸惑いながらも必死に何度も力ク力クと首を縦に動かす私。実際阻止したので嘘ではないが、こんな質問の仕方ではもしされていたとしても縦に首を振ってしまいそうだ。

…………何だこの意味不明な一次災害は…………被害者の私が何故こんな目に。

これも全てあのド変態のせいだ。

私はより一層怨みを募らせるのであった。

046　直ち起立か一 次災害（後書き）

誤字・脱字などあれば報告して下さると有難いです

（ 、 、 、 、 ）

047 決死の時限爆弾処理作業（前書き）

遅れています……

本日もどうぞ宜しくお願ひ致します。

私が壊れたオモチャの如くカクカクと首を縦に振り無罪を表明した後、キリュウは眉間にシワを刻んだまま黙り込んでしまった。何やら考え方をしているようだ。

彼は未だ黒い空気を纏わせてはいるが私から視線が外れたことでいくらか威圧感が薄れた。私はこっそり溜息をつく。……ふう、助かつた。

不機嫌スイッチは何なのかやはり分からぬままだが今探るのは得策ではない。変に刺激してまたあのプレッシャーを受けるのは嫌だ。原因が分からぬ事には対処できないだろうがなるべく地雷を踏まないよう今後気を付ける事にしよう。

そしてふと思いつくあの瞳……あの時一人の間に流れたいたまれない空気がもし再び流れる事になつたら——私はもう耐えられそうにない。現に思い出すだけで息が詰まり、また手に変な汗を搔いてきてしまった。……駄目だ。思考ストップさせねば。頭がパンクしそう——

「…………これからどうするつもりだ?」  
「…………

風邪をひいても良いからもう一つ寝てしまおうと本気で考え始め、ゆるゆると瞼を閉じていたのだが、キリュウが話しかけてきたので私は閉じかけた瞼をパチリと開いた。

危うく聞き流しそうになつた言葉をもう一度自分の中で繰り返し、その意味を理解する。

…………これから…………。

………… そうだった。今寝ている場合ではなかつたのだ。

「…………うーん、どうしようかな」

この配色ではまず学校に戻る事は出来ない。キリュウとタチバナさん、あとド変態以外に見つかる訳にはいかないのだ。大問題になつてしまふ。

そうなると私は容易に動く事が出来ない。学校近くにある第一の家にも帰らない方が良いだろう。結界内に入り込めば何て事ないが、入る前に見つかる可能性が高すぎる。迷いの森の入口辺りは目の前が死学という事もあつて、結構人通りが多いのだ。

「…………チョーカーのスペアは?」

「ない」

キリュウの質問に即答で否と答える。

そもそもアレは外さない事が前提の代物だ。スペアなんてあるはずがない。

こうなるとタチバナさんしか対処は出来なくなつて……。

…………ヤバイぞ。

「…………どうした」

急に無言で固まつた私にキリュウが尋ねてくる。私はそれに対しても答えられずに冷たい汗をダラダラと搔きながら先程の事を思い出していた。

…………確かド変態はこう言つていなかつたか。

『じゃあ、またね』

また会つことが前提の口ぶりではあるが……時間と場所は全く分からぬ。勿論生息地も分からぬ。

——それはつまり会える事には会えるが、こちらから訪ねるという事ができない……もう少し言ひとタチバナさんが帰つてくるまでに間に合うかどうかも分からぬという事で……。

そしてこの配色のまま下手をすれば何日か過ぐさなければならぬという事で……。

その間、やり過ごせるだろうか？家には近付けないから野宿になるだろ？それはまあ何とかするとして……学校はどうする——？

「…………」

キリュウに再度尋ねられる。ハッと顔を上げると、どこか心配そうにこちらを覗き込んでいる赤色の瞳と視線がかち合つた。

……そうだ、キリュウに学校への伝言を頼もう。

「キリュウ、私明日からインフルエンザにかかる予定だから伝言宜しく」

「…………」

みるみるうちに呆れ顔になるキリュウ……あ、駄目っやつば駄目？仕舞いには溜息までつかれてしまい私はアハハと笑うしかない。因みにインフルエンザはこちらにも存在する。一週間ではなく2日程で完治するが。

「……お前、本当に教師の話を全く聞いていないな」

ん?……と言いますと?

キリュウの言葉が指す所が分からず首を傾げる私。  
そんな私を見てもう一度溜息を吐き出すキリュウ。溜息は吐けど  
も治せと注意は吐かないので彼はもうとつて諦めてくるらしい。  
賢明な判断だ。治すつもりがないから注意をしてもらおうと一生治ら  
ない。

何處か他人事のように考へているとキリュウが徐に口を開いて説  
明をしてくれた。

「……今回の実習は3日掛かりだ」

「3日?」

「あ……3日かけて狩りを行つ。ターゲットは『レベルEの魂』  
という以外、数も種類も指定されていない……つまりEレベルの魂  
を狩れるだけ狩つてこい」という訳だ」

「……んじゃ明後日まで学校に顔出さなくて良いと?」

「あ」

なんと。そうだったのか。

そういう事なら学校の事は心配いらない。見つからないように気  
を付けねば良いだけである。

……タイムリミットはタチバナさんが帰つてくる明後日。それま  
でにド変態を取つ捕まえてチョーカーを取り戻さなければならない。  
しかしその為には奴の居場所を掴まなければ……。

……。

「……キリュウ、ド変態の生息地分かる?」

居場所が分からない私は意を決してキリュウに尋ねてみた。

……どうも彼はド変態の話を振るとあの黒い空氣を醸し出す。今

度は地雷を踏んだらどうか？手に汗を握り恐る恐るキリュウの顔を窺つた。何だかドラマなんかでよく出てくる時限爆弾の最後2つのリード線を選択したような気分だ。赤か青か……私の切ったものは起爆の方でない事を願う。

「……聞いてどうする？」

——ひいっ。

眉間に皺が刻まれ、僅かだがまたあの黒いものがキリュウの背後に出現した。

私の選んだリード線は起爆の方だつたらしい。

キリュウのそんな様子に冷や汗を流しながら黙つていると余計に皺が深くなつていつたので私は慌てて質問に答えた。

「チョーカーを奪還するつ。心配しなくともこれ以上キリュウに迷惑なんてかけないよ、一人で、……、——じゃなくてキリュウも手伝ってくれると嬉しいな！？」

——何を言つているんだ私は。

『一人で』の部分で空氣が更に黒くなつたので慌てて訳の分からぬ事を言つてしまつた。迷惑かけます宣言をかましてどうする。決して振動を与えではならない时限爆弾を思いつきり蹴つ飛ばしてしまつた。

視線を外し、覚悟を決めて大爆発の瞬間を待つたが……何故か一向にその気配を見せない。

ゆっくり彼に視線を戻すと眉間に皺は健在なもの、あの黒い空気が一掃されていた。何故。

「……わかつた」

彼はそれだけ言い、私の頭をまたブレザー越しに撫で始めた。

……よく分からぬが奇跡的に起爆は免れたようだ。蹴つ飛ばした先には液体窒素があつた模様……対冷却システムが付いていない爆弾で良かつた。

私は気付かれないよつにひそり安堵の溜め息を吐き、もう一度質問をする。

「ありがとう。……で、奴は何処にいるの？」

「知らん」

ちょっと待て。

誤字・脱字などあれば報告して下さるう有難いです

（ 、 、 、 、 ）

048 お手軽変装術（前書き）

また遅れですみません。;

本日もどうぞ宜しくお願ひ致します。

先程のさも知っていると言わんばかりの口ぶりは何だったのか……。

思わず絶句している私に構わずキリュウは続けた。

「……協力すると言つただけだ。アイツの居場所なんぞ知るか……それよりこの現状をどうにかしないとマズイ」

確かにキリュウの言つ通りだ。

タチバナさんが帰つてくるまでまだ時間はある。それより現状をどうにかしないとこの森から出られないままだ。

取り敢えず服をどうにかしないといけないだろう。ずぶ濡れな上、雨も降り続き少々身体が冷えてきた。このままだと冗談抜きで風邪をひいてしまう……今ぶつ倒れるのは非常にマズイ。

私は辺りを見回した。焚き火をしたい所だが雨のせいで燃えそうなものは周りにない。落ち葉や枝などは全て湿氣つているのだ。

「……魔法は使わないのか」

うーん、と難しい顔をしているとキリュウが話しかけてきた。火を起こさないのかと言いたいのだろう。

確かに今はチョーカーがないのでリミッターが解除された状態だ。現在の私は勿論ただのチャッカマンではない……が。

うん、説明するより見てもらった方が早い。

……。

そう思つや否や、私は魔力を掌に集中させ、魔法を発動させた。  
その瞬間、掌の上に炎が出現する。

「……」

一人してそれを暫し無言で見詰める。

……この沈黙、とても居た堪れない。別に悪い事なんて一つもしていないので何だか無性に謝りたくなつてくる。ごめんなさい。何か分かんないけどごめんなさい。

「……これで全力か」

何ともいえない沈黙を破つたのはキリュウだつた。

それに対し、私は「うん」とだけ答える。正真正銘これで全力なのだ。

二人の視線の先——そこにはチャッカマンの火より一回り大きい程度の炎が揺らめいていた。強い風が吹くと呆気なく消えてしまうだろう。

少しだけ大きくなつてゐるとはいへ、こんなもので暖を取れるはずもなく……。

事情を察したキリュウが溜め息を吐いた。……いや、だつて、火の魔法苦手なんだよ。仕方ないじやないか。

因みに水の魔法は出現させることは出来るが、服に付いた水分を取り除くといったような器用な真似は出来ない。風の魔法も服を着たまま乾かせば余計に身体が冷えてしまうので使えない。

「タチバナさん曰く、コントロールが下手なんだつて」

「……………そつか」

もう良いだらうと私は魔法を解いた。掌の上に揺らめいていた炎は瞬く間に消える。掌から2センチ程上に出現するこの炎は何故か私自身は熱くはない。摩訶不思議である。熱くないのはまあ良いのだが、これ、使い道あるのだらうか。今までの経験では火種くらいにしかなっていない。……今は火種にもならないのだが。

私は何となく手をにぎにぎをしてからキリュウを見た。あちらも私を見ていたようで目が合つ。……わあ、何という呆れ顔。

「……一応聞くが泊まる宛てはあるのか」

「ない」

「……人間の領域の金は」

「ない」

「…………まさか野宿するとは言わないだらうな

「……」

「……却下だ」

まだ何も言つてないのに。

読心術レベルMAXのキリュウには隠し事は出来ないようである。するい。

でもまあ確かに焚き火が起こせない状態での野宿は危険だ。夜になると魔物はわらわらと出でてくる。奴らは火の傍には動物と同じくあまり近付かない……つまり、焚き火を起こせないとなると、どうぞお好きにして下さいと言つているようなものなのだ。まず寝る事は叶わないであろう。

視線をそろそろと外すと溜め息が聞こえた。すみません。

このままでは二人仲良く風邪をひいてダウンだ……いや、違うな、私だけだ。キリュウまで私に付き合つことはない。彼は自分の寝床に戻れば良いだけだ。

「……此処で待つてる」

「へあ？」

思考の渦に飲まれていた所に急に話しかけられ、変な声が出たが、私は気にせずそのまま続ける。

「何処行くの？」

そんな私にキリュウは大して気にして様子も見せず、立ち上がった。つられて私も見上げる形となる。首が痛い。

「……近くにあつた村」

「何しに？」

「……お前の服を調達する」

調た…………え、盗む氣？

いくら緊急事態とはいえそれはいくらなんでも気が引ける……。

「……金ならある」

まだ何も言つていないので即効キリュウが眉を顰めながら私の心の声に訂正を入れた。

疑つてすみません……私はそろりと視線を外す。

……まあ取り敢えずお金がある事が分かつて一安心だ。使った分は後々返すとしよう。

しかし彼はこの姿で大丈夫なのだろうか。人間から見て悪魔と死神は命を轟かす者として忌み嫌われている。見るからに悪魔の風貌を持ったキリュウが尋ねて問題にならないのだろうか……かといって私が行くわけにもいかないし。

「……問題ない」

悶々と考えていると上から声が降ってきた。

問題ないって……問題だらけではないか。

私は外した視線をもう一度キリュウに合わせ

「……イメチエン?」

間抜けな顔でそう零す。

目が合つたのは予想していた赤い瞳ではなく、茶色い瞳。

「……直ぐ戻る。此処を動くな」

——見上げた先には黒髪から茶髪へ、赤い瞳から茶色い瞳に染色されたキリュウがいた。

048 楷書・行書の手軽変装術（後書き）

誤字・脱字などあれば報告して下さる有難いです

(、・・、)

049

注意事項は忘却の彼方（前書き）

毎度遅れですみません；；

本日もどうぞ宜しくお願い致します。

「此処を動くな」

そういうや否やキリュウは空間魔法を展開し、ポカンと間抜け面を晒している私を置いて姿を消した。

何度も注意をするのだろうか。彼は子供に留守を頼んで買い物に行く母親か。となると私は彼の子供か。何気に私の世話を焼くしな。うん、帰ってきたママと呼んでやるつ。

……まあそんなくだらない事を思わず考えてしまつくらいには驚いた。ちょっと田を離した隙に髪と瞳が違つ色に染まっていたのだ。誰でも驚くと思う。

私は先程目に焼きついたキリュウの姿を思い浮かべる。故郷、日本で見慣れていた色に染まつた彼はやはり相変わらずの超絶美形であつた。今までは赤い目がファンタジーさを醸し出していたので、何処かモニター越しの感覚だったのかもしれない。しかしこうも馴染み深い色に染まれば一気に身近に感じると共に改めて彼が超絶美形だという事が思い知らされた。

……そういえばサカキがいつだつたか言つていた気がする。悪魔と天使は自由に瞳と髪の色を変える事が出来て周りに擬態するとか何とか。……しかしああも見た目が整つてているとなると結局人間に擬態はできていないのではなかろうか。人間はあれ程までに顔が整つてはいないと誰だかに教えてもらつた覚えがある。人間から見れば完璧に整つた彫像のようなのだとか……兎に角浮きまくる事間違いない。

「ふ……へえっくしょーいッ！……あ、——」

雨に濡れてからどれくらい時間が経つただろうか。

流石に身体が冷えてきたようだ。思いつきりくしゃみが出た。

私は冷くなつた腕を擦つて摩擦熱を起こそうと頑張るが、一瞬は温まつても根本的な問題は解決していないのであまり意味はない。キリュウ……いや、ママン、早く帰つてこないだろうか。

早く、早くと念を何度も送る。離れた彼にこの想いは通じるだろうか。

出来る限り熱を逃がさないよう体育座りで丸まつて足元に視線を遣つてみると、突如目の前に影が出来た。

……ん？ 影？

「 暖めてあげようつか？勿論身体で」「……」

概聴感溢れる声が頭上から降り注いだ。

出来れば聞きたくもないその無駄にエロい声が耳に届き、私はビクリと身体を跳ねさせる。腕には寒さとは違つ原因でチキン肌が立つた。勿論嫌悪で。

どうしてまたこんな急に現れるかなコイツは。

足元に落としていた視線を嫌々ながらに上げると、そこには予想通りの胡散臭さ満載な黒い笑みがあつた。

「ふふ、それにしてもオッサン級なくしゃみだつたね

そう言つて小首を傾げてこちらを見下す変態。うわ、やめろ。チキン肌が悪化する。

そして放つとけ。私に乙女を求めるな。

ああいうのは思い切りやつてこそスッキリするといつものだ。ちまちまやつていたらストレスが溜まつてしまつ。どんなくしゃみを

かまそらが私の勝手なのである。誰かに、といつよつお前みたいな  
ド変態にどうこう言われる筋合いはない。

……等々、色々と言い返したいことはあつたはずだつた。

しかし、咄嗟に私の口から出たのはただ一言だけ。

「近寄んな変態」

……うん、だつて少しづつ近付いてきてる。

今、ド変態は身を屈めて私の顔を覗き込んでいる状態だ。私はす  
かさず尻をズルズルと引き摺つて逃げるには狭い空間の中、横にす  
れた。こんなド変態の近くにいたくはない。ド変態菌に侵されてしまつ。

——つて、そうじやなかつた。大事なものを取り返さねば。

「そこから動くな」

私は「相変わらずひどいなあ」とか薄気味悪い笑みを浮かべてぼ  
やいているド変態に命令すると魔力を練り上げて腕で空を切り、風  
魔法を発動させた。そこから鎌鼬が生み出され、ド変態へと向かつ  
ていく…………が、ギリギリかわされた。

リミッターが解除され、絶好調のそれはド変態の後ろに佇んでい  
た巨木をスパツと綺麗に切断した。切れ目が徐々にずれ、ゆっくり  
と木が倒れていく。

ドオン、と地響きを伴いながら倒れる大木をチラリと見遣り、笑  
みを深くするド変態。……何故そこで笑う。氣味が悪い。本当に氣  
味が悪い。奴の思考が全く理解できない。……理解する氣もなけれ  
ばしたくもないのだけれども。

このド変態からチョーカーを取り戻さなければならないとか鬱に  
なりそうだ。しかし、それは残念ながら避けては通れない道……

……私はその気持ちを振り払つように睨みながら言つ。

### 「チヨーカー返せ、ド変態野郎」

言ひや否や私は先程放つたものと同じ鎌鼬をいくつもド変態へ向けて飛ばした。空気を切り裂きながら容赦なくド変態へと襲い掛かる。

一方、ド変態は「危ないなあ」と零しながら難なくそれらをひりとかわしていった。

回避されるのは分かつてはいたが…………何だか無性にムカつくのはこのド変態だからだろうか。

目標の的が避けたので流れた鎌鼬が次々に後ろに佇む木々を薙ぎ倒していく。樵きこりの如く森林伐採、温暖化に貢献である。

しかし私は止まらない。

「…………ぶつた切る……ツ」

「ふふ、物騒だねえ」

森の奥へ笑いながら逃げるド変態。私はブレザーガが落ちないよう片手で押さえ、今度こそ仕留めるとばかりに空いた手で鎌鼬をぶつ放しながらド変態の後を追いかけるのであった。

誤字・脱字などあれば報告して下さる有難いです

（ 、 、 、 、 ）

050 最終手段は力押し（前書き）

本日もどうぞ宜しくお願い致します。

「……………ハア……………ツ、……………ハア……………ツ」

「ねえ、ひいちゃん。さっきから躊躇いの欠片もなくぶつ放していく  
れちゃつてるけど当つたらいくら俺でも血まみれだからね？」

「ハア……………ツ、……………何か問題が？」

「ないよな。寧ろ何と有意義な事か。何ならその後埋まつてくれても構わない。」

息切れしながら私はド変態を睨んだ。何だコイツは。息切れどころか息一つ乱していない。変態といえば貧弱なイメージなのだが……最近の変態はこんなにも体力があるものなのだろうつか？

「ふふ、酷いなひいちゃんは」

「酷いと言いつつも何処か嬉しそうなド変態をドン引きしながら見る……………コイツは相変わらず半端ない変態つぶりをしているようだ。」

逃げるド変態を攻撃しながら追いかけ、気が付けば現在地の木々が空けたそれなりに広い空間に辿り着いた。雨は依然降り続けてるので地面はぬかるみ、走る度に跳ねた泥で制服が酷い事になつてゐる。それは別にそこまで気にしないのだが、同じく走つて移動したド変態の白い制服に何故か泥跳ねが一つもない事実が私を妙に苛立たせた。しかも、こっちが必死こいて走つている先で余裕を見せ付けるかのように両手をズボンのポケットに突っ込んだままというふざけた走り方をしたド変態……特性泥団子を投げ付けてやりたい。

勿論顔面に。

そんな事を考えながら私ははふはふと欠乏している酸素を身体に送る。ぬかるんだ足場の悪い道に足をとられる中、攻撃しながら10分程全力疾走してきたのだ。イグラントに来てからタチバナさんに扱かれて尋常でないくらい体力が上がったとはいえ、これは流石に堪える。

私は粗方必要分の酸素を取り込み終え少し呼吸が落ち着いたところで変態に向かつて手を突き出した。

「チョーカー返せ」

「簡単に返すと思つ?」

予想通りの返事に思わず舌打ちをする。

明らかにこの状況を楽しんでいる様子のド変態。経験からするにこの手合は一回こうなつたらこいつちのいう事など一向に聞く耳を持たないのである。

よつて、私が今から取れる手段は一つしか残つていない。

「返してもらひ」

「そう。力押し、だ。」

私は瞬時に出来る限りの魔力を練り上げて腕を勢い良く雜ぎ、特大の鎌鼬を繰り出した。

木々が空けた広いこの空間目いっぱい使つた巨大な空気の刃がド変態に向かつて飛んでいく。

「何度もやつても同じ…… つー」

私は横に払つた腕を今度は振り上げた。

白い翼をバサッと広げ、空へ逃げようとしたド変態の動きが止まる。

ド変態の足元に溜まっていた水が瞬時にド変態に絡まり、拘束したのだ。

私が水魔法を使ったのである。

水だからといって侮るなれ、圧縮させたそれは生身でどうにかできるものではない。

巨大な鎌鼬は大ダメージを喰らいそうなビジュアルだが、加減したので実はそうでもない。走っている時にぶつ放していたものより威力は弱いのだ。まともに喰らっても少しの間動けなくなるくらいなのである。

だから安心して大人しく切り刻まれろ。

そしてもう一度と湧いて出てくるな。

そう思つた時だった。

「…」

——ド変態の口が弧を描いた。

その瞬間、奴の目の前に護るように光の魔法陣が出現する。到達した鎌鼬はその魔方陣に弾かれ、飛散してしまった。

「うわっ…」

衝突の影響か、眩い光と強風が放たれる。  
そのあまりの眩しさに、私は目を瞑つて強風に飛ばされないように足を踏ん張った。

何とかやり過ごし、閉じていた目を急いで開けて前方を確認する。水に捕らわれていたはずのド変態の姿はそこになかった。

「！」

背後から気配がし、振り返ろうとしたが、それは叶わなかつた。先程の間に背後を取つたド変態に両手首を捕まれて身動きが出来ないのだ。

支えを失つたブレザーがバサリと落ちる。

「ふふ、折角綺麗なんだから隠さないでよ。……それにしても2属性同時に発動できるとはね。びっくりした。凄いね、ひいちやん」

何故か嬉しそうにそつ言つて変態。

確かに魔法は同時に一つの属性しか使えない死神が殆どだ。以前タチバナさんが死神全体で10パーセントくらいだと言つていた。だからあまり使うなとも言わたが……これは緊急事態。致し方ないと自分に言い訳をする。

まあ兎に角、確かにそれは貴重らしいのだが、お前が喜ぶ意味が分からぬ。

掴まれた腕を振り解こうと力を入れるのだがびくともしない。くそつ、この馬鹿力何とかならんのか……つ。

足技を繰り出したい所だが……それは出来ない。身体の支えが足一本になり不安定になつたその瞬間払われて寝技に持ち込まれそうな気がしてならないのだ。地面は雨が降つて泥だらけの状態だが……このド変態ならやりかねん。いや、絶対やる。

寝技に持ち込まれたら今朝の再現になつてしまつ。あの時は足技で何とかしたが、今回も出来るとは限らない。足を押さえ込まれた

らお仕舞いだ。……考えただけで背筋が凍つた。

「……、離せ変態ツ」

「ん? 何?」

「 ツ」

手も足も出ないので残った口で抗議するが、直ぐ傍で聞こえたエロイ声に思わず押し黙る。

顔を近付けんな。耳元で喋んな。鳥肌がヤバい。寒気がする。  
素性を知らない他の女の子に同じ事をすれば多分腰砕けだろう。  
だが私にされたって気持ちが悪いだけだ。他でやれ。いや、やつぱ  
やるな。迅速に土に埋ま……つて、ぎゃああああああツ――！

「、やめつ ツ――！」

首筋に息が掛かった。

――その時、背後に風が通つた。

サクツと何かが刺さる音と共に拘束が解かれる。

力をこれでもかと入れて抵抗していたので支えを失い、思いつき  
り前に転んのめつたが、たらを踏んで何とか堪えた。……危ない、  
泥んこ塗れになる所であった。

何が起きたんだと視線を走らせると少し離れた場所から私の後ろ  
をニヤニヤと気持ち悪い笑顔で見ているド変態の姿があつた。

そして先程までド変態と私が力比べをしていた場所に視線を遣る  
と、見覚えのあるダガーが深く突き刺さつている。

――「レはツ――！」

私は急いでそれが飛んできた方向に向き直る。同時に、僕らのヒーローが来たとばかりに嬉々としてその救世主の名前を呼んだ。

「キリコ」

「ウ？」

最後まで言えなかつたのは彼を纏う禍々しい程の黒いオーラが原因である。

「あれれ？」

「物凄い、怒つてゐる……？」

050 最終手段は力押し（後書き）

誤字・脱字などあれば報告して下さると有難いです

（ 、 、 、 、 ）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2184r/>

---

死神亞種

2011年10月6日23時29分発行